刻あり、黑漆にて書きたる文字あり、歐文あり、馬來文字あり、漢字あり、梵字あり、日本の神社・佛閣の落書の如く漢字の彫刻壽星巖などは殊に目に立てり、「我國の人に見せばや深山路の光る巖の秋の景色を」などの國風を書きたる、或は日本長崎縣何々郡とか、「靜子」・「律子」・「岡田久子」などの女文字もあり、「日本萬歳」などの文字もあり、馬來の熱國に恥を賣る娘子軍の手蹟と思はるゝも、遠く國を離れては是等日本人の筆の跡を見ても一種の感興を催せり。

紅樹林

ポート、スキッテムハム

茲にて宿の主婦が心籠めたる辨當など開き、連れ立ちたる寫眞師の撮影などして半日の清遊を爲したるは旅中の一興と云ふべく、日々東奔西走する間に初めて心ゆるやかなる心地しぬ。

木に登る魚

滯在中ポート、スキッテムハムの港見に行く、市より汽車にて二十七哩、クラン海峽の西に在り、港の長さ一哩半、幅四分の一哩、深さは退潮の折に五尋にて、棧橋の設備あり、現今市街は微々たるも將來の發展思ふべし、此附近はマングローブ林多く、十五年の輪伐法を取り盛に薪材として伐り出せり、汽車汽罐用には主に此薪材を使用せり、此林木を見んとて泥地を過ぎしに、臺灣にも多き「トビハゼ」盛に泥土を這ひ廻り居れる中に六七寸の大なるもの蛭木の枝に登るあり、珍らしければ土人に命じて捕らせしに、三十仙ならずばとて辭するを强て泥に入らしめしに、半身を沒して漸く一尾を得たり。

鐵道驛の花

此港にタミル人移民收容所あり、余の行きたる時は丁度多數の上陸者ありて印度兵之を護衛(寧ろ監視)せり、老若男女の群居する樣一奇觀なれば同行の某氏携帶寫眞器を向けたるに、係員手を擧げて之を拒めり、然れども此時已に遲く移民狀態は「カメラ」の內に撮れる後なりき、此市街の並木は木麻黃にて能く茂りて涼しげなり、馬來半島の鐵道各驛は盛に花卉を飾り、或は庭を作り、或は鉢を並べたり、植附けたるものはクロトン最も多く、鉢は羊齒と「コロカシア」の類なり、或は「新渡戶葛」を棚に這はせたるも多し、兎に角停車場に此花木あるは旅客を慰ひる良き方法と云ふべし、鐵道局にても盛に奬勵し、年々之を品評して賞金を與ふる由、臺灣にても此點には已に注意し居るは嬉しき事なり、猶我國殊に臺灣にて盛に奬勵したきは窓園にて、即ち鉢植を緣先或は屋外に並ぶる裝飾なり。

並木

吉隆坡の並木は主にアメリカ合歡にて青龍木も交れり、芝草は半島孰れの處にても臺灣に多き「沖繩道芝」なり、如何なる種類にても芝草は刈込みさへ怠らずば野生種にても良種類あるべし。當市並木の內に木麻黃もあり、綿吹介殼蟲らしき介

市場

蟻附着せり、市場には度々行きたるが果物にて臺灣の五斂子の一種にて「リンビン」と稱するものあり、最も多きは「マンゴスチン」と「アボタン」にて「ナンカ」も亦少からず、之は波羅蜜の一種にて長形のものなり、「アボチク」と稱する柿に似たるものあり味極めて甘し、蔬菜類にて變りたるものとては「サイメラ」と云ひ即ち落葵（ツルムラサキ）を賣れり、臺灣にては野生のものなり、十角絲瓜（ヘチマ）は支那人一般に賞用するもの〻如く、此地方にて栽培する慈姑は葉稍〻細く塊莖も長細し。

博物館

博物館は建築も新らしく小ザッパリしたる建物にて、動物鑛物土人蕃族關係のもの多し、館長ロビンソン氏は動物學者にて鳥專門の人なり、數度見物せるが番人は印度人なり、陳列品中余の記憶に殘れるもの多く、馬來の穿山甲は臺灣のものと酷似し、「ジャングル、フォル」は紅頭嶼の野鷄と同種なるべく、臺灣の五色鳥も在り、「ラタス島にて先年採收したる海鳥の一種にて「ブリゲート鳥」と名の附けあるもあり、鳥類にて珍らしく思へるは「ビサ鳥」の種類にて、彩色佛法僧に似て更に鮮かなるものあり、暹羅にて見たる人喰鳥は「オトギブス、カルバス」の名あり、爬蟲類にて名物の大鰐は市中の川にて捕りたるもの〻由、蛇には毒蛇・大蛇・變色蜥蜴などあり、蝦・蟹には隨分と種類もあるが、龜類は十九種あり、蛙類にては角狀の突起ある大蛙など面白きものなり、哺乳類には猿猴の種類多く、野猪、ナマケモノ・ヤマアラシ・栗鼠の各種、熊・虎・豹・鹿あり、人類學上の陳列品中目立てるは武器にて、槍は日本のものに似、刀類は中々に種類多し、サカイ族の獵器なる吹矢の筒及矢は面白きものなり、之は毒を塗るものと聞く、農具の中に堅木にて作れる鍬あり、石器・鐵器・漁器・彫刻・織物・纖維編物の類なども能く見れば面白きもの多かるべし。一體の設備は未だ行屆きたるとは見えざれども動物は能く蒐集されたり、昨年中の觀覽者三萬人一年の經費約八千弗なりと云ふ。

本製の鏃

公園

公園は面積百七十英町あり、丘陵起伏し、泉水あり、園內各種の植物花卉を植ゑ日蔭植物室あり、一年の經費凡そ八千弗なり、夕方英國人は家族を携へて自働車・馬車にて來り集まるもの多く、市民の納涼場なり。

日本人墓地

一日市外の日本人墓地に詣る、余は暇あれば墓地を見て邦人が外國に逝ける死者に對する注意を窺ひ知らんとせり、此地の日本人墓地は生垣にて一區劃を爲し馬來人の一戶を其內に構へしめ掃除を爲さしめ居り割合に能く手入行屆けり、番人の俸給は月十二圓を給するのみにて他に經費を要せずと云ふ。

塚墓幾十、墓碑あるは一家の戸主主婦のものなる可く、所謂娘連の客死せるものは木標既に朽腐したるものさへあり、土塚新にして位牌の新なるもの多し、狂ひて死せしもの、自害せしものなどもあり、遠征萬里の異郷に變死せる者の如きは憐むべきなり。

小面積の護謨園

聯邦州内吉隆坡スレンバンを中心として日本の經營する護謨園は笠田・久米等の一千英町を筆頭として、三百又二百英町の耕地を有するものあり、余は大面積の分は見たれば、更に最小の耕地を有するものにて見るべきものあらば實地の視察をなしたしとスレンバン滞在中笠田翁に問ひたるに、吉隆坡の古賀の耕地を見給へとて紹介しくれたり、今日午前此人に案内せられ市外數哩の處に力車を驅りて尋ね行きたり、此人の耕地は七英町にして瓜哇人二人を常雇として耕作を爲さしめ主人自ら監督するにて、元と馬來人の地所を購入せしものにて四年前より之を創めたる由、二十二呎五吋の距離に護謨を栽る中に十呎の距離にリベリヤ種珈琲を植る、又樹下を利用して苗床を作りて護謨苗を育成せり、手入最も周到にして除草に全力を盡し、護謨樹の如き毎日其根元を掃除し以て蟻の害を防ぐ、其生育狀態極めて佳良にして耕地内の樹木殆ど同一程度に生育し、余が見たる耕地中此の如く揃ひたるもの無き程なり、種子は一英町約五萬粒を播き、種子は八分目ばかり土中に埋め茅草にて之を被ひ毎日一回水を注ぎ、發芽後茅を除き去り三ヶ月間は最も注意して除草を爲す、而して發芽歩留は八割にして發芽後一割の枯損を見積れり、若し耕地直播の場合には七分減なり、植附穴堀は普通底を一呎側面表面一呎半となすもの多きも、寧ろ底を二呎半とし表面側面を二呎とする方好結果なるが如し、現今種子一萬粒十七弗内外、苗木は千本廿五六弗の相場なりと云ふ。

護謨植附樹數

四十二年	八月	百五十本
	九月	四百八十本
	十一月	五百〇二本
四十三年	十月	百〇八本
計		一千二百四十本

珈琲樹數

四十二年五月植附現在數　二千二百五十八本

經費

四十一年　三百九十五弗　七英町買入代並手數料共
　　三百二十三弗八十三仙　六月より半季人夫及び器具代
四十二年　四百八十八弗三十三仙　一ヶ年分人夫賃、地租（瓜哇人夫常雇二名月廿八弗地租六弗三十仙、一英町一弗）
四十三年　四百五十七弗七十六仙　同　上
四十四年　二百一弗五十七仙　前半季支拂高
　　計　一千八百六十六弗四十九仙　三年同總支出

右の計算にては一ヶ月五十一弗餘一英町一ヶ年八十九弗の支出なれば、經費は普通大地積の耕作二百五十弗乃至三百弗なるに比し甚しく高價の支拂を爲すものなるも、珈琲の如きは已に本年初めて結實し、三年目に一本より三斤四年目に五斤六七年に六七斤の割合にて收穫し得べく、護謨も普通の計算にて五年目より四分一封度六年目に二分一封度七年目に一封度の護謨を生產するものとせば相當の利益を得べく、且つ本年の如き苗床を樹下に作りて苗木を賣り出したることなれば是亦相當の收入あり、集約に過ぎ殆ど園藝農業に似たる此人の此小區域の事業は多大の興味を以て視察したり、尙同人はスレンバン方面に二百英町の租借地を得て開墾に從事せりと云ふ、此人の耕地の隣りに同じく日本人の經營せる小地積の護謨耕地あり、二十呎の距離に四隅護謨を植ゑ其中央にマンゴスチン一本を植ゑ、四英町の內に護謨千百本マンゴスチン五百本の割合なり、此邊に又椰子と珈琲を混作するものあり、古々椰子の一種矮少にして「メーン、カラバ」と稱するもの其實小なれども三年目より結實する種類あり。

古々椰子の一種

吉隆坡より太平へ

九月一日　朝八時の急行列車にて吉隆坡を出發す、厚德會長大河氏、前會長井上氏、南洋新報記者朝賀氏など態々見送らる、知らぬ他國に在りて邦人の親切なる送迎を受くるは何となく嬉しきものゝ一つにて、折柄追かけ來れる寫眞師中馬氏の紀念にとて列車を背景にしたる撮影を爲し、心地よかりし此都市に別れを告げ、「ラチツサン」式の政廳の黃色染みたる建築も、眞白き印度寺も白壁の軒續きなる支那街も、アタブ葺きなる馬來の民家も瞬く間に我眼界を去り、椰子の林に入りて護謨の森に出て、かくて幾個の驛を過ぐる程に心も落着きて馬來タイムスを讀むにた

印度移民

また〻印度移民に關する記事あり、彼南に渡航し來れる南印度の移民は一月より六月まで五萬四千六百九十二人、內移民局より無料乘船券を與へて渡航せしめし勞働者四萬五千六百九十八人にて、昨年の同期よりも一萬四千百九十五人の增加なり、但し同期中本國歸還の者二萬五千百十四人ありしと云ふ。

序ながら書き添ゆるが、彼南上陸の印度移民は昨年は四萬九千八百十七人一昨年は五萬四千五百二十二人再昨年は六萬五百四十二人にて、馬來半島全體に上陸したる昨年の印度移民は七萬五千三百二十二人にて、年々の平均は支那移民は十七萬人印度移民は八萬人の割合なり、馬來の部落は住宅のほとりに必ず檳榔あり、ドリアン樹あり、床を高くして草葺きしたる樣子臺灣の蕃地部落を見る心地すること度々なり、

花好の驛長

ダンジョンマリン驛の庭は目さむるばかりに美はしく飾られ、植木の配合、軒の垂鉢中々に趣きあり、庭を仕切れる煉瓦は綠色に塗りクロトン、アカリハの數々を植ゑ並べ、其間に人造石の泉水を作りて水玉蘭をあしらひ、垣には新渡戸カツラ(アンチゴノン)を這はせ、蘭石松、麋角羊齒を釣り下げたり、此驛長の手を込めたる此庭の設計は常に多くの賞金を得るなりとぞ。

處々に印度護謨即ちランボンの植附られしものを見る、然れどもバラの生育盛なるを以て新に栽ゑ附けらるゝものなし、某驛より一等室に護謨園の役員らしき英國人入り來れるが、一人の日本婦人を伴へり、華美なる服裝を爲せど何處となく卑しき風あるにてお里も知れ、唐撫子を紅に染めたる帶地は婦人の服裝などには無頓着なる余の目にも色の配合あまりに調和を缺けり、二等室には時々日本婦人の影を見るも一等室にての同室は始めてなり。

イツポ市

タップロード驛の邊には「ジャガタラ水仙」を夥しく植ゑ込みたるが、其花滿開にして美はしきことなり。

午後市保市に着きたるに、旅宿に電報かけ置きたるに出迎の人も見えぬにまづ、支那車夫の車に乘りは乘りたれど、言語は通ぜず行先きは分らず何處ともなく曳かせ行き市街を通り行く內に日本雜貨の看板かゝげたる店あり、道を尋ねんものと店に入れば先に同車したる婦人も居るに、先づ宿の所在を問ふに、其店の奧より主人出て來り、「今日の御出でしたか」と馴れなれしき挨拶に甚くどさも拔かれたるが、能く見れば吉隆坡にて逢ひたる山田と云ふ人にて店の若者を案內にと附けくれたり、同國人の親切はかゝる時にはうれしく思ふものにて、金田旅館に着けば、宿の主人今停車場より歸りしところにて、列車中をさがしたれど見當らざりし

知友の病臥

との申譯なり、扨て二階の客室に通れば別室に病褥の人あり、こは又意外神戸より同船し新嘉坡にても吉隆坡にても同宿の緣深き藤田組の船本氏マラリヤ熱にて一行に遲くれて靜養するなり、互に奇遇に驚き、旅の辛さは病の床に染々と感ずるものとて今宵は病も忘れたりなど悅びて語り明しぬ。

九月二日　市保にて見物すべきものは石灰石の洞穴と大理石の切出し工場、又こゝより十三哩のトロノーの錫山等あれど、余の見たしと思ふものもなければ今朝は七時の汽車にて北に向ふ、線路に近く石灰石の岩山聳え立ち、綠林の間に白色をなせる岩石美はしく旭に輝けり。

臺灣朝顏

濕地の水溜りの處に龍舌草に似たる植物多く茂る、學名「バンダ」と稱するものなり、藪蔭に今を盛りと咲ける臺灣朝顏夥だしく、之を見て臺灣なつかしき心も出づるなり、錫山所在に多く皆支那人の手掘りなり、處々に護謨の林はあれど中部ほどに見えず、左も右も斧の入らざる森林多し、コーラカンサーの川を渡りて同じ名の驛を過ぐ、茲は前の理事官ビウロー氏の始めて栽ゑつけたる護謨の木ありと聞き

始めて植ゑられたる護謨樹

兼て下車の望ありしかど、今日は土曜にて太平の博物館を見る時間の都合あれば素通りす、山あり初めてトンチル二三あり、下れば平野開け水田も見ゆ、十時半太平

太平

驛に下る、八幡旅館の主人出迎ひくれたれば直ちに車を急がせてペラ州立博物館を觀る、吉隆坡のに比すれば設備もよく陳列品も多し、係長シームンド氏案內しくれたり、此人は動物採集家にて動物の部門は說明甚だ叮嚀にて、之は臺灣にあるか此種類は幾何種ありやなどの質問續出し、余も動物學者にあらざれども博物館を監理したる御蔭に此等の問には正當に答へ種類異同の區別などは明瞭に談り聞かせ得たり、果物模型なども能く出來たれど技術は臺北博物館の方優れり、剝製は支那人を助手として盛に製作し居りその技術は中々によし、茲にて目立ちて人を驚かすものは大象の頭骨にて、骨骼其物は兎に角其象の物語の博物館的なるぞ面白き、時は一千八百九十四年の九月十六日鐵道創設の折汽罐車の森林の間を進み行くに、たま〳〵線路に躍り出てたる雌象一頭遂にこれに觸れて斃れたり、その翌くる日に又もこゝを通るにこはそも何事ぞ一頭の雄象線路を破毀し荒れにあれ居れるが汽罐車目掛けて進擊し來り、忽ち之に衝突してさしもに重き汽罐車と連結せる幾臺の運送車を顚覆せしめて象も遂に斃れ了んぬ、あゝ是れ其妻なる雌象の仇討せるものにて、此の二つの頭骨こそかゝる紀念の陳列品となりたるなれ。

午後宿の主人を案內に水道水源地を見る、町の東、山の中腹に瀧あり、これを集め

て給水するものにて、此邊一體にグッタゴムを栽ゑたる保存林あり、公園は規模中々に大にて泉水廣く水清し、此町は支那の名あるほどにて主に支那人なり、市街の並木は青龍木にて巨木町家を被ひて市街は日蔭なり、並木としては立派のものなれども、風強き時に倒れて家を毀つ恐ありとぞ、停車場通りには雜多の樹木を混植して並木としたるが、中に八年生のバラ護謨の木あり、人目にかゝらぬ半面は日々採液しつゝあるなどは隨分と實利的なり。

護謨の並木

此夜町の日本人の重立てる人々來り訪はる、其内に臺灣に十二年も居りたる人もあり、町には日本人七十人あり、其多數は勿論例の女連なり。

日本人の勞働者

九月三日　中川某氏の案内にて馬車を驅ること九哩なるヤムセン護謨會社の栽培地に到り日本人勞働者の狀況を見る、こは中川氏の下に働く一隊にて總員二十六名、草葺の床高き小屋の内に居住し此護謨園の受負仕事をなすにて、主に伐木・燒拂・除草等なり、勞働時間は朝七時より午後は五時迄にて間に日中二時間の休みあり、給料は月二十一弗にて食費は凡そ五弗を要すと云ふ、年頃は十九歲より三十八歲迄の人々にて中學程度の學力あるもの多く警察官出身などもあり、山口縣人最も多しと云ふ、兎に角各地を遍歷し來れる人々のみなれば監督にも骨の折るゝ

模樣にて、最初は熱病患者多かりしも近來は病人至て尠しと云ふ、伐木・燒拂は一英町二十五弗にて除草は十八弗以下なり、ララン草の蔓延せるところは最も骨折るゝとて此位の賃金にては引き合はずと云ふ、日本人勞働者の成績としては餘り面白しとは見えず、兎に角護謨園に日本人の勞働者を使役することは大に研究すべき問題にして、採液業以外には一考すべきことなり。　さて此勞働者は馳せ集りの連中を一團となす事とて使役の上に容易ならざるの困難あるべしと思はる、序に此護謨園を一巡りす、會社役員の英國人を訪問せしに、日曜の事とて朝より酒に醉ひ、日本人は酒盃を擧ぐる勇氣なかるべからずなど管卷き、强て麥酒を勸め日本萬歲など唱ふるに閉口し、かゝる處に長居は無用と匆々に引揚げて四年生の護謨園林を見る、太きは幹の周圍三尺二寸あり、二年生も太きは一尺二寸あり、此護謨林は二十尺距離に植附けたり、印度人の苦力監督を訪ひしにこゝも休日とて御機嫌の體なり、水を乞ひしに牛乳一盃を與へくれたり、連れなる人の寫眞機持ちたるを見て我愛牛を寫し給はれよとの懇願に、牝牛と仔牛を引出し幼き五六才の娘をして其口綱を執らせたり、娘と云へば美しげに聞ゆれど御國柄とて色は飽くまでも黑く漆の如くに光り、紅がら色なる更紗の風呂敷形のものを腰に卷き又肩に掛け

印度牛と印度娘

たる有樣に、父も母も可愛ゆき限りと裾を直し髪をなて附けなどして今日をはれと着飾らせたる心なるべし。此邊の川には鰐多く、此頃も英人一匹を射留めける に誤て足を嚙まれたりとか、藪蔭に太き足痕あるは犀なりと云ふ、兎に角かゝる恐ろしき物の徘徊する處なり、午後馬車を急がせて太平に歸る。

高地の療養所

太平の我宿より東を望めば見上ぐるばかりの高山ありマクスウエルの峰なり、その頂上近き處を切り拓き家の軒建て並べるを見、且つは其處に植物試作場もありと聞き、その道筋など尋ね問へば凡そ十哩もあり、中々の嶮坂なれど十弗の賃銀を拂へば轎にて登り得べしと云ふ、轎とは云へど其實椅子を竹の竿に縛り附けたるものなりと云ふ、かゝるものにて登り得べき山ならば日頃の健脚も車の旅のみにてうなり居れば膝栗毛を試みるも面白かるべし、苦力一人雇へよと命じたるに、かゝる折ならでは此山の見物も出來ねば店の若者召連れ給はるべしと宿の主人云ふ、又此企聞きて御供願ひたしと申出てしは近頃開業せる寫眞師の內藤と云ふ人なり、深山路には道連れ多き程よけれとて同行三人登山することゝなりぬ、九月

四日の朝の珈琲すませて卷脚袢に足を固め、日本ならば草鞋掛けと云ふ處なれど外國なれば靴のまゝなり、近頃は日々の雨あればとて雨外套を携ふ、宿を立出てしは七時なり、町を出てゝ道を東に取り山の登り口に到る、石の標に九哩と記せり山頂よりの距離なり、百四十二呎の標記あり海拔の高さなり、これより登坂にて道路は廣く迂回屈曲所謂螺旋狀に山を廻り行くなり、喬木道を挾みて眞直に伸び樹下は日の目も見えざる大森林なり、泉流處々に流れ岩石は苔蒸せり、登るに隨ひ道急にして森愈〻深し、たま〳〵急雨至る、避くるに蔭なく濡るゝに任せて登るほどに雨水肌に及ぶ、九時半二千尺の處に出づ、林切り拓かれて階段の畑あり茶園の跡なり、往時政府の事業として茶樹を栽培せる處なり、名も「テー、ガーデン」と云ふ、官設の宿舍あり、數室ありて人々の宿泊に資せり、されど今は馬來人の番人あるのみ、茶を乞ひて携へ來れる麵麭を取り出し食事す、時に一人の白人雨に濡れて入り來るあり、其人余の採集鑵を見て曰く、君は日本の紳士なるべし、植物採集を爲すの人か、希くは君の名刺を與へよ、余曰く然り、山上の栽培園を見んが爲めに登るものなり、君は之に關するの人にあらずや、曰く然り余は監督者ウードなり、君はドクトル早田を知れりや、余はキューに於て逢へり、余曰く然るか、早田君は余の親しき學友なり、曰

く山上必ず余の寓居を訪へよと、氏は急ぎ登り行きぬ、此地多く薔薇を栽ゆ、又バラ護謨の試植あり、三年生なりと雖も平地の二年生にも劣れり。

山上の花園

これより急坂更に急にして、たま〳〵近路を取り嶮惡甚だ艱む、午後一時半林の切り開かれたる三千三百七十九尺の處に出づ、洋屋四五彼處此處に建て並べらる、險崖を削り巧みに形勝の地を選みて家を造り、自然の岩石を利用して花卉をあしらひ、階段を作りて幾段の圃塲を爲し色樣々の花を栽ゆ、清き流は小溝より溢れ淙々として聲あり、巨木の切株に這はせたる蔓生植物は紅紫の花を著くるあり、木生羊齒の自然林の蔭には朝顏の紫花あり、サルビヤの紅花あり、日光受くる陽地には天竺牡丹あり、孔雀菊あり、薔薇園あり、忍冬の棚あり、實に千紫萬紅艶色を鬪はし山上より之を望めば宛然たる御花畠なり、近くは山々峯々白雲其腰を周り雨後の翠色更に濃く、遠くはペラ州を一目に見下し西はマラッカ海峽手に取るが如く其景色心も語も及ばぬ程なり、又蔬菜の各種を栽う、而して花も蔬菜も多くは英國種にして、故國の花戀しきはいづれの國民も同じ心とて山上三千五百尺の處に此試驗圃を設けしなるべし、山上に總督の別莊あり、病者靜養所あり、清掃誠に心地よく、飲料の水も我國ならば筧と云ふ處を御國柄とて流石に鐵管にて引けり、色黑き印度人の番人あり、馬來語も英語も通ぜざるに手眞似にてコップを借り携帶の生乳の鑵を切り麵麭にて食事す、此處は海拔凡そ三千五百尺、氣溫は七十七度なり。

やがて先きに約せるウード氏を訪ふ、書齋に延かれて相談る、氏は馬來農業雜誌を繙き臺灣植物目錄の著者の名を示し此著者は君なりやなど問ふ、標品室に到り壓搾中の腊葉を見る、山中珍奇の植物多し、氏はキュー園出身にして机上新刊の雜誌極めて多數なるを見讀書の好樂境なるを羨み相談りて時刻の推し移るを知らず、卓上新鮮の蕃茄多し、余其佳麗なるを讃むるや直ちに數十個を籠に盛りて贈らる、余の別れを告ぐるや、食堂に延き多くの酒壜を指し君は其何れを取るやと問ふ、余はむしろ曹達水を得んことを望むに、給仕を招きて一杯の生乳を持ち來らしめミルク曹達を饗せらる、握手以て再度の告別を爲すや、氏更に山を下り其日蔭室に導き培養中の蘭科植物の花あるもの盡く之を摘み採りて余が採集鑵に入れしむ其厚意感謝するに堪えたり、乃ち相並んて紀念の撮影をなし二時半山を下る、此山上園は聯邦州農事試驗塲の支塲にて一年の經費凡そ八千弗なり、尤も道路の手入費も含めり、日の中に森林を出てんが爲めに急ぎ降るに、一行中疲勞甚しく兎角に遲れ勝なる人あり、切りに余の健足を羨みて辛うじて余に續く、日影いつしか西に

尾長猿

傾き暮色到る、忽ちに頭上の樹上物騒がしき音に驚き見上ぐれば十疋ばかりの尾長猿人影に驚きて枝より枝に木より木に飛び行くにて、五六尺も離れたる木の枝より他の木に飛び移る樣の輕快なるにアレヨ〳〵と感嘆する間に遙かの樹の間に逃げ去りぬ、山中に暮れては猛獸の恐もあり、急ぎに急ぎて日沒頃漸く麓につけば、宿の主人餘りに余等の歸り遲しとて人力車引き連れて迎ひに來るに逢ひ、二十哩の山路につかれたる身は、かゝる時に人の情は殊更にうれしく覺えたり。

山中植物の珍奇なるもの多く、三千尺內外の處に椰子樹の種類多し、孔雀椰子の一種數十尺に伸びたるあり、岩際に生ずる眞紅色の花ある蔓生植物にて園藝植物としても價値十分なりと思はるゝものもあり、清水の邊りには釣舟草の一種あり、岩煙草に似たる珍草多し、餘りに美はしき蔓草ありて其花眞紅色なるが拾て去りがたく之を根の儘に一株携へ歸りしものもあり、これ苦苣苔科の一種なり。

九月五日　太平を發し、再び汽車にて吉隆坡を經バトテカの樟樹試植地を見、同八日新嘉坡に歸れり、此行十日の豫定にて立出でたるに見聞興味多くして其倍の日數を費しぬ。

馬來半嶋の護謨栽培

借地料

汽車新嘉坡を發して彼南に至る、三百九十哩の沿道、到る處に護謨園を見たるが殊に吉隆坡附近は最も盛大なるものにて、其年を經たる樹林は天然の森林に入りたる如き觀をなすものあり、而して汽車中坐ながらに護謨栽培の凡ての經過を見るを得るは頗る感興を惹くに足るものあり。

開墾

馬來半島は斧の入らぬ原始的森林多く、森林にジャングル即ち喬木林とブローカー即ち矮樹林あり、土地の拂下料は三種に分れ、一等地は國道又鐵道沿路にて一英町三弗、二等地は二弗、三等地は泥炭又沼澤地にて一弗、外に地積の廣狹に依り測量費二弗以下二十仙迄を拂ひて九十九年の地上權を得るが、ジョホール州は年限を九百九十九年に延期せり、地租は開墾より六年目までは一英町一弗、其後は第一級地四弗、二級地三弗より（バハン州のみには稍〻少額）ジョホール州は六年目までは五十仙、其後は二弗五十仙なり、拂下を受けたる森林は先づ之を伐採して其儘に放置し十分乾枯したる時を見計らひ火を放ちて之を燒き拂ふ、この光景は極めて壯快なるものにて、黑煙空を覆ひ火炎天をこがす有樣ものすごき程なり、此燒拂の方

法の巧拙に依りて後の掃除植附に影響すること大なるものにて、能く燒き拂ふことは栽培家の最も苦心する所なり、暴風の被害少き半島の事とて木は眞直に伸びたるが多く、有用の木材も尠からぬことなれば徒にこれを燒き棄つる事如何にも惜しき樣にも思はるゝが、運搬の費用を要することゝて唯之を燒き拂ひて掃除する事さへ容易ならぬことなりと云ふ、かくして耕地の掃除をなし終れば區劃を割り當て道路を拓き排水路を作り、十五呎乃至二十呎の距離に別に苗床にて養成したるバラ護謨の苗を植附け、除草の手當を怠ることなく五年六年に及べば採液に適する太さに生育するなり、かくなる迄の費用一英町二百弗乃至三百弗を要す。

移植

護謨樹　採液は早朝これに着手するものにて、日中は其流出盛ならず、然れども午後四時後夜明に至る迄流出す、一般幹圍十八吋に達する頃採液を始め、採液の際は多くは梯子を用ふることなく苦力直立して手の屆く所を度とし種々の形式あるタッピング、ナイフを用ひ先づ垂直に一線を切り下げ、其右側に斜めに肋骨狀に平行せる一呎以内の間隔を置きたるものを淺く切り、之より流出する乳液は垂直線に注ぎて流下するなり、之を受くる爲めに亞鉛製受器を切口の下端樹皮中に押込み、其下に亞鉛製又は陶器のコップを置く、此受器は先づ少許りの水を入れて乳

採液

護謨の採液

生護謨の製造

バラ護謨果實

生護謨の乾燥

液の附着を防ぐなり。

かくして或時間の後滴りたる乳液を集めて調製室に送り來り、其採液を漉過して蘆芥を去るに一滴も之を失はざる樣にせん爲めにコップを洗ひ罐又は容器を洗ふ事極めて丁寧なり。

調製室には一長卓横たはり卓上多數の琺瑯質塗鐵罐あり(一罐一クォルトを容る)之に乳液を入れ極めて少量即ち二三滴の醋酸を加へ(支那陶器の大なる瓶に乳液を注ぎ入れて醋酸を加ふるもあり)翌朝まで放置する時は護謨は白色にして柔軟海綿狀に煎餅形をなして凝固するを見るべし、此物頗る水分多きを以て之を亞鉛卓上に載せ棒にて輪展し又壓搾器にかけて水分を搾出し、之に極印を附して乾燥室に移す、乾燥室は簡單に階上の隙間ある床板に懸け又網を張りて垂れ下げて風乾すれば數時間にして褐色を帶ぶ、又室内を椰子殼を燃したる煙にて蒸燒するものあり。かくする事一ヶ月以上にして十分乾かして包裝す、包裝には雜木の茶箱又は日本の樅材を用ふるもの多し。

採液したる樹上多少の屑護謨を生ず、此もの品質良好なり、是採液の際樹幹に附着して風乾したるものにて唯だ之を引剝がすのみなり。

屑護謨は往々樹皮及塵芥を混ずることあるも、洗滌機にて之を洗へば容易に其混合物を除き去るを得べし、而して之を壓搾機にかけて板狀又は縮緬形となして乾燥せしむ。

馬來諸州護謨耕地面積と輸出額

年次	耕地數	植附面積	年毎植附面積	輸出量（封度）	價額（弗）
一九〇六	二五四	九九、三〇	四七、六〇七	一、〇三五、六〇一	三、三九三、四七四
一九〇七	三六五	一七九、三七	五五、五八一	一、九八八、八九	六、六七七、〇三一
一九〇八	四一七	二四一、一三八	六〇、六三六	三、一八六、〇九九	七、四九八、二五八
一九〇九	五三四	二九二、〇三五	五〇、八九七	六、一一三、〇三三	一九、八九四、二八七
一九一〇	六三二	三六二、八五三	七〇、八一八	一、二二四、五六四	四八、四〇五、四七一

一九一一年には馬來半島の護謨栽培地積五四二、八四七、一九一二年には六二二、〇七〇英町に達し、產出額十一年に二四、九〇四、〇四三、十二年に四二、四六二、四〇二封度に達せり。

一、世界に於ける護謨の生產及消費額概算

護謨に關する統計

產地	年	一九一一	一九一二
馬來地方野生劣等種		三九、〇〇〇噸	四〇、五〇〇噸
馬來地方栽培ゴム		二三、〇〇〇	一七、八〇〇
中央アメリカ		二、五〇〇	二、五〇〇
アフリカ		一四、二〇〇	二八、五〇〇
其他メキシコ野生劣等種		二、八〇〇	二、七〇〇
合計		九、二〇〇	七、〇〇〇
合計		八八、〇〇〇	九九、〇〇〇

消費國	年	一九一一	一九一二
英國		一二、〇〇〇噸	一四、五〇〇噸
佛蘭西		一四、〇〇〇	一六、〇〇〇
伊太利		八、〇〇〇	九、九〇〇
露西亞		八、五〇〇	九、〇〇〇
日本		二、五〇〇	一、五〇〇
米國		一、五〇〇	一、〇〇〇
加奈太		四二、〇〇〇	四七、〇〇〇
合計		八八、〇〇〇	九九、〇〇〇

一九一二年の生産額を約十萬八千噸とし消費額を九萬八千噸と計上するものあり

二、價額

	一九〇九	一九一〇	一九一一	一九一二
最低	五、〇二志片	五、〇二志片	四、〇六志片	四、〇一志片
最高	九、〇八	一二、一〇	八、〇四	五、〇八

三、生産費（一九一一年）

ブラジル野生護謨倫敦渡	三、〇〇志片
馬來半島	一、一〇
錫蘭（十二年末）	一、〇〇
スマトラ	一、〇二
瓜哇	一、〇六

四、苦力勞銀

	男	女
錫蘭	七、五片	五、〇片
瓜哇	九、〇	七、〇

東洋平均	一二、〇

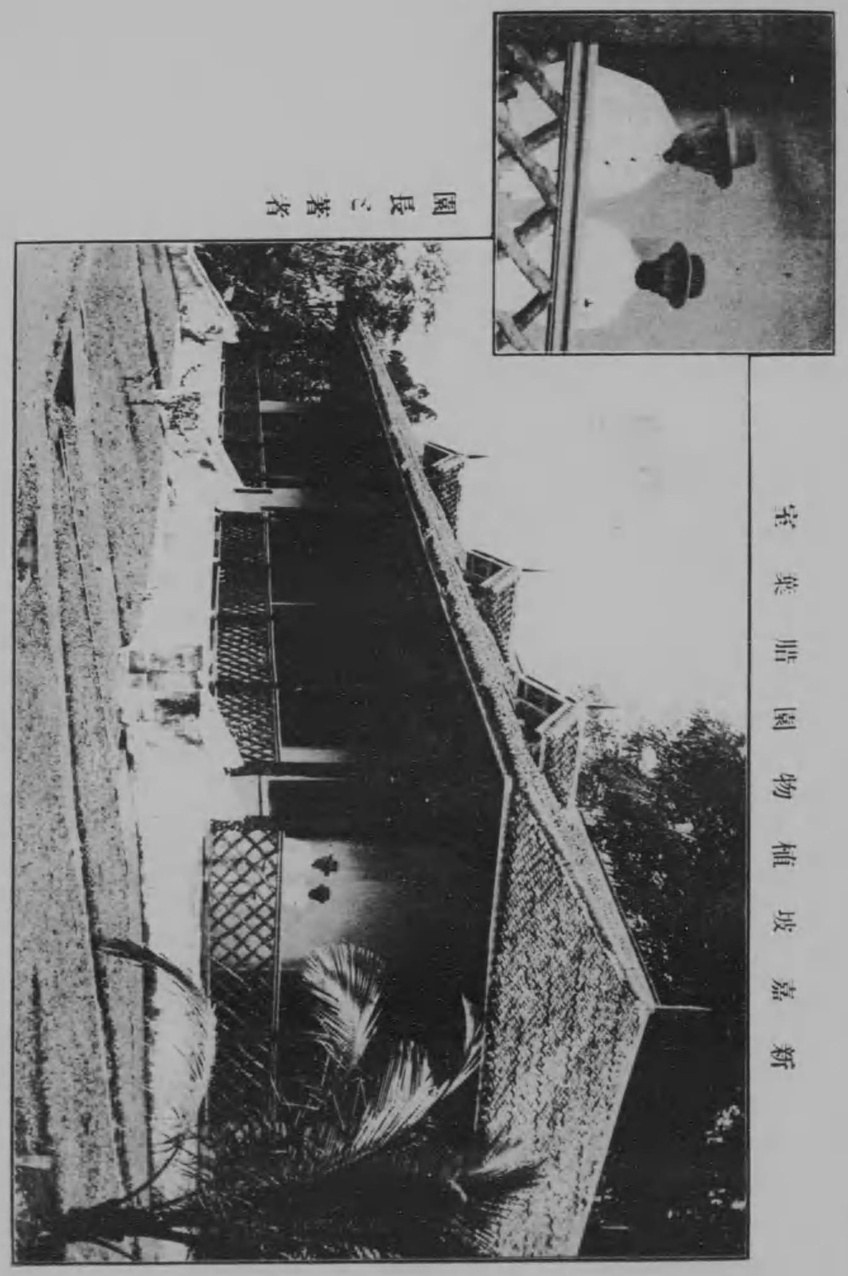
五、千英町護謨園經營費の一英町當（概算）

錫蘭（六年間）	三〇〇円
馬來半島（四年間）	二七〇
瓜哇	二五〇
スマトラ	二四〇

新嘉坡植物園長

新嘉坡の植物園長リドレイ氏は永く馬來植物の研究に從事し馬來植物志の著は已に單子葉編三卷を完成せられたり、氏は中老痟肉の人にして白の立襟に黑みがかれる羅紗帽を冠り籐のステッキを杖つき二頭の小犬を伴ひて忙はしげに歩み來り、直ちに植物園事務室に入りて机上に置かれたる信書を開き書記を招きて其處分を命じ、太きシガーをくゆらしながら腊葉室に入り來りて山積したる標本の間に身を投じて植物を檢し、甲を見ては乙を調べ、書を開き腊葉を引出して忙はしげに而も樂しげに研究を續け、其愛犬の飛び込み來りてふざけ廻るを叱りなが

ら仕事を爲すに、書記は常に來りて事務を打合せ園藝係の馬來人亦來りて指揮を受く、余は特に許されて自由に腊葉室に出入するを得たれば、先づ臺灣植物中の疑問ありしものを比較研究し、又馬來植物の有用種に就きて檢索を爲すに、偶〻不審の點あれば氏の卓前に進むに、如何に仕事に取り掛り居るも直ちに其の手を休めて余の質疑を聽き懇切叮嚀に說明し、自ら立ちて腊葉を引き出し書籍を開きて之を說くこと甚だ詳なるものあり、時には餘りに時間を費すことの多きに恐縮することあり、或時余が其の學名を知らんとせし臺灣の栽培植物(夜香花)を檢索するに當り、氏は二名の助手を招きて大に參考書を集め檢索甚だ努めて多くの時間を費し遂に我參考書にては之れを如何ともすべからざればキューに送れよと結論せるが如きことあり、かくて氏は午前七時より十一時まで事務と研究に當り、午後一時より園內の巡視監督を爲すを常とせり、氏は園務を視るの外政廳の森林局に關係し、又農業雜誌の編輯を掌るなど極めて多忙なる間に專門の研究に從事し多數の有益なる論文を出版せり、その勢力敬服に堪ゆ、余は氏より「南遲羅の植物」、「蟻植物の研究」、「比律賓島薑科植物論」等の論文を貰へり、余が先年プラタス島の探檢を爲せる際採集せる樹木中同島にては一種最も普通のものなるに其學名未詳にて困りた



新嘉坡植物園

園長の寫眞

るものあり、比律賓には所産あるべしと思ひメリル氏及フオクスヲルシイ氏の鑑定を需めたるも不明にて、今日迄此一種の植物不明なる爲めに同島植物に關する余の草稿は完結に及ばざるものあり、此度の旅行は必ず此種名を明かに定め得べしと心掛けたりしに、新嘉坡・暹羅にて此植物の一種を栽培して玩賞用となすを見てリドレイ氏に逢ふや先つ此名を問ひ「ビソニヤ」屬のものなることを知り永年の疑問を氷解せり、次に紅樹類の檢定を始めたるに、氏は時々余の仕事をのぞき込みてはそれを正し、それは如何になど意見を述べては敎示せられ親切なる態度遠來の余にとりては誠に愉快に感ずることにて、人に敎を受くる際其人の態度次第にては二度と敎を乞ふを遠慮する場合もあるものなり、余が調査の必要上「チャーレンジャー」號探檢報告を讀む必要ありし際、氏は此書我圖書室にはなきも「ラッフルス」博物館にはある筈なれば直ちに行きて之を見よとて館長に宛てたる紹介狀を與へられ、又出發の朝氏の出勤を待て此午後急に瓜哇行の便船に搭乘する旨を告げ暇を乞ひしに、ボイテンゾルグ植物園長に宛てたる紹介狀を書き、行けボイテンゾルグは實に學者の好研究地なり樂んで之を見よと、其紹介狀に曰く「此人は臺灣植物の研究家なり、今貴地に行き調査する處あらんとす、希くは研究上の便宜を與

へよ、殊に馬來植物に就て知る所あらんとする際は貴下厚配の下に其希望を成さしめよ」と

馬來名物

馬來の名物錫の金
それに名高い護謨ばやし
虎も出ますよ「ジャングル」に
「ニッパ」の藪には鰐も居る

第七章　瓜哇日記

瓜哇葡人の庭前

和蘭植物學者
ランヒウス氏と其手蹟

第七章　瓜哇日記

新嘉坡より瓜哇へ

瓜哇行

國を出てゝより早や三月、勉強して視るべきは視たる積りなれど思ひしよりも時日を費すこと多し、されど臺灣にて鍛えたる身は幸にも健康に故障なくて是れのみは幸と思へり。同船し來りし某々の知友今日迄凡その旅程を同じうせる三人の一組中兩人迄熱を病み時を失ひ費を損すること尠からず、友人の誰彼れ余を戒めて少しは休養の時を執るべしと勸む、余が身は幾分か疲勞を感ぜざるにあらねども未だ休養の必要ありとも覺えず、體力の續く限り所定の旅程を續けんものと、兼ねては印度行を先きにして瓜哇を後にすべしと思ひしが、少しく考ふるふしありて瓜哇を先きにする事となりぬ、翌日船出づべしと云ふ九月十四日の夕ぐれに此事取り極め、折柄同じ船にて藤田組の池原氏も瓜哇觀光の途につく事となる神戸以來の馴染とてこゝに圖らずも此談敵を得たるぞ幸なれ。

ランヒウス號

九月十五日　三井洋行にて蘭貨の若干を兩換し、午後二時半棧橋に着けるラン

赤道通過

ビウス號に乘る、バタビヤまでの一等船賃は四十五弗なり、宿の主人・番頭、藤田組の船本氏及び飯田・堺氏など見送らる、船はローヤル、パケット會社の持船にて一千八百八年の建造に係り、二千五百三十七噸の客船にて設備接待甚だ宜しく乘心地も極めて宜し、三時半出帆、風景能き新嘉坡の港もいつしか遠ざかりリオ群島の間を進航す、此邊は先きの月小船にて往來せる所なれど絶景は今更の如くにて、夜に入る迄甲板上にありて四方の景色を眺め行く、波は靜にして湖上を行くが如し。

船室は盡く一等客室にてそれも室には二つの寢床を置き並べ甲板には椅子多く喫咽室・食堂の設備中々に行き屆けり、食事の稍〻異なれるは中食にライス・テーブルとて數多き肉肴香味を飯に加ふる料理と、手洗水の鉢を食事前に出し置くことなどなり。

九月十六日　午前一時赤道を横ぎりて南半球に入る、四時目覺むれば弦月海波を照して海上の景色一しほなり、九時バンカ島を左にスマトラを右にしたる海峽に入りムントーの港を近く右舷に見る、高山ありアシンの峰なるべし、船の食堂は後方中甲板にあり、窓皆明け放して心持よし、余等三人は特に一卓を占領して日本人同志の外に遠慮もなし、夜の食堂も皆々略服にて歐洲郵船の如く嚴かならず、給仕は盡く瓜哇人にして頭上に更紗の切れを卷き附けて兩端を獸類の耳の如くに立てたる姿頗る感興を惹けり、船の人屢〻我等の何を職業とするやをうるさく問ひ、中には軍人なるべしと云ふもありとか。

船の名「ラムビウス」は和蘭の名高き植物學者の名に因みしものにて、十七世紀の頃和蘭の根據地なるアンボンの植物を研究したる人なり、其發表したる植物極めて多く、其年代を追ひて三十八種の植物意匠を食堂の明り窓に畫き、又此人の像は食堂正面より上甲板に登る階段の壁に畫きたり、植物研究に出て行く余の航路に圖らずも此緣故深き船に乘れるはうれしきことと云ふべし。

バタビヤの上陸

九月十七日　朝六時瓜哇のバタビヤ港に着きタンジョンプリオクの棧橋に横附けしたり、折柄旭光滿天を染めて紅燃ゆるが如し、七時上陸して稅關に入る、一々荷物の檢査ありこゝは歐米人も皆一樣に嚴密なる檢査を受くることゝてさほど不快の念も起らず、紙類は特に透視して熟視せり、八時二十分の列車にてウエルテブレデンの停車場に至り直ちにニーデルランド、ホテルに投ず、平家作りの客室を建て並べ綠り色濃き熱帶的の植木鉢を以て緣先きと庭前を飾り、庭には大王椰子と酸果樹（ダマリンド）の巨木幹を並べ蘭及び羊齒類之に着生し鳳萊蕉の斑入なるが高く匍ひ

纏へるなど心地よき植物景なり。

博物館

帝國領事館に染谷領事を訪ひ瓜哇事情を聞き旅行調査に關することゞも協議して歸り、午後博物館を見市中を見物す、博物館はバタビヤ博物協會の所屬にして歷史、人類、美術に關する陳列品多し、其陳列品極めて豐富にして古代佛像の如き見る可きもの多く、各國の貨幣は能く蒐集せられ、蘭領諸島の人類學的標品は夥だしく又興味あるものにして、數日を此館の見物に費すも足らざるほどあり、各室とも一々番人鍵を預り來觀者あれば之れを開くなり、市場に野菜、魚肉の販賣品を見バタビヤの市街を通りてペナン門と稱する舊跡を見たり、千六百七十一年の建設にして恐ろしげなる軍神の銅像を左右に飾れり、門外は小舟の集散地にて魚市場あり、バタビヤの人口は凡十三万と稱せらる、夕方染谷領事、諏訪書記生と來り訪はれ、共に馬車を驅りて市内を散歩す、業終れる人々皆白衣凉しげなる、又夫婦手を組み市中散策の連中相次ぐ。

ジャガタラ

バタビヤは十七八世紀頃の日蘭貿易の中心にて、昔はジャガタラと云ひたる處なり、我國と和蘭との通商の起りは我慶長の頃なれば十六世紀の終にて、當時の和蘭船なるものは其本國より來れるにあらずして此瓜哇より渡航したるものなり

と云ふ。

支那人の自尊

瓜哇に來りて殊に氣附きし事は是迄到る處に多かりし人力車のなき事にて、これは支那人は馬來人種の上に立つべきものとせる自尊より卑しき車夫をせざるに取り極めたる結果にして、一度輸入したることありしも支那人側の首班者の嚴命に依りてわざ〳〵の輸入者も撤退し去りしとぞ、されば市中の交通は馬車のみなり、此馬車は客は二人後ろ向きに乘り合ふものなり。

ボイテンゾルグ植物園

ボイテンゾルグ行

九月十八日　朝六時半の列車にてボイテンゾルグに向ふ、あゝボイテンゾルグの名は余が植物學に志してより夙く其名を知り、臺灣に渡りて熱帶植物を研究するに及び更に深く我心に此名を印象せしめたりしなり、世界は廣しと雖も熱帶の植物園としては蘭國政府の經營せるボイテンゾルグ植物園程完備したるはなしと稱せらる、幾十の學者各個專門の分科を受持ちて其研究に從事し、世界の學者は常に來りて研究の資料を得るもの多く、瓜哇は世界の樂園と稱せらるゝと共にボイテンゾルグは植物學者の樂園と稱せらる、余が南洋旅行中夢の間にも忘れざり

し此植物園の視察は最も樂としたる日程の一つなりき、今日こそはこの久しく逢はぬ戀に憧憬れたる我戀人に遭はんとはするなり、三月このかた雨降らざる爲め多くの草木中には枯れかゝれるものあり、されど夜々の露はかくの如き植物にも一縷の生氣を與ふるものにて、今朝は露にぬれたる大地に砂塵も起らず、さしのぼる旭光椰子の葉を照し、朝風そよ吹きて涼しく心爽かなり、正しく平行に枝を出せるカポク綿の樹は家のほとり又は田の畦に植ゑられ、今や其實の綠なるが夥しく垂れ下り、攬仁樹の紅葉美はしく綠熱の間を彩り、波羅蜜の奇果重げに巨幹に垂れたるなど目に附き、檬果の樹到る處に多く今や花盛なり、水田の集約なる耕作法に依りて美はしきは米作國に人となりし余に取りては故國を偲ぶ景色なり、デボクと云へる驛にて土人の賣るドリアンの菓子あり、味羊羹に似て甘し、芭蕉の皮に包めり、南洋一體に芭蕉の葉を包み物に用ふる風あり、此邊竹も多く臺灣の綠竹に似たり、村道の並木は到る處鉄刀木を植ゑたり、寄生木多く各種の樹木に附き殊に木棉樹に多し、農婦小童畑に群り居るは落花生を掘り取るにて、其あとには山羊を入れて之を飼ふ、山羊は白き色のもの多く半白のもあり又茶色したる三毛もあり、臺灣の離島紅頭嶼の茶色の山羊は南洋廣く普通に分布せる種類なり、五十哩を馳せたる我列車は午前八時ポイテンゾルグの停車場に停れり、ポイテンゾルグ！　あゝ此名の呼び聲は如何にうれしく我耳に響きたりしよ！　想像に畫きたりしポイテンゾルグの地は喬樹空に聳え清泉其下を流れ百花亂れて過ぎ行くに艱むものならんと思へるが、かくて此想像は今十分廿分の間に解決せらるべきなり、先づ停車場を出づれば數十の馬車客を待つ、あり、余は染谷領事の注意と三好博士の「熱帶植物奇觀」に依りて知りたるホテル、ベルビューを名指し其馬車にて小坂道を登り行くに、兩側の住宅清楚にして庭に椰子を栽ゑ、色美はしき花木をあしらひ、軒下には椰子の鉢を置き並べ窓に置ける鉢も綠の鮮かなるものにて飾られ、いづれの家を見ても涼しげなり、町の並木は高く空を蔽ひて日蔭を作り、右には店屋、役所、博物館などの建物いづれも白壁美々しく、左には鐵柵の内芝生見事に手入せられて鹿の群り遊べるあり、印度竹の叢り立てるは植物園の一部なりとぞ、やがて宿に著き特に後ろの見晴よき部屋をと注文せしに、幸にも明き間ありて導かれ行くに、眼前にあらはれたるパノラマは先づ我が目に入り、あゝよき景色あゝ美はしの景色よとの感嘆詞を續出し、暫しは此大觀に呆然たるばかりなり、見よ前面にはサラクの山七千尺の雲の上に屹ち、其頂三四の峯頭を爲せど、も裾はみごとなる火山型にして

ホテル、ベルビュー

水浴

その半腹より波打つ如き山野に繁れる椰子は綠深く、其間の川の流れ稍〻急なるが眼下に見え、椰子麵麭の木がくれに紅がら色の瓜哇の家のむねを見るけしき心も辭も及ばず、かくて喧ましき物の音に心附きて流れを見下せば數十の婦人小童流れに浸りて行水するなり、岸に赤きサロン附けたる娘の衣洗ふあれば小供の笊を手にして流れを掬ひ廻るもあり、この面白き景色は天然の風景に加味し我知らず深き感興に眺め入りぬ、爪哇に於て水浴は極めて盛にてバタビヤの如きも市中の堀割の清からぬ水に浸りて快げに水浴を取るもの群をなせり、而して水浴の際には男も女も瓜哇式の湯文字即ちサロンのまゝにて水に入りて直ちに新らしきものに更ゆ、かく常に水に浸るより瓜哇更紗の如く染色の水に剝げぬものを作り出せしものなるべし。

植物園

九時旅宿を立ち出てゝ二町に足らぬ植物園の門を入れり、門前には右に植物實驗室、左に動物博物館・園藝植物實驗室・蘭領印度政府の農務省などあり、門の構へはいかめしく其門前を右に折るれば支那商人の町なり、余はこの度は唯植物園の素通りのみを爲し凡て調査上の事は島内巡視の後にせんとの考より今日は園長に宛てたる紹介狀も其他三好・飯島兩博士の紹介狀もわざと携へ來らざりき。

ボイテンゾルグ植物園カナリヤ樹街道

ラッフルス夫人の墓

門を入れば兼て「熱帶植物奇觀」にて馴染となれるカナリヤ樹の並木あり、見上ぐる許りの大木高さは百尺にも及ぶへく、數町に亘れる此並木の大木の幹には種々の蔓生植物著生して樹幹を被ひ、長きは幾十尺の上迄も伸びたるは殊に目を驚すべき壯觀なり、此蔓本には一々學名を附したる標札を立てたれば先つ植物園に入れる心地して、此道を眞直に通れば突き當りは總督官邸にて和蘭國旗は其正殿の圓塔上に飜へれり、左に折るれば大王椰子の並木あり、印度竹其他の竹類あり、藪の一叢には羊齒・月桃草の類を思ひのまゝに繁茂せしむ、玉虫賣る小供の强ふるに任せて十仙を與へしに、先きに立ちて藪の內に導くに從ひ行けば墓地あり、「八幡知らず」に似たる此の藪を拔け出づればカンナの花園あり、こゝを南に廻れば省籐(トジ)・椰子の種類を栽ゑたる一區に出て、更に進めば日蔭室の前に出て元のカナリヤ樹の並木道に出てたり、更に右に曲れば名高き英國のラッフルス卿夫人の墓碑あり、こは英國との條約面にも保存方を規定しある程のものなり、是れも古跡の一つとも云ふべく、此名園內に骨を埋め往來の人に其名を記憶せらるゝ事死後の光榮と云ふべし、此邊は荳科植物の森にて合圍の大木多し、紅の花美はしく垂れたる瓔珞木と同じ色に緋色を加へたる花の塊りたる寶冠木もあり、合歡の種類の大木多く日蔭

ドクトル藤根の友人

涼し、更に進めば林投樹・龍舌草の一區あり、左に折れて坂あり池に到るべし、池には水草多く栽ゑられ睡蓮の美はしき花水面に浮び、岸には椰子の種類植並べられ大小種々の葉の形面白し、折から白き網持ちたる小供一人切りに蝶を追ひあるけるが我等の姿を見て馴れ〳〵しげに近づき來り、「あなた方は日本の方か」など問ふ、小供なれば心易く話しかくるに「ドクトル藤根」を知り給はずや」と云ふ「知るどころか我老友なり」と語れば、去年こゝにて逢へり、日本の切手を貰へり、曰く何曰く何にと切りに「ドクトル藤根」を繰り返してあとになり先きになり、こゝは總督の水浴室なり見せ申すべしとて番人を喚べど生憎に見えず、總督官邸の裏門を明けて其後庭に入り何かと案内しては時々「ドクトル、ブヂヲ」を繰り返し、日本のキモノ着たるドクトルの姿立派なりしことなど談る、此小供年は十三と云へど身體も大きく應接ぶりさへ大人びたり、父は農務省山林局なるホック氏とて植物學者名鑑にも載り居る人なり、園の東に沿ひたる處に溪流あり立派なる橋を架けたり、對岸に渡れば樹木園にてこゝは開園後年を經ざれば大木なきも日蔭は涼しく、暫し阿屋に憩ひて玉蟲賣る小供にからかひ、やがて元の橋より北端に出て引き返して椰子園に入り、蘭園に入る、瓜哇人の園丁案内し花あるものは盡く示し呉れたり、夥しき蘭の種類を蕃花の幹に結び著けたり、園内清流自在に流れ灌水も自由なり、これに隣りて羊齒園あり、木生羊齒の蔭に種々の羊齒を栽込みたり、こゝを出づれば入口に沿へる池あり、大鬼蓮の大なる葉水面に浮べり、かくて一通りあるき廻りたるにても三時間を費やせり、園内廣さは約七十町歩あり、暑さ盛りの時間なれど大凡は樹蔭にて左程の暑さを感ぜざりき、こゝの事は三好博士の「熱帶植物奇觀」に詳しく今日も此書を携へて經めぐれり、ドクトル、スミス氏の書ける植物園案内も能く要領を盡せり、ボイテンゾルグ植物園の初見參は之れにて終りて滿足し而も心は悦びにあふれて宿に歸り、町の書店を訪ふに植物園の此町に似合はず科學上の本は更になく「バラ護謨栽培」の本一冊を需め歸りぬ。

夕景

紫染むる山々の夕霞、日の入り前の雲の樣、西の空をば紅に染め、熱帶ならでは見がたき夕景色繪にも描けぬほどなるに、我れを忘れて欄干に倚り日の入るけしきを他かず眺むれば、月あらばと思ふけしきも午後の六時に世は常暗となりて凡ての大觀は沒し去り星のみ空にきらめけり。

有用植物園

有用植物園

九月十九日　早朝馬車にて郊外を乘り廻はし九時ボイテンゾルグ植物園の一部なるチコメウ有用植物栽培園に到る、時刻早くして事務室未だ開かれねば圃場係りの若き蘭人に導かれて先づバラ護謨園を見る、印度ゴムの一區もあり、樟樹の一區もあり、これは生育面白からず、砂糖椰子の大木となれる幹には羊齒などの群り生ぜり、珈琲・カカオ・肉荳蔻の一區を見て園内の左部に移る、此時已に案内を辭して自由縱覽することゝしグッタヘルカ樹列植の森、マホガニーの林、單寧合歡の一區を見、纖維植物園に入ればシサル麻あり、茶畑あり、カスチロア護謨ありコラ樹あり、レモン草あり、龍腦の樹あり、マニラ芭蕉あり、其他香料・植物・藥用植物等の栽培地を一通り經めぐるに凡三時間を費せり、各區各植物につきて精細なる觀察は後日の事とし一先こゝを立ち出てゝ、歸途市内の工業博物館に到れば整理中にて唯だ工業原料の豐富なるに驚き、更に植物博物館に到り、夥たしき陳列品を一と目に見て更に腊葉室に到り植物標品の滿藏せる數多の室を經て主任室に入り、後日研究の爲め入室の許可を受け、植物圖書館に入りて館内の縱覽を許されて巡り見るに、植物學に關する圖書と科學關係の書籍とにて一館を爲せる程のことゝて其多數なる藏書は驚くべし、余の巡視中館長は二冊の書を携へ來り一冊は今接手したるなりと示されたるを見れば、東京大學紀要にて早田博士の近著、臺灣植物資料なり、

圖書館

こは余が東京出發の際已に其校正刷を見たるものにて、他の一冊は臺灣農事試驗場の害蟲報告なり、余が臺灣より來れりと聞き特に此手近にある二冊を示したるものにて、些事なりと雖も來訪者の感を佳くすることにて外來者を遇するの道といふべし、午後四時バタビヤに歸る、此夜帝國領事の招宴に列し領事染谷成章氏及夫人、書記生諏訪光瓊氏と相談り愉快なる一夜を過ごせり、諏訪氏は余が同縣の人なり。

面積

瓜哇概觀

瓜哇内地旅行日記を書く前に一と通り瓜哇島の概況を記し置く必要あり、但し此記事は最近出版の瓜哇島内の旅行案内に據れり。

蘭領東印度の總面積は五十八萬七千三百七十方哩にて人口は凡そ四千五十萬人と稱せらるゝが、其中瓜哇は附屬島嶼を合せたる面積は五萬七百五十八方哩にて人口は三千十八萬三千五百人即ち一方哩の人口は五百九十四人の割合なり、島の長さは六百六十八哩幅廣き所百二十四哩狹き所三十七哩あり、海岸線はマヅラ

地勢

島を合せて一千六百哩あり、其南岸は絶壁多く良港尠く、北岸は低平卑濕にして沙洲多く良灣少く、西にバタビヤ中部にスマラン東にスラバヤあるのみ。

山脈は中央に西より東に走り南北への分脈多く、海拔一萬尺内外の高山八座あり、最高峯はスメロー山にして一萬二千二十一呎あり。

人口

瓜哇居住の歐洲人は六萬五千人、支那人二十九萬六千人、亞剌比亞人一萬九千五百人、他の東洋人三千人、瓜哇人二千九百八十萬人あり、主なる都市の人口は大約左の如し

都市	歐羅巴人	土人	支那人	アラブ人	他國人
バタビヤ	九、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	二九、〇〇〇	二、〇〇〇	二五〇
スマラン	五、二〇〇	七七、〇〇〇	一四、〇〇〇	七〇〇	八〇〇
スラバヤ	八、〇〇〇	一二五、〇〇〇	一五、〇〇〇	二、五〇〇	三五〇
ジョクジヤ	一、五〇〇	七四、〇〇〇	五、三〇〇	一〇〇	一〇〇
ソーロー	一、六〇〇	一一、〇〇〇	六、六〇〇	五九〇	四五〇

物產

瓜哇の輸入總額二億八千五十六萬ギルダー、移出總額四億七千七十一萬ギルダーにて、產物の主なるものは左の如し

米、砂糖、珈琲、烟草、タピオカ、織物、茶、藍、カカオ、胡椒、錫、皮革、カポク綿、護謨、チーク材

鐵道

瓜哇の鐵道總哩數は千三百四十九哩、山地の屈曲多き所にては一時間の速力三十五哩平地は五十哩の割合なり。

兵士

兵士の總數凡三萬三千人

遞信

郵便電信局は島内に四百七十八箇所電線五千四百十七哩あり。

氣候

氣候は十月より四月迄雨季、三四月より十月迄は乾燥季なり、雨季とても終日降雨するに非ず朝又は午後に降り而も毎日雨降るにあらず、海岸は溫度高く山地は溫和なり

地名	年平均溫度	年雨量
バタビヤ	二六度	一、八四二三ヴ
バンドン	二二（撰氏）	一、八五八
スラバヤ	—	一、六九七

瓜哇の事は竹越氏の「南國記」能く詳細を盡せり、染谷領事の「瓜哇事情」は瓜哇の事細大となく記述したる最も有益のものなり。

バタビヤより東へ

日中の出發

台灣の瓜哇植物

九月二十日　午前は領事館を訪ひて産業上の取調を爲し、領事の厚意にて島内旅行の日程を得、午後二時發の列車にて東に向ふ、染谷領事諏訪書記生の兩氏態々と見送らる、ホテルの支配人怪み問ふて曰く、午後の今は炎暑の時にして人は皆休息するに、殊に此暑き最中に旅行を敢てせらるゝは何故ぞやと、余亦朝の涼しき折に旅行するの可なるを知らざるにあらざれど、時間の都合上行く手を急ぐ必要ありしなり、車室中々に暑苦し、あたりの景色、極めて臺灣南部に似、看天田は天水を得ざる爲に乾燥し、水牛枯草を需めて徜徉ひ、白鷺之に伴ふ、村里到る處檬果、波羅蜜を栽ゑ竹藪も普通なり、臺灣阿緱邊に多き牛心梨と云ふ果物も多し、余は臺灣の樹木中和蘭人の手にて瓜哇より移されたるもの多きを思ひ居るが、事實面白き關係あるものあるが如く連霧釋迦果（レンブシヤカ）、金龜樹檬果（ジンクワヤ）、波羅蜜、龍舌草、ランタナ、キャッサバ等は其主なるものなるべし、野には白羊群れ遊ぶもの多く、水ある稻田は苗代もあれば穗の出て揃ひたるもあり、收穫するもあり、此地の收穫は穗の熟したるものを一本宛拔き取るなり、村道到る處並木能く茂り多くは「カシア、フロリダ」なり、並木の間には竹籠を置きて小石を入れ置くもの多きが、こは道普請に要するものを豫て備へ置くものと見ゆ、所々にチークの林あり、フレンド驛山上の景色よし、農家林投を栽うる所あり、鐵道は山に登りて遂に二千尺に到る、茶園あり、山を階段狀に拓きて栽う、六時バンドンに着、ホテル、ホウマンに投ず、此地海拔二千尺、高燥なる健康地にして茶幾那の栽培地あり、瓜哇唯一と稱する幾那製造所もあり、此地日本人の商店を開くもの川澄、小川商店などあり。

茶園

幾那栽培地

九月二十一日　朝七時自働車を驅りて南に三十五哩を隔てたるマラバ山に到る、製茶工場あり、所屬の茶園は一千二百町歩と稱せらる、園内を乘り廻して、官營幾那栽培地に到る、主任レールサム氏不在なりしも樹園監督のハイトマン氏及び近頃蘭國より赴任し來れる年若きウキスマン氏等案内し呉れ、廣き栽培地の要地を經めぐり苗床、床換地を見接木法の實見をなし、種類の事採集の事など詳かに說明を聞き、其官舍にて休息してうるさく問ひ糺し、尙主任在場の折今一度來訪して實地の調査を爲す事を約して歸途につく、此地海拔五千尺氣溫年平均攝氏の十八度內外なり。

瓜哇に於ける幾那の栽培は一千八百五十四年秘露より種子を得て始めて培養

瓜哇薯

したるものにて瓜哇の地味氣候に適し、今日にては世界需要の三分の二を供給する程にて官營の栽培地七箇所あり、外に此附近に民有の栽培地あり、今日瓜哇にて良種と認めらるゝ種類はレデリアナ種にしてサクシルブラ種の苗木を砧木としてレデリアナ種を接木して栽培用となせり、此邊珈琲の栽培も盛なり、茶の生育は實に見事にて臺灣などにては見難き程なり、今日初めて幾那樹の栽培を見て兼ねて心に思ひ居りし疑問も解決し大なる利益を得たり、山中多く馬鈴薯を栽う、瓜哇薯の名は蘭人の手にて初めて此地より渡り來りしに起因するものなれども、熱帶の瓜哇にては良種は如何と思ひしが、山中の生育は中々に能く日々の食卓に上る馬鈴薯の味よき事は瓜哇に來りて其好味を感じたる程なり、山間の農家垣根に灌木狀の蔓陀羅花（テウセンアサガホ）を栽ゑランタナをも用ゐたり、並木はバンドンより十里の間盡くカシア、フロリダなり市街の内或は火焔木を栽ゑたるもあり、夕方バンドンに歸る。

九月二十二日　七時の列車にて出發二千三百尺の高地を越ゆ、谷間々々に架け渡せる長橋多く鐵橋は臺架まても白く塗りたれば遠望まことに引き立ちて旅行者の眼を慰むるもの多し、山中圓錐形のみごとなる山を周りて農家の點綴せる樣面白く、山の頂きまても畑に拓けるなど故國の山村を思ひ出づるけしきなり、下れば平地は一體の水田にて滿目の綠色心も爽やかなり、四周高山多く火山の型を爲すもの多し、食堂車にて朝食す、進むに從ひ稻田の收穫を終へて天秤の兩端に穗を束ねて家路に歸る農夫の群れは他にては見られぬ圖なり、一時ジョクジャに着きホテル、トウゴーに入る、客係りの蘭人中々に如才なく萬事親切なるは心持よき事なり、客室を飾る鉢植は主に大濱萬年青（オホバマオモト）を栽ゆ、午後馬車にて市中見物す、町はタマリンドの大木の並木美はしくオホバハマボウの木も植ゑたるところあり、或人の瓜哇觀に瓜哇は市街に木ありと云ふよりも木の間に市街ありと云ふ方能き形容なるべしと云へるが實に其通りなり、此町はソロ州と共に瓜哇中二個の自治州の一つにて、蘇丹居住の地とて昔ながらの風俗殘り何となく奥床しげなり、折柄瓜哇の極月とて地方の豪族身分ある人々蘇丹に謁見する當日なりとて彼處の辻此所の通りに供揃ひいかめしく練り來る行列引きも切らず、先驅後從の人々皆素足にて主人はカインの裾をかい取りて後ろ腰には一刀を手挾（たばさ）み後ろの從者は傘を立て掛け、色々の器具持てる童男少女の恭しく從ひ行く樣我が舊幕時代の面影も忍ばれて余は面白きもの見たるに嬉しく、暫しは馬車を停めて見物せり。

古き廢城「タマンザリー」の址を訪へば一人の土人案内しくれたり、煉瓦石垣は落

ジョクジャ

林間の市街

參賀の行列

古城址

ち崩れたれど當時の盛況を想ふべき大建築目を驚かせり、高さ一丈二尺幅一丈五尺周圍四哩の城壁にて、昔は文武の百官一萬餘と稱せられ、奥まりたるところに水室あり水清く藻草水面を蔽へど其昔後宮の美女肌もあらはに此處に水浴したらん折もありけんものをと思ひ、半ば崩れたれど五十五尺の高大なる樓閣を見、水を引て冷し得べき地下室の結構を見ては炎暑を避くる設備の周到なるに驚き、さばかりに時めきたりし王朝榮枯の跡を弔ひて他國ながらも悲憤の感に打たれけり。

水室

中廣場に蓆敷き携帶の料理の數々を前に据ゑて蘇丹の出席を待つ樣宛かも市場に集る群衆の如し、今夜は蘇丹はこゝに出てゝ一同に挨拶せらるべきなりとぞ、歸りに士族屋敷とも云ふべき一廓を通り、又市街に出て日本人唯一の商店たる富士洋行を訪ふ、雜貨を鬻げり、此地更紗の名物あり、多くの婦人之を携へ來りてうるさく購入を迫る。

古渡唐棧

ボルボドーの佛塔

名高き佛塔

九月廿三日　名高きボロボドーの印度佛跡を訪はんとて午前六時の列車にて立出づ、こゝは支線にて二十五哩、八時モンテランの停車場に下る、同じ客車に濠洲より世界漫遊の旅を爲すらしき老夫婦三組ばかりの人あり、白髮の老人氣品も卑しからぬが切りに見聞を手帖に書き留めなどして見る所の草木を指し示しては同行に談り合ふがあり、我が連れの一人は私かにさゝやきて曰く「彼の老人の擧動何ぞ能く君に似たるや恐くは彼も植物學者なるべし」と、此邊製糖地にて停車場附近に製糖工場あり、又煙草の産地にて廣大の面積に栽培し到る處に乾燥場の設備を見る、甘蔗の耕作は盡く水田跡にて灌漑自在にして見るも羨ましく、皆レノーソ式の耕作法を執れり、此水あるが爲めに瓜哇の砂糖は世界的産物となりたるなれ、水は熱帶農業の發達に缺くべからざる最大要素と云ふべし、甘藷花あり苦楝（センダン）の樹亦花あり、刺桐の一種紅花燃ゆる如きを見る、臺灣南部なれば一二月の時候なり、稻も收穫時とて一方挿苗中のものもあり、土地の正月を前に控へ居れる今日とて田舍の人出夥しく市場の雜沓甚だしく正月用の爆竹は殊に賣れ行き多き品なるが如し、店々に玉蜀黍の煑皮を鬻ぐもの多きに心附き何の用ぞと聞けば卷煙草に使ふものなりとぞ。

熱帶農業と水

停車場に客待せる馬車に乘る、四頭曳なれば足並早く駈け行くに折柄の乾燥時

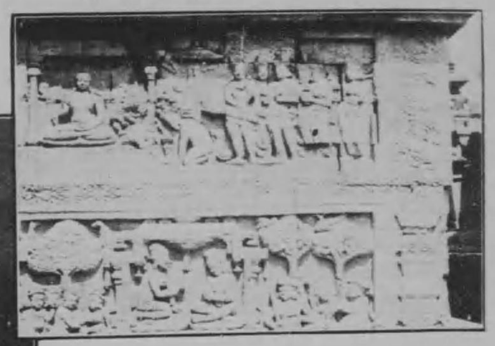
佛塔

壯大なる建築

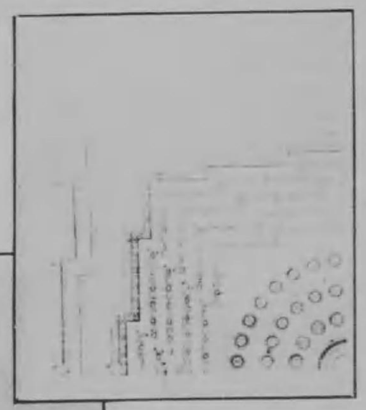
を蹴立つることとて砂塵眼鼻に入り不快云はん方なし、十哩にてチヤンデメンダに達す、此處にも佛寺の跡あり、近年の修繕に係り、正方形の石塔にて高さ四十六尺あり、上段の内部に三體の佛像あり、正面の釋迦像は高さ十一尺許り、忍辱の姿如何にも氣高く拜まれたり、寺内の廢石を探りて浮彫せる一石片を得紀念に拾ひ取り、更に馬車を驅ること數哩にて木棉樹の竝木道を駈けてボルボドーに到る、北には高く雲際に聳ゆる富士型の火山メルバボー山あり、霞の間に幽かに見ゆる勇ましき山の姿を望み心何となく愉快なり、山國に育ちたる身は山地の景色ほど興あるはなく、山多く而も火山に富める瓜哇の風光は頗る我意を得たり、一小丘を登ればカナリヤ樹の森蔭に少さやかなるボロボド、ホテルあり、印度佛蹟は小山の上にあり、石造の階樓にて凡そ長さ二尺巾一尺横一尺位の切石にて組み立てられたるものなり、四面に階段あり、基部の直徑三百七十四呎三十六面の多角形の星形を爲し七階段あり、高さ九十七呎にして階段の一階より四階迄は廻廊にて一週し得べく、高さ外側九尺廊下の巾六尺許りにて、此外壁には隙間もなく佛像及佛教の歴史書を浮き彫りにせり、第一階は佛教の歴史、第二階は釋迦一代記、第三階は佛弟子に關する書にて、書石の總數二千五百四十一にて、繪の大きさは第一階は高さ三尺第二

ボルボドーの佛塔

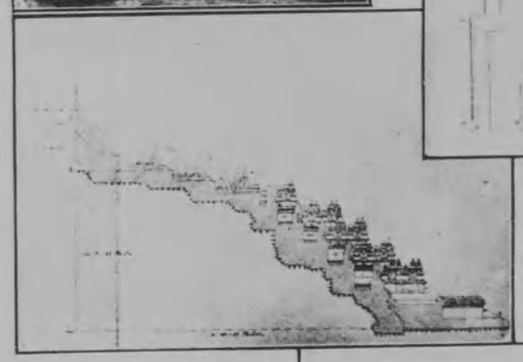
刻彫の塔佛ーボルボド



佛像



佛塔平面圖



佛塔側面圖

チヤンデメンダの佛塔

階より第四階迄は一尺餘なり、各階の壁上には佛龕ありて外に向へる人大の佛像あり、第四階以上は圓錐形を爲し三階段あり、一段毎に高さ一丈二尺中部の直徑八尺許りの釣鐘形の石龕ありて石は網目に組立てられ中の佛像を透し見るべし、下段には三十二中段二十四上段十六體あり、頂上は大圓形にて中に佛像あり其頂部崩れ缺けたり、全體の結構壯大精巧にして其手工驚嘆すべし。

此古跡は純然たる印度式にして九世紀の建設と稱せらる、瓜哇は有史以前より印度の勢力範圍に屬し、七世紀より九世紀までは全盛の時と稱せられしが、一千四百七十五年回々教徒の亞剌比亞人に征服せられたるが、此佛蹟は印度勢力全盛時代の遺物なり、さばかり盛なりし佛教も今は跡を絶ちて回々教の國となり、此壯大なる建築も何時しか地中に埋もれたりしが、英國の占領時代即ち千八百年代の始めに發見せられたるものなりとぞ、塔上に立ちて四方を眺むれば遠く九千尺のメラピ山一萬尺のメルバボーの火山雲の上に在り、近くは椰子林數里の野を被ひ、稻田の綠は其間に隱見し、其景の壯觀なるものあるに我足の踏む所は世界に誇るべき名蹟なり、世の榮枯盛衰の計られがたきに感慨の情禁ずる能はず、嗚呼此の美術あり此の信仰ありし國民の現時の狀態を思へば志士ならずして涙なき能はざる

べし、塔を下りて廢石散亂する所に紀念にもと石塊を探るに佛體の頭幾十地上に置き並べらるゝあり、佛祖の坐像其頭を失ひしもあり、佛教徒之を見ば如何の感かある。

偶〻修繕工事を監する半血の蘭人飛び出し來りて我が石を探るを拒む、その擧動餘りに無禮なりしかば我手は杖に力込めたるも語の通ぜぬ人の間には間違の生じ易きものと僅に我心を抑へたり、兎角に半血の蘭人の擧動は我等の癪に障ること多し、是れ蘭領旅行者の不快を感ずるものゝ一つなり、ホテルにて中食す、來訪名簿あり、日本人中にも某々醫學博士、將校、大谷伯などの記名あり、余も亦歐和兩樣の姓名を署して辭し去り、一時四十分モンテラン驛を發して歸る、此邊の並木はカナリヤ樹ありカシアあり金龜樹あり、而も最も多きはタマリンドなり、瓜哇は並木最も發達し愛育甚だ力む、而して電線は並木を避けて兩側の並木に一線を架し其中央に電線を架すること電鐵線の如くせり、電線を架くる爲めに折角成長せる並木を惜し氣もなく伐り去るは我國普通に見る所なるも、瓜哇にては並木を保護する樣に電線を都合よく配架せり、熱帶地の當局者は此心得ありて然るべしと思ふなり。

並木の保護

濃き珈琲

動物園

半裸體は入城の禮

瓜哇のホテルは多くは平家造りにて室の外に廊下あり、此所に卓を備へ朝早く起き出づれば卓上濃き珈琲の小玻璃壜と牛乳と砂糖を添へたる盆あり、午後四時頃にも又珈琲を持ち來る、瓜哇の珈琲はエキスにしたる濃液を牛乳にて薄むるにて香味甚だ可なり、浴室には必ず水浴の設備あり、珈琲を飲み水浴一番廊下の長椅子に寢ころびて讀書するホテルの日課は又なく愉快なり。

舊都ソーロー

九月二十四日　午前七時出發ソーローに向ふ、十時下車してホテル、スリエルに憩ひ先づ南洋商會を訪ふ、同縣の知堤林氏の支店なり、店員新見氏亦縣人なり、土人歳暮の忙がしき日なるにも係らず自ら案内の勞を執らる、蘇丹私有の動物園を見る、瓜哇產の猛獸大蛇及各種の鳥獸を蒐め、又園内演戲場を設け茶店の設備もあり、士民行樂の場所たり、動物中虎あり豹あり、豹の如きは其數八頭能くも集めたるもの哉、王城前に到れば和蘭の衞兵あり、後門に廻れば土兵あり、王城に入る男女皆上衣を脱し半身を裸かにして入る、これ入城の禮なりと云ふ、土人カインを裾長く著流して後ろに劒を挿すに多くは一本なるも或は二本を挿し込みたるもあり、後頭

部に我國東髪婦人の用うる櫛の如きものを用ひて髪を束ねたるが從者引き連れて練り行く樣古風なり。

サロンとカイン

或人ソーロー市は古物展覽會なりと云ひけるが、まことに其の如く瓜哇の古き風俗の名殘りを見んと思はんものはこゝを見ざるべからざるなり、王城内の兵器陳列場を見る、銃器及武具の磨き立てたる新古の品は目覺むるばかりなれど實用には如何にや、一人の兵士叮寧に案内説明しくれたり、武器庫の一部は翌日の祭りの捧げものなりとて囘々教式の飾り物に忙はしく、菓子・花・野菜などを竹にて編める籠に美はしく飾り附くるなり、夜より翌朝にかけ種々興味ある祭事の行はるゝ由にて、強て一泊見物を勸められたるも急ぐ旅とて名殘惜しからぬにあらねども午後二時の汽車にてスラバヤに向ふ、出發前少し許り時間の餘裕あり名物の瓜哇更紗賣る店に到り見る、之れは瓜哇人の頭に卷くものと腰に卷くものと二つあり、腰に卷くものに二種あり、サロンとカイン是れなり、サロンは縫ひ合せて用ひ其繪模樣一樣ならず半分は別模樣を畫けり、カインは我國の廣き風呂敷の如く其模樣は一樣なり。

瓜哇の更紗は昔より我國にも渡り來れるものにて、「古渡り唐桟」の名高きものなるが、之を染むるに型を以てするものと手にて書き出すものと二つあり、之を染むるは先づ白布を油に浸して乾かし又油に浸して之を乾かし、かくすること數囘の後染色を以て思ひ思ひの繪を書きて之を洗ひ更に之を書きて褪色を避くる爲めに柑汁にて之を止むるものなれば、染色の手數次第にて價に甚しき高下あり廉なるは一圓より高きは六七十圓より百圓に到るも、普通は六七圓のもの多し、近來精巧なる獨逸製の物盛に輸入し來り瓜哇更紗は到底之と競爭し得ざるべしとの事なり、腰卷は土人の常用するものにて、土人は必ず之を着用せざるべからざるに定まり居り、餘程身分あるものならでは履物も許されず、帽子も同樣にて普通は布片を卷く、此の卷き方は地方或は身分に依りて異なるものゝ如し。

スラバヤ

ソーロー以東は甘蔗園能く耕され山地處々にチークの美事なる純林ありて盛に枕木など切り出すもあり、山中シサルの畑もあり、カスチロア護謨園もあり、夜七時スラバヤに着く、除夜の事とていづこも爆竹の音賑かにて空に閃めく花火も盛なり、稻垣商店・岡崎商店主人及び三井の野呂氏などの出迎を受け、ホテル、シムバン

に入る、此夜人に誘はれて瓜哇の芝居(ワイアン、ウオン)を觀る。

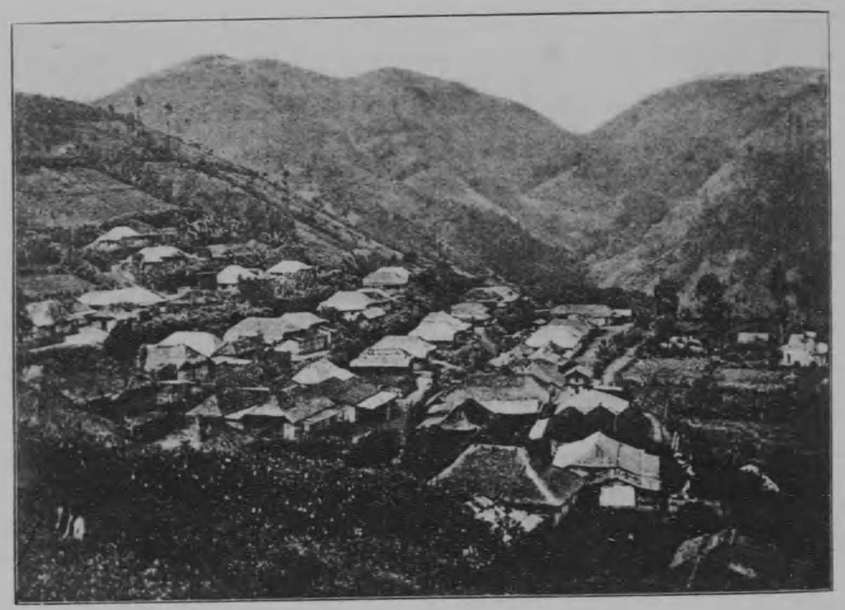
九月二十五日　稻垣・岡崎兩氏の案内にて市中を乘り廻して一と通りの見物を爲す。スラバヤ川の水門流石は和蘭人の經營とて門外漢ながら注意を惹くものあり。

九月二十六日　日本人の主なる店々三井・稻垣・岡崎・潮谷・高橋等を問ふ、此夜重立てる人々よりの招宴あり、スラバヤ事情を聞く、在住の日本人は凡そ二百名にして內百名餘は例の女連なり。

避暑地トサリ

九月二十七日　今日出帆すべきボルテオへの船損所ありとて未だ入港せず、出帆は三十日に延びたりとのことなれば、急に蘭領印度最高の療養所にて且はスラバヤ市に蔬菜類の供給地なりと聞くトサリ見物を思ひ立ち、岡崎氏をも誘ひ一行四人八時發の列車に乘る、一等客車の半は、我一行の占領なり、市を離るれば水田と甘蔗園相混じ、水路は縱橫に拓かれ、清からぬ水中に半ば身を沈めて用便する婦人、男子のそこ〻に見ゆるは他國にては見られぬ奇習なり、ここの人は腰を水に浸して用便する習慣にて、朝の流れは水浴するもの、用便するもの、洗濯するもの、米洗ふもの、器物濯ぐもの一列に相並び、旅行者には物珍らしきけしきなり、こゝの人は肌を露はす事なく勞働者も皆上衣あり、特に腰以下をあらはすものなどは絕無と云ふべく、水に入るものは必ず腰卷のまゝに、水より出づれば直ちに新しきものと着換ふるにて、婦人の行水するものなども腰卷のまゝなれば、瓜哇にては雲踏み外す物騷なる久米仙もあらざるべし。

此邊並木はタマリンドの大木にて村々に椰竹あり、番花の花盛りなるあり、檸果の木多く臺灣南部と風物全く同じく、只苦楝(センダン)の木なきのみ主なる相違の點なり、途中の驛に盛にマンゴー・蜜柑・甜瓜を賣り來る所あり、十時バソロアンに下る、兼て電報し置きたれば馬車の用意も整ひ居り直ちに出發す、土地の正月にて往來の人は織るが如くいづれも晴衣美々しく着飾れることとて赤、黃、色々の彩色は繪の具を覆へしたらん如く、薄絹かつける女の姿殊に目立てり、十二哩にて海拔八百尺のパスレバンの村に著き馬を換ふ、こゝよりは登りにて迂回屈曲せる山道を馳すること六哩、山は一輪毎に高く、東瓜哇の平野は眼下に展開し來り壯觀云ふべからず、ポスポにて馬車を下る、海拔二千六百尺、ホテルの設備あり、ここよりは騎馬なり、馬は



トサリの山村

ブロモ火山とスメロ火山

形小さく柔順にて乘心地よし、久し振りに馬上の人となり靜に鞭を擧げて道を登るに、喬樹枝を交じへて晝尙暗きに何種の花か白花咲き亂れて落ち散る、花は雪の如く之を馬蹄にかくるも惜しき程なり、山中能く拓かれて玉蜀黍の畑多し、此邊此作物の栽培盛にして農民の家々に其實を棚に積み上げたるもの多し、珈琲の老木の藪もあり、途中馬にて竹籠に入れたる野菜を運搬するもの引きもきらず皆トサリより出すなりとぞ。

午後五時トサリ、ホテルに著く、海拔五千八百尺にして山の一角を拓きて建て連ねたるものなり、下界の展望能く遙にスメロの火山高く聳え、スラバヤ平原は眼下にて黑綠の村々里々の間に白壁見ゆるは製糖工場なり、庭一面に咲き亂れたる溫帶の花、金蓮花・ヘリオトロープ・薔薇・フクシヤ・クリサンセマム・イボミアの花正に滿開なる花園の景色心も辭も及ばれず、道の邊りに咲く苜蓿（クロバー）の花亦時を得顏なり、村の子供等こゝに登り來る白人に敎へられけん四つ葉の苜蓿を携へ來りて買ひ給はれよと强ふ、これを手に入るれば幸福なりとの花言葉も能き辻占なれば小錢出して購ふ山苺・桃の實なども賣りに來る、桃は今花盛りにて葉も茂り、花もあり實も大小老若の別あるものあり、一本の桃の木にて桃の一代記全編讀み切りなどはト

サリならでは見られぬことなるべし。

ホテルは棟數四つ五つに分れ喫煙室・遊戯室の設備はなか〳〵にて、夜は瓦斯燈點じ列ね、泊り客さては近所に家借るゝ連中美々しく着飾りて八時半に開く食堂に來るもの多く、冷氣の山中なれば外套つけて來る婦人もあり、男女とも皆改まりたる服裝にて山上ながらこれのみ都らしき風の吹く心地せり、泊り客中バタビヤ、ジョクジャにて同じ宿に泊合せたる英國人夫婦あり、妻君は日本人にて其素性は問はぬが花なるべく、長崎なまりの語は卑しけれどダイヤの指輪幾つとなくきらめかせたるが我等に隣り合せて食卓に就けり、多くの眼は此一婦人に集り、西班牙にや葡萄牙にやとさゝやぐほどに、やがて我等と話し合ひしにて日本の女と御里も知られたる樣子なり、食堂の三分一は日本人にて占めたるはここの山中にては空前の事なるべし、翌日の山登りのことなど打合せて床に入る、夜冷氣强く毛布二枚を重ねて尙冷氣を感じたり、熱帶の平地より一日の內にかくまて氣候の變化ある山に登りたるにて、久振りにて故國の涼しき風に當りたる心地せり。

ブロモ火山

騎馬の山登り

九月廿八日　曉近き五時に結束して庭に出れば十餘頭の駒は已に我等を待てり、六十四度の冷氣に戰きて毛織のシャツを著け雨着の外套を身に纏へり、余の馬は栗毛に白の斑の入りたる駿足なり、相前後して駒を並べて出て立つもの我等四人と英國人の一行四人にて、馬上互に物言ひ交し鞭を揚げて登りを急ぐ。

宿を出づれば直ちに山坂にて朝霞四方を立ち込め旭は東の山の端に出て山々谷々を紫色に染め、家々の炊煙低くたなびき、路もせに咲く菜の花、蘿蔔（ダイコン）の花、桃李の花、圃には豌豆の花盛なり、坂は次第に急にして野の花黄紫の色こきまぜて毛茛（キンポウゲ）金絲梅・菫菜（スミレ）の種類の艶々しきにツリウキサウの紫色なる野菊の白花なる、我國の春の野を見る心地目もさむるばかりなり、カタバミの葉に似たる蔓草のレンゲ草の如き花をつけたるもの美はしく路邊をかざる樣の餘りに愛らしければ馬を下りて之を採る。

日本の花なれば「カタバミレンゲ」とや名づくべき灌木狀となれる母子草（ハハコグサ）の白花美はしく咲けるが七千尺あたりより出て來り、木麻黄の純林あり、「ツルソバ」あり、「ハウチハノキ」あり「子ナシカツラ」の夥しく「ヨモギ」に寄生せるあり、一度下り坂となりて又登れば眺望よきモンガル七千八百尺の高地に出てたり、小屋一つあり、時に七時なり。

この邊茅草茂り「キダチハヽコ」そこ此所に生ひ茂れり、日英の一行八人互に打寄りて携帶の辨當を開く、日英同盟の食事なり、遠くスメロの山高く雲の上に聳え、近くはブロモの火山盛に煙を噴き、バトクの山美はしき圓錐狀體を伏せ、其裾は廣き砂原にしてこれぞ舊時の大火口なるべく「サンド、シイ」と云ひ譯して砂海なるが、日本ならば賽の河原と稱ふべき處なり、日は已に高く上りて谷々峰々より立のぼる雲は低く舞ひ、ブロモの煙は高く空を被へり。

煙りたつブロモの山の朝けぶり
けぶりの雲にけぶる空かな

之より下坂急なれば馬を引かせて徒歩し、婦人は夫に手を曳かれゆく、余は植物を採集しつゝ下りて砂原に達すれば黄砂滿目木も草も火に燒けて寂しげなり、平かなる砂原を駈けさすること半時間にしてバトクの裾を經廻りてブロモの麓に出でたり、熔岩の大小散亂し枯草地に布く峰を上り八時石階ある處に出づ、馬を捨てゝ上る、急なる石階二百四十にて上れば噴火口壁七千八百尺の處なり。

あゝ見よ、數百尺の谷底より轟々湧立ちのぼる大噴煙は渦き上りて火口を蔽ひ、

更に渦き登る噴煙は空にたちのぼりその樣實に壯觀なり、火口壁は周圍二哩にも及ぶべき圓輪にて摺鉢形をなし、口壁の中部に附ける硫黄の花鮮やかなり、時に喧轟なる鳴響火口の底より轟き來るに驚かされ俯し見れば今しも淡黑の煙の渦き立つにて、風なき口壁に沿ひて蒸しのぼりやがて口壁に達すれば風に流れて四散する樣奇觀なり、山は凡て新たなる熔岩に被はれ五六百尺の下より少しばかりの草木あり、木麻黄と石南科の小灌木、外に羊齒の一種にて、見るものは此三種のみ、而も灰に燒かれて半ばは枯れたり、九時こゝを立出てゝ歸途に就き、又もや砂原を疾驅せしめこたびは、モンガルの絶壁も馬にて乘り上げて下坂を急ぐ程に、十一時トサリの宿に歸り著きぬ、折柄濃霧四方を塞ぎ細雨降り出て冷氣身に染む、正午六十五度午後雨霽れて眼下の景色更に鮮かなり。

九月二十九日　八時出發馬にて下る、林中黑猿・尾長猿多く群り人にも驚かず、正午バソロアンに著き、三時スラバヤに歸る。

瓜哇の高山植物

熱帶の高山植物に就てはシムペル氏の植物地理學にも瓜哇の例を載せられたるが、余がトサリ登りは熱帶に於ける高地植物景の一部を見る機會を得尠からぬ感興を惹けり、六千尺のトサリより八千尺のプロモまでの途中植物の採集を試みたるが其採集品左の如し但し植物は悉くドクトル、コールデルス夫妻の厚意に依りコールデルス腊葉館にて比較檢定を經しものなり。

六千尺より七千尺まで

1. Desmodium parvifolium DC. ヒメノハギ
2. Crotalaria ferruginea Grah. ナンバンタヌキマメ
3. Wahlenbergia gracilis A. DC. ヒナギキヤウ
4. Viola serpens Wall.
5. Ranunculus diffusus DC.
6. Thalictrum javanicum Bl. ジヤバカラマツ
7. Hypericum Hookerianum W. et A. Leschenaultii (Choisy) Hook.
8. Fuchsia macrostema R. et P. ツリウキサウ
9. Chrysanthemum sp.
10. Satureia umbrosa (Mareb) var. javanica (Benth)Briquet.
11. Buddleia asiatica L. var. densiflora Bl. ヽヤフヂウツギ

12. Elsholtzia eriantha Benth. ニウシユミモドキ

13. Trifolium procumbens L. var. minus Koch.

14. Parschetus communis Hamilt. カタベミレンゲ

15. Valeriana Hardwicki Wall. シヤベカノニ

16. Foemiculum vulgare Gaertn. ウキキヤウ

17. Pimpinella javana DC.

18. Stellaria saxatilis Ham.

19. Cynoglossum furcatum Wall. ホホルリチウ

20. Cuscuta reflexa Roxb.

21. Dodonaea viscosa Haesk. くウチくノキ

22. Artemisia vulgaris L. ミヤギギ

23. Vernonia eupatoroides Bl. ヒミドリモドキ

七千尺より八千尺まで

24. Plantago incisa Hask.

25. Plantago Hasskarfii Decne.

26. Anaphalis longifolia (Bl) DC. ナガベチノニ

27. Anaphalis visida DC. キタチくノニ

28. Gnaphalium involucratum Forst. シヤベチノニ

29. Dichrocephala chrysanthemifolia DC.

30. Andropogon micranthus Stapf. ヒメアブラスノキ

31. Andropogon Nardus L. var rectus Stapf. ミホヒガヤ

砂海及ひブロモ噴火口壁

32. Casuarina montana Miq.

33. Albizzia montana Benth.

34. Rubus lineatus Reinw.

35. Calamagrostis javanica Steud.

36. Styphelia pungens (Jungh) Kood. (Epacridaceae)

37. Vaccinium varingaefolium Miq.

38. Pleopeltis Feei v. A. v. R.

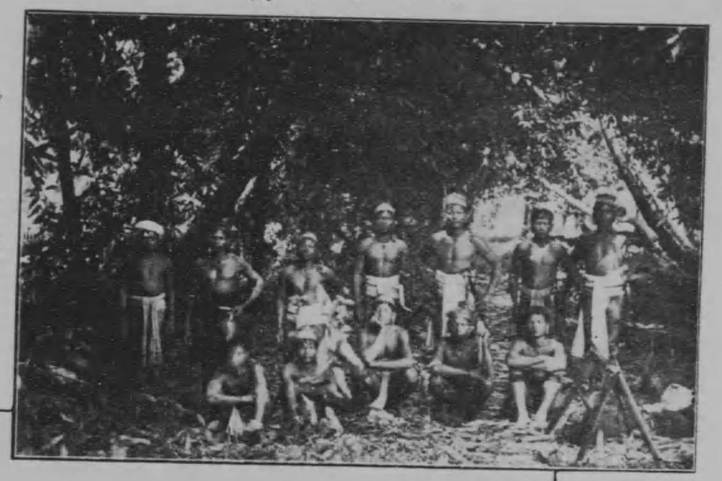
第八章　ポルネオ日記

熱帶植物の葉は鋸齒少し

瓜哇にて九十八種の樹葉を檢せる結果によれば、此中鋸齒又は缺刻あるものは僅に二種にして餘は悉く全緣なりし、蓋し暖帶の樹木に鋸齒葉多く、亞熱帶に至れば已に全緣葉其數を增し、而して熱帶に於ては樹葉は概して全緣となるは著しき事實にして、例へば川上瀧彌氏著「北海道森林植物圖說」に載せたる總計五十六種の樹木中五十種は鋸齒葉又は缺刻葉を有し、全緣葉は僅に六種に過ぎず、又白澤保美氏著「日本森林樹木圖譜」に據れば總計百十九種の樹木中八十七種は鋸齒葉又は缺刻葉にして三十二種は全緣葉を具ふるものなり、

（三好理學博士熱帶植物奇觀）

ボルネオ島



ダイヤ族

バンヂヤルマシン埠頭

婦人の大編笠

第八章　ボルネオ日記

瓜哇よりボルネオへ

九月三十日午前八時旅宿を出でゝスラバヤ埠頭に到りサンバンにてボルネオ島行の汽船エリオット號に乗る、船はバケット會社のものにて一千二百噸の客船なり、一等船客は十三人なり、夫婦連れ二組と外に二人の婦人あり、婦人の半ばは合の子なり、船迄送り來りし岡崎翁も辭し去りて十一時半に錨を揚げてマヅラ島の間を過ぎてボルネオ海に出て正北を指して進む、海上穏やかなり、十月一日八時海水稍々濁り九時全く濁水に入る、九時半陸地を雲烟の間に望み、十時バリトー河口に入り樹木茂れる岸に近く沿ひて進めり。

河幅は二浬にも餘るべく小舟の往來漸く繁し、空はどんよりと薄く曇りて河水は黄色に濁り生溫き風吹き渡り、上るに隨ひ水の色は次第に黑く濁りて何となく不快なり、河口より四十哩にて十一時右なる支流マルタボラ川の狹き流に入る、幅狹く岸より數間の處を泝る、我船の爲めに起る波の岸を洗ふにて繫げる小舟を陸

に押し揚げ又美はしく著かざれる乙女を舟より突き落しなどして進む、岸には床を高くしたる草葺の家ニッパ椰子・紅樹林の間に多し、支流を泝ること十浬、十二時

バンジャルマシン

バンジャルマシンの波止場に横附けせり、税關の檢査受けて此町唯一の旅館ホテル、バンジャルに著く、同船の人々多くは同じ宿なり、ホテルと云へど設備整はず、宿の老主人は日本にも行きたることありとか、其娘の同船して來れるが何にかと世話を燒きくれたり、バンジャルは河マシンは鹽水の義即ち潮川の意味なり、此地井を掘るも清水を得ず多くは石油臭し、三箇月來雨なく川水鹽分あり、飲料水は遠く川上より運び來る由にて水浴の水又鹽水にて淨手の水も赤く心地惡し、夜村田商店の人來り訪ふ、日本人は商店一寫眞屋二と外に若干の娘連あり、翌朝マルタポラに行き獨逸人經營の護謨園を見ることゝす、夜市内散歩行人殆ど稀れにして甚だ寂寥なり、此市人口六萬と稱せられ、南ボルネオの商業地にて主なる產物は護謨・籐、ダマル・コプラ等なり(バンジャルマシンの位置は南緯三度三十分東經百十四度三十八分なり)此處より汽艇六百浬を泝上し得べしと云ふ、市中馬車なく舟は唯一の交通機關にて陸上の道路淋しきに引き換へ水上の往來誠に賑々し。

十月二日　午前七時雇入れたる小舟ホテルの前なる川岸に來る、七時半岸を離る、舟の長さは三十尺巾中央部四尺五寸、細長くして其兩端高く突き出て、前に三人後に一人櫂を執る、櫂は別に綱を附くるに非ず手にてかくなり、折柄引汐時とて川の流れ急なり、兩岸民家軒を並べ各戸川岸に大流木二本を横たへ其上に横木を渡して小さき家を建て多くは白く塗れり、これ便所にて土人は水上に用便し水を以て洗ふものなり、「カワヤ」の名は之よりぞ起れる。

川屋

水玉蘭

水玉蘭の流れ來るもの多く、上るに隨ひて其數を增せり、人は大小の舟にて往來繁く、其小なるは丸木舟に一人、大なるは屋形作りに一家族をのせたるものあり、或は野菜物を滿載せるもの、或は菓子日用品を飾り立てゝ之を賣り行くもあり、女の徑三、四尺もある大笠を冠りて全身を蔽くして舟にのるなど殊に目立てり。

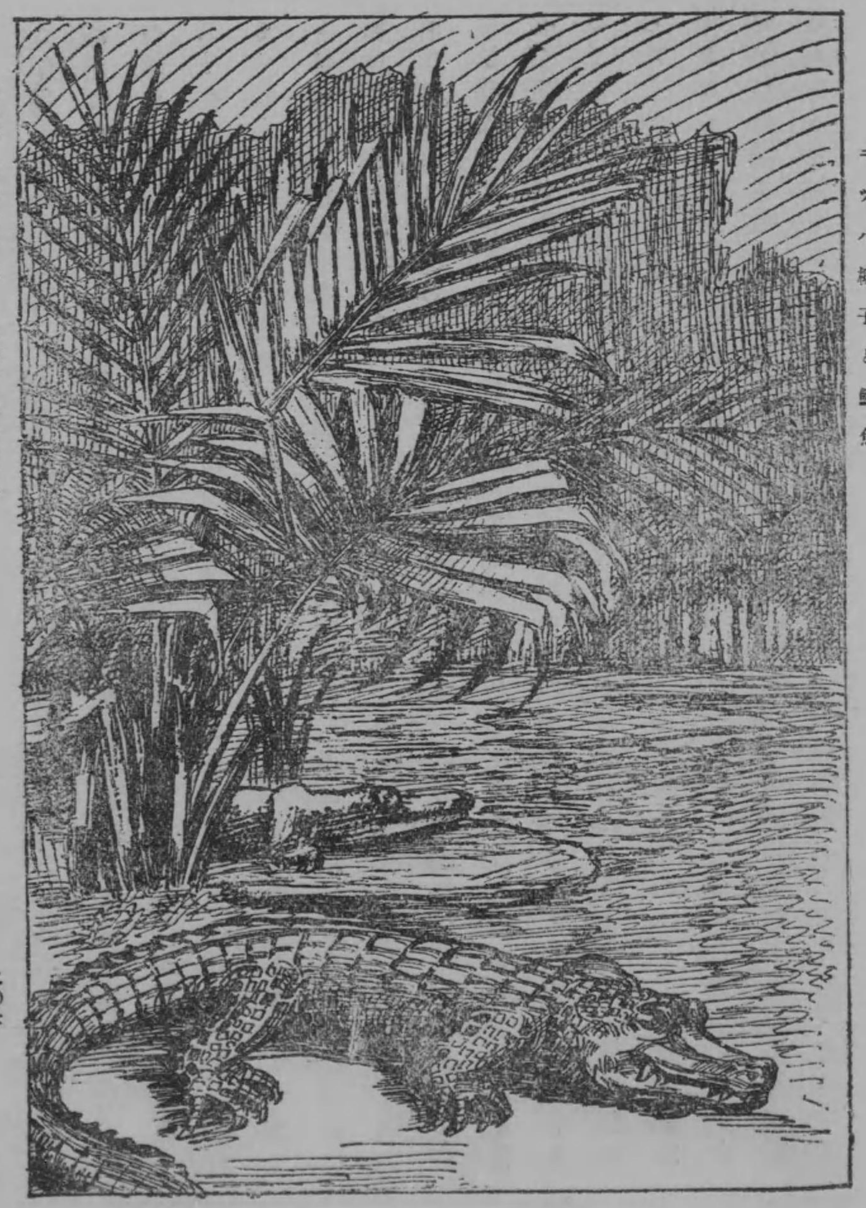
笠の形は我國の菅笠と云ふものに似、其緣は籐にて作り椰子類の葉にて編みたるものなり、小休みもせずに舟を漕ぐ程に十時人里疎らなる上流に出でたるに、水玉蘭益々繁茂して時には水路を塞ぐ程の處もあり、此水草いつ頃よりかくは繁茂せるぞと問へば四年前よりと答ふ、此草の繁殖力の盛なること實に驚くべく、今や熱帶到る處の水路を塞がんとす、此水草はブラジルの鄕里を出てしより未だ幾何の年をも經ずして此の如く植民地を擴布するもの他に比類すべきものなきに似

たり、この草に苦しむもの啻に臺灣のみにあらざるなり、之に就けても思ひ出づるは故小西林學士の事なるぞかし、明治三十五年に始めて臺灣に入りし此水草は花美はしく水邊を飾るけしき實に熱帶趣味を發揮するものから、小西氏は力を盡して此水草を臺北の四邊に擴げたりしが、今はや人の手に餘るまでに擴まりて却て害草として苦しむに至れり、暹羅も此草に苦み馬來半島にも擴がり爪哇にも夥しく、今又ボルネオに其蕃殖盛なるを見、故人をして此草を押分けかねて舟の進まぬ景色を見せしめば呵々大笑して手を拍て歡ぶべきにと思はずも故き人の追懷に耽る折しも水夫の鰐（ボア）よと呼ぶ聲に驚かされぬ。

其指す方を見れば我舟と間は十尺ほどの岸に五尺ばかりの小鰐一疋泥の上に睡り居り、鱗は日光に輝きて金色に光れり、余は生れて初めて自然の鰐を見ることゝて尙能くと思ふ間に舟足早くも遭ぎ過ぎぬ、正午ランタワナクシンと云ふ所に舟を寄せて中食し、舟夫は皿に盛りあげたるカレイ飯を手づかみにして喰ひ、我等は宿よりの辨當を開く、岸に上りて農家に立ち寄れば今しも魚捕りて歸れるところなり、大さ三尺もあるべき大スッポン、七八寸もあるべき青色のはさみ持てる川蝦、鯰に似たる魚、之も鯰に似て扁き魚など籠に滿てり。

睡れる鰐魚

川魚



ニッパ椰子と鰐魚

大鰐

午後再び舟をのぼすに左岸近く七尺にも餘るべき大鰐の口を開きて睡れるがあり、舟夫櫂もて水を叩きて驚かせば水に飛び込み渦き立てゝ沈み行きぬ、水玉蘭の紫花美はしく咲くところに此鰐の睡れるなど熱帶風景の好畫題なり、間もなく又もや一疋の大鰐半ば頭を岸につけたるがあり、水夫は又もや之を驚かせば尾をもて强く水を打叩きて舟の方に進み來るに尙も櫂もて水を打てばやがて水底深く沈み込みぬ、三度迄も鰐を見たる余は興あるとに思ひ獵銃にてもあらば如何に面白き鰐狩も出來べきになど思ふ、此邊にて鰐の賣買ありやと問へば無しと云ふ

サゴ椰子

革の鞣法（ナメシカタ）知れる人あらば能き利益あるべきになど談る、岸邊にはサゴ椰子多し澱粉植物なり、此幹を伐りて筏に組みて運び幹を碎きて水洗すれば例のサゴ米を得べく南洋の名產なり、此木の筏を流す時屢々猿の群れに襲はれて此幹を掴（つか）み取らるゝと云ふ、川岸に椰子の葉を編みて魚の通路を開き竹籠を伏せて魚を捕る仕掛したるが多し、家々の女等魚を脊開きにして乾すあり、乾魚は此邊の產物なり、臺灣のライヒに似たる魚土名マボシと云ふ、五時マルタボラの町に著き我等の行手は尙遠しと聞き唯一軒のホテル、マルタボラに投ず、馬來人の經營にて萬事は馬來式なり、主人は此土地にては由緒ある豪族にて日本人びいきの老人とて其力の及ばざらんことを恐るゝ迄に懇切叮嚀なり、バンジャルマシンよりは陸路十二里人口は附近を合せて六萬と稱せらる、金剛石の產地とて之を琢（みが）く製造所四箇所あり。

十月三日　朝七時、八十四度なり、川水潮乘りて溢る、七時半又も昨日の小舟を漕がせて流れを上る、岸は例の川屋（かはや）軒を並べ折柄の滿水とて下げ髮したる婦人のサロン一つになりて水を浴びるさま誠に奇觀なり、後姿のよさに、横顏の美しさにあれが色さへ白ければなど同じ船なる人々の罵りさわぐも徒然の舟の旅なればなり、水は濁れど此邊は眞水なり、村々より野菜果物を滿載して町に出でくるもの夥しく、例の三尺以上もある大笠に全身を蔽（かく）くして時々其間より印度更紗の派手やかなる布の色見え、若き夫婦の共に櫂を執るもあり、白髮の老翁老婆の共稼ぎするもあり、子供妻女をのせて夫一人櫂を執るもあり、船に積めるは南瓜・玉蜀黍・長茄・豆豆・甘蔗・タピオカ根・甘薯・ドリアン・マンゴー、及び木棉の實などなるが、殊に目立ちて多きは南瓜と玉蜀黍なり、リアム、キワの川を泝るに此間兩岸人家續きにて麵麭樹波羅蜜・檬果・古々椰子・檳榔・五歛子・釋迦果・甘蔗・綿の木・柑橘類の植込みありて森を爲し、畑には甘蔗・薯の木を栽ゆ、岸高き川べりには階段掛けて川屋に通へり、所々の川中に舟の市場ありて果物・蔬菜の賣買賑はし、三時間にてバラ護謨の栽培地ある所

川中の市場

獨逸人の護謨園

に出てたり、大猿滑（オホサルスベリ）の紫花美はしく咲きたる岸に舟を繫ぎて上陸すれば廣き道路あり、印度護謨樹を植ゑ並べ能く太りて委勢もよく其内側は廣きバラ護謨園なり、白堊塗りの洋館ありければ我が尋ぬる金子氏の宅を問へば遙か離れたる所なりと云ふ。

三四町も進みし所に大なる洋風の家あり、緣側に居れる白人の我等の姿を見て急ぎ階を下り強て家に引き上げ椅子を與へ炭酸水を呼び、挨拶よりも先きに懇待を極む、さて初對面の辭をかはして名刺を受くれば「ダナウ、ララク、エルンス」栽培園の持主なるエルンス其人にて、他の一人は此處の役員ニーランド氏とて共に獨逸人なり、主人の妻君は日本人にて折柄日本への歸省中なる由なるが、極めて日本びいきにて家の飾りも多くは日本品を用ひたり、さればこそ我等見ず知らずの客をもかくは厚く待遇するなり、金子氏を尋ぬる由を云へば、ニーランド氏態々と案内して護謨林を潛り拔け遙か七八町も隔りたる其家に導きくれたり、森の蔭に其家あり、主人も在宅にてスラバヤよりの紹介狀などありける事とて心易く、日本人同志とて肌シャツ一枚になりて膝折りて物語る、長崎の人、縣の商業學校を出で瓜哇の商店に入り、三年以前此地に來り此の栽培地の主人と親しき間とて自ら三十餘

日本人の護謨栽培

町の護謨園を有して勞働するものゝ由にて、此一家は夫婦の外に日本より招き寄せたる三人の男女あり、午後エルンス氏の栽培地を經めぐる、土地は礫砂交りの赤土に腐植土の交りしにて、三年生一萬本二年生のもの七萬本あり、太きは幹周九寸より一尺あり、高さは二丈半、栽附距離は十八尺なるが新しきは十五尺なり、十八尺のものも已に樹と樹との枝相接せり、印度種は只道路の兩側に三十二尺距離に植附られたるが、之れは三年生にて幹周一尺七寸より二尺七寸に至り已に木と木と枝を接せり、バラ護謨は來年は採液を始むべしと云ふ、樹の根能く取りのけられ、除草掃除も能く行き屆けり、二週間來雨なしと云ひ土地は甚だしく乾燥せり、事業の經營上他に賣拂ひの希望あり、此地總地積五千蘭（ボウ）町にて植付を終れるは四百三十蘭町元は茅草地の小樹林にて丘陵起伏し小流其間を流るゝ形勝の土地なり、バンジャルマシンを距ること遠く又マルタポロの町まで四里あり、かくまて奥に入らざれは土地なかりしやと問ひしに「然り」との答なりき。

二時頃舟にてマルタポロまて歸る筈なりしに、エルンス氏より態々の使あり、遠來の客晩餐には是非にとの案内あり、夕方其家に到れば懇待甚だ力め、言語は互に不十分ながら心の底見ゆるもてなしに愉快なる會談に一夜を送る、殊に日本歌曲

の蓄音機など据ゑての餘興あり、金子氏の宅は手狹なれども日本人の心易きに一夜をゴロ寢せん筈なりしに、主人は已に寢室の用意したれば我折角の心盡しをむだにさせ給ふななど强ひられては外に泊るも心苦しく遂に此家の客となりぬ、客室の寢床はダブルにて小柄の日本人ならば四人は寢まり得べく、一行の兩人はダッチ、ワイフの長枕を中に租借の境界線として同じ床に入りぬ、旅の面白さは何處何時如何なる人の世話になるやも知れぬものなり、見も知らぬ獨逸人に客となりて豫想の外なる厚遇を受くることなど全く思ひ設けぬ事ぞかし。

左樣なら

金剛石山

十月四日　朝早く園内散歩、十時辭して舟に乘る、送り來れる主人紫花美はしきサルスベリの木の下に立ちて余等の船の影を見守りて帽を振る、ボルチオの此地二度と見がたき所なるべしと思へば名殘の惜まれて聲高く「グッドバイ」を叫べば彼は「左樣なら」の日本語を繰返すなり、流れは下りなれど水は靜かにして沼の如し、西瓜賣る船に遭ひ一箇を購ふ價は六十仙なり、味甚だ甘し、此もの實は十仙位にて手に入るべきものなりと云ふ、十二時マルタボラに著き又ホテルに入れば主人の

金剛石工場

厚遇昨日の如し、主人を案内に近所の金剛石の磨き場を見る、工夫四百名四十五馬力の汽力を用ゐて琢磨板を動かし各箇の寶石を鉛に包みしものを磨く、工賃一日一圓より五圓に至る、市中此種の工場四あり、亞弗利加產の金剛石、歐羅巴の人造寶石等多く此地に輸入せられて磨かる、工賃の廉なるが爲めなりと云ふ、午後三里餘

金剛石山

のチャンバカ村に金剛石の鑛山を見る、宿の主人馬にて案内し我等は市中貸馬車なければ然るべき人の持物を借りて行く、村の家々は椰子、果樹の森蔭に建てられ何れも床を高くし壁は木又は竹にて屋根は木の板又は草葺にして凉しげなり、内外能く掃除せられて心地よし。

郊外に出づれば原野にて合歡に似たる木多く遠近に高からぬ山見ゆ、一時間餘にてチャンバカに入り馬車を下りて藪道を歩み行くに礫石を高く積み上げたる處に出でたり、こゝは金剛石を掘る所にて、二箇所ばかり井戸を掘り十餘の人夫泥に塗れて水を汲み上げ木の丸太にてあたりの土を押へ草にて泥を留め、掘り下ぐること九尺一丈ともなれば小石の層あり、更に掘れば泥土なり、此小石交りの層に金剛石あるものにて、かく掘り上げたる泥砂を水にて洗ひ徑二尺五六寸の丸木の盆にて丁寧に洗ひ流すこと砂金洗ひの如くして下に沈める金剛石を拾ひ出すな

り、かくして一日に一箇を得ることもあり、數日にして一箇をも得ぬ事あり、今日は馬來婦人が二箇を拾へりとのことを聞き村に入りて其物を見しに、小さきながら結晶の形も明らかなるものなれば、鑛物標本には能き品と思ひ之を買ひ求めしに、良き客と見てか金剛石持てる村人一つ二つの寶石持ち出して勸む、寶石などは標本以外には用もなく唯だ見たるのみなるが、實際一つ氣に入りたる自然のまゝの結晶ありしも價貴ければ我等旅の身には如何ともしがたし、宿の主人椰子の果採らせて其汁を勸めくるゝに、甘酸口に佳く味淡きレモナードを飲むが如く忽にして渴を慰したれど流るゝ汗は衣背を透せり、夕方歸る、夜此島の蠻族ダイヤの武器を需めさせしに心に叶ふもの一本を得たり、ニボンの樹にて作りたる槍にて其先きに鑄鐵の刃を箝め籐にて巧みに卷き柄は中空にて吹き矢を射る用なり、吹矢は毒を塗るものなりと云ふ、土族標本として珍品なれば價は貴けれど購ふ。

椰子の果汁

吹矢兼用の鎗

十月五日　朝霧深くして咫尺を辨ぜず、欄に倚りて水面を見れば濃き霧の間にほの見ゆる水浴の美人サロン一つに下髮したる姿の浮世繪の浮び出てたる如く興ある景色なり、宿の主人別れの紀念にとて一箇の寶石を贈る、色黑くして堅く稍〻光輝あり郊外に出て水田を見る、收穫も終り今や農婦籠を負ひて落穗を拾ふ、總て

稻作

の樣子臺灣の蕃人農業に似たり、稻は十月に植ゑたるは四月に收め、四月に植ゑたるは十月に取り入る、極めて粗放なる方法をとり、一つ一つ摘みとりて籠に入れ扱き落して蓆に擴げ乾すものなり。

九時例の舟にて下る、辨當代りにピサン(芭蕉)買はせて舟に入る、風そよ吹きて心地よし、水玉蘭は下るに隨ひて多く、時には水路を塞ぎ辛うじて舟をやる處あり、サゴ椰子の筏を組みて其上に葉を積むがあり、此葉は屋根の葺料なり。

小蒸汽の水船曳きて上るあり、マルタボロまで上りて飲料水を運び來るにて、其外に小舟の石油鑵を滿載して上下するもの皆バンジャルマシンの飲料用水を運ぶものなり、三時密雲空を蔽ひ遠雷の響あり、尋て小雨あり、四時半バンジャルマシンに歸り著く。

案外なるボルネオ

ボルネオなる名は小學の地理書にて習ひし頃は獰惡なる人間の住ひ居て上陸も恐ろしき程の處とのみ思ひしことの先入主となりて、氣候もよろしからず況して住む人の如何にも恐ろしげなるところとのみ想像せるが、聞くと見るとは大違ひにて、三日四日經過しける土地は川沿ひの便利よき處なれども、土地も拓け人氣も穩かにて平和の風吹き渡り、著る物さへも貧しげに見えず、風俗は瓜哇などゝは

稍〻異りて男子は土耳古帽を冠れるが多く、血色も餘りに黑からず、老人などは日本人其の儘の人多し。

夕方理髪師來りたれば鬚剃り給はずやとの給仕の云ふに、馬來半島旅行以來髪を理めざればとて招きしに、いかめしき黑の軍服を著けたるが來れり、軍隊所屬にて軍務の側らに內職すると見えたり、理髪料は七十五仙なり、制服衣たる人に理髪し貰ふも珍らしきことなり、處變れば樣々の事に出逢ふものかな。

兵隊の床屋

手品師

十月六日　市中の日本人の店々を訪ふ、此夜蘭人倶樂部にて英國奇術師の藝ありとて見物するも一興と大枚二圓五十仙を寄附して行く、理事官、副理事官などを始め重なる官民と子供のみにて、奇術は日本のものを見たる眼には餘りに幼稚なり、奇術士の謝辭の內理事官樣其他奥樣方並びに日本の紳士樣方の御來觀を辱うし身に餘る光榮と陳べ立てるほどかゝる場所にては毛色の變れる我等は目に立てりと思はる、髪こそ黑けれ合の子などにくらべては日本の紳士も御色は黑からぬ方なり。

幾千百の猿の群

猿島

十月七日　小舟を雇ひて猿島見に行く、朝八時猿へのみやげにバナヽと麵麭など數多く買ひ込み支流を上りて大川に出づ、川の名はマモンタンなり、幅は二浬にも餘り兩岸森林茂りて水は滑かなること油の如く舟の影さへ多からず、九時中流の樹木繁れる小島に近づく、紅樹の一種遠く見れば柳の如き喬樹枝を交へ水際には澤瀉（オモダカ）に似たる水草茂り、島の內部にはサガリ花の種類叢を爲せり、喬樹の枝を傳へる一疋の小猿我舟を見て次第に枝より枝へと下り來ると見る間に、何處よりか出て來にけん二疋三疋四疋五疋の猿共岸邊に下り立ちて我舟を逐うて走り來るに興あることに思ふ內島の中程に到り著けば、已に一隻の小舟土地の女子供を乘せたるがあり、見よ幾十幾百の大小樣々の猿群り集りて投げ與ふる食物を爭ひつゝあり。

水中に立てたる小さき屋根あるあづまやめきたるものありけるが、此柱にも十幾疋の猿手にせる食物を食ひつるが、我舟近づくと見るや、先きを爭うて舟に飛び移り來る、陸上の猿の群れも之を見て一齊に水に飛び込み舟緣に飛び上りてアナヤと見る間に食物の大半を奪ひ去りぬ、食を爭ふ喧嘩却々に騷がしく其奇觀中々の見ものなり、試みに食物を水中に投ずれば猿は泳ぎ込みて之を爭ひ、之を得たる

ものは急ぎ之を頻ばり或は樹上に逃げ行くもの之を追ふもの取られじと尙ほ樹上高く逃げ上るもの、枝より枝に飛び廻るもの藪を潜り倒木を傳うて走せ去るもの、實に猿の生活狀態は一目に之を見る可く、狙仙をして此のけしきを見せしめば世界を驚かすべき名畫を成さんものをなど思ふ。

斯くする內に一行の一人は此の景色をレンズのものと爲しぬ、飽かぬ景色を見殘して歸りを急ぐ途すがら紅樹の枝を折り取りけるに、樹上の小猿二匹我舟に飛び移り殘れる食物を得て急ぎ頻ばる內に舟は早くも岸をはなれたるに、一匹の猿は遙かの枝を目がけて飛び附きしも、一匹は逃げおくれて舟の屋根にうろつき廻るに、舟は次第に沖に出づるに水中に潛り入りて一度は沈み遂に遙かの岸邊に浮び出てぬ、この島は猿の捕獲を嚴禁し、土人の迷信より時々食物を携へ來ては之に與へ、又見物客の食物を與ふるより今は馴れて舟の影さへ見れば幾百の猿群集し來るもの丶由、和蘭人の一人誤りて猿を殺したりしに、家に歸るや間もなく發熱して死したることあり、此猿を殺せば必ず祟りありなど土人間に傳說せらる、珍らしき見もの丶一つと云ふべし。

野生護謨の市場

十月八日　船入港せず、九日、支那の商人を訪ひ輸出の護謨に關し聞く所あり。日本にて護謨工場に用うる原料は多くボルネオ產のものにして、品質は劣れるも價格廉なり、此所よりは專ら新嘉坡に輸出せらる、今年は價格廉なる爲め買込を見合せ居る有樣にて、半季の輸出六萬擔に過ぎず、主なる種類五種あり、現時の相場左の如し

グタ、メラ	最上　二百五十圓
グタ、ハンカン	十六圓五十仙
グタ、スス	百十五圓
ルーヤン	五十圓
ジユルトン	十圓

貯藏倉庫は川水の內に設け護謨は水に浮せ置けり、新嘉坡まで運送中の步減り二割五分ジユルトンは一割なりと云ふ、護謨は形狀一樣ならず、棒狀のもの餅形のもの四角のもの等にて重量も一定せず、中には塵芥多く、又木片樹皮を混ずるもの

もあり、一々切斷して品質を鑑定す、輸出稅は八分なり。

妻女同伴の軍人

黑き軍服着けたる丸腰の軍人に從ひ行くは妻君なるべく、又士官とも見ゆる人の妻女の手を執りて散步するもの多し、風呂敷に似たる紅き布を頭に冠りて筒袖の上衣にサロン著けたるが長き布を縱に疊みたるを肩にかけ小脇に籐の小籠を抱へたるは御夫婦打揃ひての市場通ひなるべく、同じ裝束したる女の大きなる笠冠り其緣に片手をかけたるも多く、常磐御前の道行を思ひ出さるゝ姿なり。

水の都舟の往來

バンヂャルマシンは川の町とて馬車なく往來は凡て舟なり、舟に大小樣々あり、小なるは木を刳れる丸木舟、大なるは舳先も艫も區別つかぬ兩方突き出たるものにて、大なるはアタブの屋根を龜の甲狀に反り返したるものなり、或日身分ある支那人の葬式を見たるが、大なる舟幾隻となく繫ぎ合せたるに五色の旗押し立て棺も會葬者も之に乘せ、汽艇にて之を曳かせ哀しき曲の音樂を奏しつゝ流れを下りゆく樣誠に珍らしき見ものなり、又婚禮の行列をも見たるが、之は和蘭人のにて三隻ばかりの舟に白衣の水夫二三十人櫂を執り一舟に聟君一舟には嫁君及び一族を乘せ、懸聲勇ましく漕ぎ上りて敎會堂にと赴く樣これも珍らしき見ものなり。

市場

市場は川べりに開かれ野菜・川魚・干魚・肉類を鬻ぎ蔬菜には南瓜・茄子・馬鈴薯・椰子・芭蕉の花・南瓜の葉柄・玉蜀黍・豇豆・絲瓜・苦瓜・藤豆・芋・鬱金根など、果物にはレモン・ドリアン・ニッパなどなり、川には魚極めて多く糸を垂るれば直ちに釣り上ぐべし、鯰に似たる赤色の魚殊に多し。

歸航

ハアン、ホーン號

十月十日―十二日　午後郵船「ハアン、ホーン」號に乘る、一千六百噸の船なり、この地よりは多くの屋根葺用のアタブ及び籐を積込めり、六時出帆海上穩かなり、十一日夜半スラバヤ港に入り十二日朝七時檢疫を了へ、八時上陸、此日こゝまて同行せる池原氏一行新嘉坡行の便船に乘り換へ出帆す、神戸以來期せずして行路を一にし馬來半島の旅行は相前後して瓜哇・ボルネオに行を共にしたるが今は遂に相別る、戲れに手帖の端を切りさきて贈れる

われひとり島に殘して君のみは
つま待つ國へ歸りゆくらむ

此日迄通譯もあり話相手もありたりしが愈〻單獨の旅となりぬ、岡崎商店主の厚意にて近き處のホテルに假寓を定む。

ボルチオ島

南洋群島中の最も大なる島にて面積八十三萬方哩、北方の三分の一は英領、南の三分の二は蘭領にて、英領は北ボルチオ、ブルチイ、サラワックの三國に分れ、北ボルチオは北ボルチオ會社之を支配し、ブルチイにサルタンあり、サラワックは英人のラジヤ其統治者なり、蘭領は東南部及西部に分れ、東南部の首府はバンヂヤルマシン西部の首府はポンテアナクなり、人口七十萬を出てず一方哩七人强の割合なり。

北ボルチオ

北ボルチオは天然の產物極めて豐富なるも利用の道一局部に限られたると、且つ內部にはダイヤ族と稱する凶蕃ありて外國人の深く內地に入りがたき事情あり、從つてボルチオは疑問の裡に葬られつゝある所とて農工業の見るべきものなく、怪獸珍禽奇植物の無盡藏なる寶庫と稱せらる。

將來の日本人發展地

北ボルチオに於ては近來農業殊に護謨栽培を計畫するもの多きも、人口稀少勞力尠く未だ著しき發達を見ざるも、將來我國人の發展し得る所は比律賓、北ボルチオ、馬來半島方面なるべく、殊に新嘉坡より近距離の間にあり、每週一回の定期船あるサラワックの如きは最も注意に値するものあり。

サラワック國

先年依岡某氏サラワックの有望なるに着眼して調査する所あり、ラジヤの特約を經て大地積の租借を爲せるが、不幸にも依岡氏の病死によりて其計畫頓挫し、近頃米田某氏亦土地開墾の爲め新たに租借權を得て護謨の栽培に從事せり、余新嘉坡滯在中、此人よりサラワックの事情につき聞きたる事あり。

サラワックはボルチオの西北部北緯一度より五度東經百九度より百十六度の間に在り、西北は南支那海に臨み、南は一帶の山岳ありて蘭領ボルチオに接し、東は英領ボルチオに隣り、面積約五萬方哩の小王國にて英國の保護の下に立つも自治專政國にして議會の之を拘束するなく、英國又干涉を爲す事なく、理事官の巡遣せらるゝなく、ブルーク、ラジヤの下に英人の官吏あり、十二の地方に地方長官あり、皆英人なり、首府クチンはサラワック河の上流二十哩の所に在り、人口二萬內支那人六分馬來人三分歐洲人印度人其他一分の割合なり、言語は馬來語を通用す、歐洲人の此地にある者四十人にして官吏關係の人々なり、日本人は六十人あり男二十女四十、其大數は例の醜業婦と無賴の徒にして眞面目の商賣を爲すもの二三に過ぎず、クチン府は政廳、稅關、學校、病院、博物館等あり、道路も整へど電燈、電信の設けなく、支那人の勢力は强大にして重要なる部分を占め、下流の勞働者の如きも全く支那

人なり、馬來人は主に官吏にして船員漁夫たるものあれども一般に懶惰なり。

ダイヤ族は日本人に對しては頗る厚意を盡すも官憲は寧ろ敬遠主義を取るものゝ如し。

土地の租借

サラワックの土地制度は人民に土地の所有權なく悉く國王の所有にして、國王より借地の許可を受くるものなり。

市街地及び公用地以外の官有未墾地及び荒蕪地は

永代借地願出のものには

貸下料一英町一弗と測量費を納めしめ、借地料は年々一英町十仙を徴す。

有限借地願出のものは

貸下料一英町五十仙、測量費及び借地料同じ、有限借地の許可を得たるものにて三年後より一英町一弗を支拂ひ永代借地權に變更するを得

永代借地權又は有限借地權を得たるものは貸下を得たる年より五年間に四分の一を開墾し十年の後に全地を開くべく、之に違背したる時は土地の返還を命ずることあるべし。

貸下地を抵當とし金錢を借入るゝ時には政府は百弗に就き一弗の登記料を徴收す。

許可なくして開墾耕作せる土地に對して政府は必要と認むる時は之を沒收す。

鑛物採掘の出願者には採掘許可料を納めて許可す、貸下の許可地内の鑛物も許可なくして妄りに採掘すべからず、海岸より六十呎及河溝道路より二十呎の土地は官有として保存す。

政府は公共便利の爲め許可せる借地に道路を通ずる事あるべし。

測量費規定

一英町	三弗	二英町	四弗廿五仙	三英町	五弗五十仙
四英町	六弗七十五仙	五英町	八弗	六英町	九弗十仙
廿五英町	三十弗	五十英町	五十五弗	百　英町	百弗
二百五十英町	二百五弗	五百英町	三百七十弗	千英町	五百五弗

以上法令の外特に護謨栽培者の爲めに無資本者も勞働十分なる時は大地積の借地を得る法あり。

一、栽培地權　二、假借地權

一は或る地點に栽培許可を出願すれば政府は之が許可書を與へ、其資力の許す限り幾英町にても開墾栽培を爲すを得べく、借地料納附を要せざるを以て護謨栽培の如き收益期遲きものに對しては便利にして手數料一弗を納むれば可なり、但し護謨樹五百本以上植附たる時は政府に報告するを要す。

二は某地點に於て若干英町の栽培許可書を受くるものにて、許可面積の明記あるを異なりとす手數料二弗。

右は政府の土地開拓を速やかならしむる爲めに設けたる特別の規定なり。

農作物

サラワックの農作物中最も盛なるは胡椒にして、農業と云へば胡椒の栽培を意味する程にて主に支那人之が栽培を爲す、近來價格の暴落より此の耕作も甚だ有利なるものにあらずと云ふ、天然產物の商品としては最も著しきは野生護謨とサゴ、澱粉、籐等にして、胡椒、護謨、サゴは年々百萬弗以上の輸出なり。

ダイヤ族

ダイヤ族は最多數を占むる土着人にて南方の山間に居住す、此種族は首を取りて祭るの習慣あること臺灣の生蕃に似たり、其首狩は親族、友人の死したる際又は夢見の惡兆又結婚の申込を爲すに當りて之を爲すものにして首數多きを誇りとなすを以て、深く其部落に入るは極めて危險なり、

稻作

此種族の米作法は極めて簡單にして、先づ樹林地を伐採燒き拂ひ、木製にして先端尖れる長き棒にて穴を掘り四五粒の稻籾を下種して自然の發育に委ね、其熟季には穗のみを切り取り乾燥し、後、掌又は足にて揉み踏みて脫穀するなり、サラワックの氣候は四月より十月まで乾季にして十一月より三月迄は雨季となすも、乾季尙毎日驟雨あり、只雨季に比して雨量少きのみ、氣溫は最高九十度最低七十度平均八十度にて、健康狀態新嘉坡よりも佳良なりと云ふ。

氣候

英人の國王

新嘉坡の開發に殊功ありしラッフルス卿を思ふと共にボルネオの西北五萬哩のサラワックに君臨せる英人ゼイムス、ブルーク氏の壯圖を忘るゝ能はざるなり、氏は千八百三年英國に生れ幼にして賢母に養はれ、其父東印度會社の重役たりし關係より二十二歲の時會社の書記としてカルカッタに赴任し、翌年印度の戰爭に出陣して傷き英國に歸り、越て四年の後支那に旅行し、途次ボルネオのサラワックに寄港し、其風土の愛すべく其物產の豐かなるに着目し、而も蠻人の爭鬪常に絕ゆるこ

となく海賊の害盛なるを見深く心に期するところあり、爾來此國の研究甚だ力め、其父死して遺産多かりしを以て、遂に百四十噸の快走船を艤し名けてローヤリストと云ひ、海員を養ひ、一千八百三十八年倫敦を發してボルテオに向ふ、時恰かもサラワックの酋長、ダイヤ族と戰ひ常に利あらず、酋長の叔父ムダなるものブルークを聘して援を乞ふ、ブルーク乃ち船員二十名と瓜哇人を引率して戰場に馳せ大にダイヤ族を破り、遂に推されて酋長となる、茲に於てか政治の改革を計り、海賊を滅し商業を進め五年ならずして治績擧り、英國に歸るや英國政府は之を待つに國賓を以てし、更にラバン島をブルテーより購ひて其太守に任じ、北ボルテオの英國司令官を兼ねしむ、かくて特派の英國軍艦に剳乘してサラワックに歸る。後英國下院の彈劾に遭ひ審理の結果放免せられしも、ラバン太守を罷められ、千八百六十七年支那人の亂ありしも之を平げ、後一度英國に歸りて二たびサラワックに到り、晩年本國に老を養ひ七十五歳を以て死せり、其後を繼ぎたるは現王チャーレス、ブルークにして英國の保護國なりと雖も、英國民にして而も馬來種族に君臨して一國を成せるブルークの壯圖眞に一英雄なりと云ふべし。

第九章　セレベス日記

マカツサル人

ロンボック人

ロンボック島王の城池

新發見の植物
（コアシロマ、ザリオヒオ）

蘭洋上川
（イミカリカ、ムウヂビスア）

第九章　セレベス日記

瓜哇よりセレベスへ

南洋の富士山

エリオット號

十月十四日　セレベス行の郵船「エリオット」號午後二時出帆すべしと聞き、一時に乗る、岡崎商店の中川氏船まで見送られ何かと世話せらる、室も一人にて都合よし

マカッサーに商店を開ける倉田氏とボルチオにて知り合となりしが、同船にて、船中のこと何かと頼み、給仕用の會話二つ三つ習ひ覺え、尚ほそれにても用の足らぬ時は二等船室の同氏を煩はして用を辨ず、蘭語と馬來語との外に通用せぬ處に唯一人の旅、心細からぬに非ず、夕方出帆海上穩かなり。

十月十五日　朝起き出づれば東瓜哇に近く航行し、火山と見ゆる高山の數多く往き來の船も多く皆兩翼に横木を附けたり、海水は藍よりも黑く、飛魚の水面を飛ぶ樣面白し、霞に曇れる遠山の内富士形のもの見ゆ、何地にても此形は我等にとりては嬉しき景色なり、海岸の林色淡きは紅樹なるべく、色濃きは椰子なり、正午バッ島のボーレンに著す、荷役了へて出帆せるは夜に入りて後なり。

セレベス海

十月十六日　未明ロンボック島にかゝりアンペナン港に入り、十時出帆、此處よりは東北を指して東瓜哇海を横ぎる、海上今日も靜なり、夕方何處を見ても陸影を見ず、水や空空や水なる大海の中に帆船の影さへ見えず。

双眸一碧水中央　數曲高歌意氣揚
壯士半酬人未老　舵樓睨視大南洋

此詩是れ往年矧川志賀先生の南洋海上の口吟にて、今日覺えず此句を思ひ出し先生に繪葉書を書く。

十月十七日　今日も海靜なり、二等船室に獨逸婦人あり、同じ二等に來れる某氏を介し、日本より醫學修業に留學せる某と稱する邦人あり、年頃懇意なりし間にて其歸朝の折も同船して新嘉坡にて名殘を惜しみけるが、聞けば其人には國に許嫁の妻も在すなりとか、其後の消息に就て知る人もあらばと心がけしに、一等には日本紳士の見ゆるが若しや此人の消息知り給はずや尋ねくれよとの頼みなりと語るに、其名は聞きも知らず氣の毒なれど其旨答へてよと歸しやりぬ、かく迄心掛けての穿鑿かりそめの間とも覺えず、それともかゝる人に消息を絶てる人の心は何故にや。

マカツサー

正午島影を左に見て帆船の一つ二つ顯はれ來り、一時マカッサーの港に近づき二時波止場に横附けしぬ、棧橋には同じ會社の船四隻ばかりあり、直ちに上陸してホテル、ヲーデルランドに投ず、この宿には紹介狀携へし稻垣洋行の曾根氏あり、若き人なれど親切にて何かと便宜を與へらる。

マカツサー市

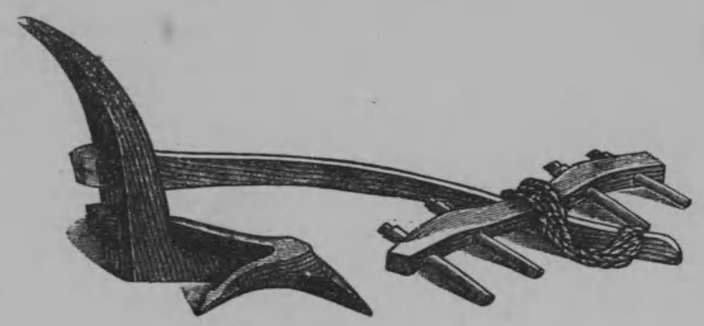
此港はセレベス第一の都會にて東印度諸島の要路に當り商賣繁昌のところなり、人口二萬七千人内支那人五千人と稱せられ、商權は支那人の手中にあるなり。

博物館

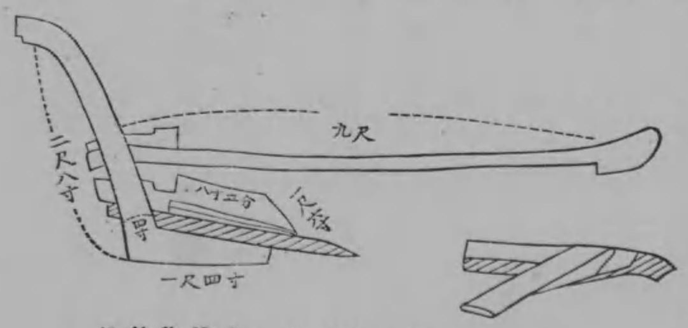
十月十八日　曾根・倉田兩氏の案内にて博物館に到り見る、土地の豪族の住居を其儘に移したるものゝ由にて結構粗なれども色彩り彫刻見るべし、日曜の外開かぬ由を聞き留守する者に開門を乞へば主任不在なればと云ふ、主任は兵營にありと聞き倉田氏をして訪はしめしに、ここも不在にて當直の將校我名刺を見て兵卒をして其居所を搜し需めさせ、やがて歸り來りし主任の人に來意を告げければ、易き事なりとて直ちに戸を開かせ、心の儘に見物し給ふべしと云ふ。

陳列品は土族標本のみにて舟・家屋の模型など多し、人形の荒木作りなるが粗末なれど天眞にて甚だ氣に入れり、土豪の寢所は其儘のものを移し武器・漁具など見

るべきもの尠からず、農具の内ワレース氏の著「馬來群島」にて知り居れる木製の犂あり、面白きものなれば寫生、尺量などし更に後日の來訪を申込みしに、何時にても開門すべければ隨意に觀覽し給へなど云ふ、市中一めぐりして稻垣洋行の出張所に至れば、東岸より集りたる高瀨貝の荷多く積み入れ其品質に依りて等級を選り分け居れり、こは大阪に送りボタンの原料となすものにて、一擔の價十九圓より四十二圓に至る、こゝよりは英



セレベス島木製犂
（ワレース氏馬來群島に載れるもの）



セレベス島マカッサー市博物館に見たる木製の犂（著者原圖）

國、佛國にも同じ目的にて輸出せらるゝ由、序ながら此地輸出品の時價凡そ左の如し（圓は蘭貨の義なり）

米十二圓（但目下輸出禁止）　籐三圓乃至九圓　椰子乾實十六圓　ダマル（樹脂）四圓五十仙乃至三十圓　丁香四十圓乃至四十五圓　肉荳蔻花四十五圓實十二圓　ケミリ實五圓　カシア實（染料）二圓乃至五圓　海藻（アガーアガー）七圓　カエホテ油藥料凡一斗二十五圓　水牛皮十八圓乃至三十七圓　鹿皮二十五圓乃至四十八圓　鹿角五十五圓　水牛角二十八圓

赤魚

此地の名物に「イカン、メラ」と云ふあり、赤魚の義なり、小さき魚の鹽辛にて其色梅の酢に漬けたる如し、熱帶航海の食卓上ライス料理に添ゆるものゝ一つにて能く人の知る所なり。

日本の燐寸

南洋殊に蘭領印度に於て燐寸は我國よりの輸入多く、一千九百九年に總額二百六十六萬ギルダー中百五十四萬ギルダーは日本製品にて重要なる貿易品なり、瓜哇に於ては日本燐寸の使用者多きもセレベスにては瑞典製品に壓倒せらるゝ傾あり、日本品の缺點とする處は餘燼忽ち中斷して衣服を焦し器物を燒く虞あるに反し、瑞典製は軸木其儘炭化してかゝる憂なく、又日本製は箱の硝藥不十分なるよ

り軸木殘存するに係らず硝藥を消盡し、又硝紙破損するため信用を損ぜるより從て瑞典製の競爭に打負くる狀態なり、此等の缺點は容易に改良し得べきことゝ思はるれば、我國重要商品輸出の當局者は何とか相當の取締を要すべきものなり。

油料ケミリ

此地の輸出品中ケミリと稱する木の實あり、石栗（クロイナト）の一種にて油の原料なり、此樹は既に臺灣にも試植しあるものにて、將來盛に栽培を爲すべき有用樹種なり。

夕方曾根氏の案内にて自働車にて町の端より端まで乘り廻す、折柄港にかゝり居れる蘭國バケット會社の郵船「ハンヂック」號に失火ありとて波止場附近混雜甚だし、自働車を停めて見れば岸近き處とて船の樣子手に取る如く、今や中央部の船橋燒けつゝあるが、火は次第に兩方に燒け廣がるものゝ如し、一時間を經て同じ所に到り見れば、火勢は天を焦し最早船の運命も是迄と見え碇泊中の報知艦にて遙かに沖に曳かれ行くに、全船火に包まれたる三千噸の巨船波を分け行く樣舟火事と云ふもの始めて見たる眼には恐ろしき眺めなり。

船火事

セレベス見物の餘興としては餘りに高價なることよと思ふ折しも砲聲一發響くにあれはと問へば時刻を報ずる號砲なりと云ふ、我國にては正午の號砲あるを知れど午後八時の號報とは面白き思ひ付もあるものなり、此時間こそ家々晩餐の時刻なれば、此土地にては恰好の時と思はる、此時海岸に立ちて火を眺むるに、群集は黑山の如く汽鑵の爆發したりと覺しき大爆聲に人なだれを打ちてどよめき叫ぶなど騷がしかりし一夜なり、扨も此後船火事は二日二夜燒け續け（マカッサー）の海上黑煙たなびけり、聞けば機關室よりの發火にて、東沿岸の航海に翌朝の出帆として荷物も滿載し、客も船員も上陸中とて、支那商人中には二萬圓の現金を失ひたるもあり、積込める數千俵の米を燒きて保險料にて却て利益を得火事の最中に更に買込みをしたるもありとか、世は樣々の事もあるもの哉。

初夜の號砲

マロス行

十月十九日　倉田氏は近日中日本に歸る爲め店も片附けたれば何地なりとも一日二日は御案内すべしと云ふに、近所にて見るべき所は米の產地なるマロスよかるべしとのことに、一晩泊りに見物せんとて往復の馬車賃銀を十七圓に取りきめ朝七時に立出つ、倉田氏は一年計りマロスに店開きたる緣故もあり、一度は妻を伴ひたしと思ひけるも女の身の出あるき困難なれば今日迄も其機會を得ざりしが、日本へのみやげ話に連れ參りたし、馬車の隅貸し給はすやと云ふ。女はとかく

に旅行し兼ぬるものなり、能くも心付かれたり、馬車は一人も二人も同じ事なれば
と快く承知したるに、中食の辨當など用意して若き妻君は洋裝甲斐々々しく裝ひ
て同車せり、馬車は二頭の逸物にて路も良き事とて駈足早く、カナリヤ樹の並樹能
く栽ゑられたる町外れを出て田舍道を北に一里許りにて鹽田あり、潮を汲み上げ
て天日に乾すにて、泥田の上にて結晶せしむることとて鹽の色も黑みがゝれり、今
年は二月以來雨なき炎天打續きたりとて鹽田は豐作なり、此島は專賣の制もなけ
れば近頃は一俵一圓に下落せりとぞ。

鹽田

タローと云ふ村に水量多き川あり、紅樹茂れる水際にセレベス式の床高く屋根
に千木置きたる草屋建て並べられ、家の材料は多く竹材を用ひたり、此川の渡舟は
馬車を其儘にのせて鐵の鎖にて引き渡す輕便のものなり、渡れば紅樹の森深く、あ
たりは潮の乘る泥土にて折々は鰐の道路に這ひ出るとあり、三四尺の大蜥蜴も多
き所なりとか、こゝの紅樹は大蛭木（オホヒルギ）にて、此の林を道路丈け切り拓けるなれば兩側
は自然の並木を爲し、其枝より垂れ下れる子實の尺餘なるが夥しく頭上にかゝる
など熱帶特有のけしきなり。

蛭木の森

こゝを離るれば鹽分多き原野にして、灌木の藪あり、遠くは稻田拓け村々里々森
をなせり、長期の旱魃の爲め草も黃ばみたゞ綠の色變らぬは野生の刺多きサボテ
ンとサボテンダイゲキのみにて、花は其處此處の藪にからみ附ける白き萠顏の種
類を見るのみ、九時バサルタルペと云ふ小村に著く此處は時を定めての市場あり、
追剝多く出てゝ人の害せらるゝ事多かりし爲め特に市場を開きて村を作れる所
なりと云ふ、此邊並木にモリンダの木を植ゑたるは珍らしく、藪には油桐の一種葉
色の白きが多し、行く手より騎馬の人に行き逢ふ、槍を持てる從者二人附き隨ふ、主
人は洋服にて鍔廣の竹の帽を冠り馬上ゆたかに打たせらるゝに、供なるはサロン
をまくり上げ素足にて槍を肩にかけ遲くれじと急ぎ從ふ其樣奇觀なり、午近き頃
又も川あり、マロスの川にて水極めて清し、これを渡ればマロスの村なり、川沿ひに
二列に建て並べられたる小村なれど、近在より物買ひに集る所と見え市場は賑か
なり、此處より東に向ひて更に八哩ばかり馳せさせ山の根に至れり、山は石灰岩の
塊にていづれを見ても鐘乳垂れ下れり、一時小川の邊りに行き留る、草屋一軒あり、
療養所なるべく蘭人夫婦病を養へるあり、緣の椅子を吳れたれど直ちに名所の瀧
見に行く、瀧は夫より一町計り上手に在り、二段をなせる瀧にて四邊は綠樹の森の
中とて景色佳なり、單調なる平地の景色に馴れたる同行の男も女も久振りにて斯

マロスの瀧

水浴

る景色を見、日本に歸りたる心地せりとて悦ぶこと限りなし、左手に鐵の梯子ありて危うげに見ゆる階段上れば上流の谷川にて、水澱みて淵をなせり、村の子供綸を垂れて川鯊を釣れり、瀧の水際に林投の蓆敷きて辨當を開く、心盡しの握飯に胡麻鹽をかけたり、天麩羅あり、福神漬あり、久し振りにて日本らしき辨當を味ひ景色よき瀧を肴に快き晝餐を濟ます、此邊蝶類多く二尾蝶・鳳蝶・邊紅・黄・白・蛇目各種のもの飛び來り飛び去り、昆蟲學者ならぬ余も捕蟲網なきを惜む程にて、ワレース氏も足跡は此處までは及ばざりし筈、植物よりも此方の珍物多かるべしと思はれたり。

此川に水浴取らんとて用意のサロン赤の縦横縞なるを着けて瀧壺に入れば冷氣身に泌みて暑さも忘るる計りなり、日本ならば眞裸に飛び込み思ふまゝに水を浴びんものを土地の習慣には背き難く、サロンを附けて肌を曝さぬ事之も郷に入りて郷に從ふ事と云ふべし。

此處にて二十種許りの植物を採集したるに、二種は新發見のものにて、後日ドクトル、バレトン氏及びローゼンベルヒ氏の檢定によれり、中にも羊齒の一種は最も珍奇なるものにて、「アスヒヂウム、カワカミイ」(Aspidium Kawakamii)の學名を與へ、ボイテンゾルグ植物年報第一卷(千九百十二年)にて發表せられたるものなり、かくてマロス瀧は我川上の姓を學界に紹介せられたる紀念地となりぬ。後の日にドクトル、バレトン氏は他の茜草科の一種に「オヒオライザ、マロシアナ」(Ophiorhiza marosiana)の新學名を與へてボイテンゾルグ植物園圖譜第四卷に發表せられたり。

見世物となりし一夜の宿

さて午後三時マロスに歸り案内者の知れる家に一夜の宿借ることゝなり、二階には心盡しの林投蓆新しきを敷き竝べ何かともてなし顔なり。椰子葺なれど屋根は低く室内は九十五度の熱氣に蒸され、玉の汗は泉の如くに流るれど、入り代り立代りて村人の覗き見るに肌脱ぐこともならず、見世物も辛きものにて、さりとて木戸錢取るにもあらざれど追ひやらんもさすがにて、何地も同じ事ながら日本の女見たる事なき彼等には殊に珍らしかるべく、村の娘などは引續き梯子を上り來ては覗き見る事うるさき程なり。

晩餐はセレベス式の馳走あり、之も主人夫婦が心盡しなり、此地の慣習客を悦び殊に日本人に對しては厚意を盡し、心よりの歡迎嬉しき事なり、案内者の知れる村の老人等二人三人尋ね來て何故に我家に泊り呉れずゝなど迫るもあり我等には差上ぐ可き米なしと思はるゝにやなど理窟云ひて不平を漏すもあり、客を爭ふなどは餘所には見がたき風と云ふべし、夜は冷氣立て我のみ唯一つの寢台に入り他

は床の間にゴロ寢の夢を結ぶことゝて、蚊帳もなければ轉々して一夜を明かしぬ。それに困り入りしは便所の設けなきことにて、大便は川に垂れ流すも夜は鰐の恐れありなど脅かされ、人の見ぬ小蔭に用を便ずるなど之も旅の逸話なるべし。

マロスの農業

稻作

十月二十日　朝村の古老を招きて農業の事聽く、稻は一作にて十二月上旬に苗代に種蒔き、四十日目より田植を始め場合に依りては七八十日に亙ることあり、二三本或は四本植にて距離は六寸位なり、田植後百日にて收穫を始む、即ち下種後百四十日にて刈り始むるなり。

一株の穗の數は七本より十本にて、穗は熟するに隨ひ一々小刀にて剪み切り束ねて之を貯へ、入用の折に搗き白ぐるなり、穗の粒は余の數へたるは無芒種五十七粒有芒種百十一粒なり、粒は圓形のもの多く、日本種に似たり、田には我一反一町などの單位なく、一つの田をテッポーと名けて單位とする事我一畝と云ふが如し、米の時價は一俵（ピクル）八圓五十仙より九圓七十五仙なり、廣く栽培せらるゝ粳の芒あるものをバンダと云ひ、味の佳きはバナッサと稱へ、粳の内に赤・黑・白の三種あり、黑は臺灣にても往々栽培して茶の代りに飲むものと似たり、耕作の方法は極めて簡單にして、犂はもと木製の物を用ひたれども今や刃先は鐵となれり、小作人は收穫の半分を地主に納め下田は三分の一を納むるものなり、收穫時期には穗を摘み取る者は四分の一を貰ひ得べく、何人にても他人の田に入りて摘み取り此の報酬を受くるなりとぞ、三人の勞働者ある農家は百俵の米を收め得べく、唯收穫の時は人手を要す、收穫は一人にて一日四束より六束を收むべく、十束の穗は一俵に當れり、斯る話を聽き農具を見、籾を取り寄せなどする内に馬車の用意も出來たりと云へど、古老の居れるを幸ひ、余の物好なる例の稻の神話やあると問へば、神の名を語るは勿體なけれど珍客の御需めなればなど勿體つけて語り出せる物語は是れ。

米に關する神話

宇宙創造の始めに出てませる神をバタラグルとなん稱ばせ給ふ、バタラは最上の權利を有するものグルは神即ち全智全能の神の義なり、元は天の神に在せしが天降りまして下界に臨ませ給ふ、世界は天界・地界・下界の三つに分れけるが、神降らせられけるは地底の下界にてありける、こゝに名をばバタラトンボーと申させ給ふ女神おはしき、御名は地底より生ひ出づとの義なり、さてもバタラグルの神は此女神と妹脊の契り結ばせ給ひ、共に連立て天上に歸り昇り、さては下界

に降り給ふなど繁く天地の間を往來し給ふ程に、男女二人の子を生ませらる、兄をサラリ、ガーテン妹をシッテアサリと名づけて地界に移り住ませられけるが、茲に到れば不思議に飢てふことを覺えられければ、如何にせばやと使して父神の許に訴へ申されけるが、翌る日に姫の屍體より一つの草生ひ出てぬ、兄の王之を見て驚くこと大方ならず、又もや父神に此事申させ給ひけるに、父神の仰せに此草の籾を取り入れて春きて食へば飢は立所に醫やさるべしと宣り給ふに、畏みて籾を取り入れ炊ぎ食ふに其美味云はん方なく、之より後は飢を知らざるに至りぬ、是れぞ稻にて、此世に米ある初なり、されば今も種下す時には此女神を祭る儀式あり、年の豐作を願ひて祈念をこらす時には神の御姿おぼろに人々の眼に顯はれ給ふことありなど傳へらる。

此神話こそセレベスのボギス族間に稻の起原を語るものなれ。

ボギス族の俗謠

面白き話に興を催し、さらば普通の俗謠中人の能く知るものにてもあらば敎へよと云へば、宿の主人は得意氣に低く唱へ出したる歌に

セレベスの歌

テッバ、テッバ、ブガ、ナニ、バケ、ブカノ、
テア、コマリン、ナンバ、ブカ、マライン

こはボギス語なれば、更に馬來語に譯したるを案内者夫妻が更に三度譯して其意味を語り聞かせくれたり。

早く花をお取りなさい、もし取らねば私が取ります、人に此花をとられてはなりませぬ

花に寄せたる戀の歌にて面白しと思ひ余は直ちに之を譯しぬ。

いざとく花を手折れかし
君が折らずは我れ摘まん
人になる取られぞこの花を

さて其續きを聽き寧ろ俗謠とせばやと更に筆を執りて、

あの花早く取つたがよいよ
ぬしが折らねばわしが取る
人にやるのは餘りに惜しい
花はよい花人が好く

夜になつたら取る事出來ぬ
花が散つたら香が失する
色はどうても香がよくば
花のねうちはそれて足る
花を買ふなら夜明になされ
夜は香ひが散り失する
花の數々竝べてごらん
どれがよいやら選み取り

外に今一つと乞へば、神に關することとなり、さらに俗謠を問へば、長き歌なれば一日二日にては語り盡さざる程のものなり、其始を少し許りお話しして見ん、但しどの一節にても能く謠はるゝものなりとの事にて、若き男女の心を叙して對話體を爲せり、此譯は拙き筆なれば物笑も如何と思へど、旅の恥は何とやら況してやこゝはセレベスの田舍の事なり、人も大目に見のがすべしと先づ遁口上を陳べ置きて

セレベス歌の和譯は斯くなん。

(男)色香めてたきばらの花
花の一枝われほしや
折られて散らん其時に
わが家の窓に落ちよかし
うつくしとてや人も見ん
人もや見るとあと見すな
かざしの主は多ければ
引手あまたに迷ふらむ
花の中なる香の花よ
それにもまして わが花は
葉にも花にもかほりあり
明けぬ其間に手折らばや
白のいばらは母人の
常にさしたるかざしばな
君の肌のま白くて
やさしき姿もその爲めか

(女)われこそ花の白さうび
君の窓邊に落ち散らん
あたり見廻すその時は
あかき色とやなりもせめ
(男)廣き世界を經めぐれど
君の如きはまだあはず
心のかほりうるはしき
君の如きはまだあはず
(女)きびしく縛る函とても
紐はきびしくくゝるとも
まごゝろうごく其時は
あだし心にまよふらむ
(男)遂には萠えんこの花の
その折からに手に取りて
かざしの花と見んものを

かねて思へり思へりき
(女)雨降り出てゝ水出てゝ
家も流るゝそれよりも
心がかりは只一つ
君が心のかはるかと
(男)いつともならば諸共に
たのしき家に住み得べき
今をむかしと語る日の
はや來れよと祈るなり
(女)ふたつの絲は其ふとさ
おなじきごとに君と吾れ
こゝろの絲はおなじくて
やがてぞ結ぶ其のえにし

偶〻佳境に入らんとして以下次號となる、歌の調は兎に角たとへの辭など面白きものあるにあらずや、斯くて時はいたく移りて馭者の催促切りなれば、辭して、午後

マカッサに歸る。

郵船「パンヂック」號の火災より船繰の都合あり、二十二日後の便船は豫定しがたしと聞き、まだ見たき所もあれど明後日歸航の途に就く事としぬ。

マカッサ人の自殺

死すべき時に死せざれば死にいやまさる恥ありとは我國のみの事にあらずかし、辱めを受けて死す可き時と思ふ時には我國には潔く切腹すると云ふ事あり、英國人は斯る場合には短銃にて頭腦を射碎くもありと聞く、扨もマカッサ人は愈〻死なねばならぬ其の時には自ら殺すは宗教の禁ずる所とて先づ人を傷害して人に殺さるゝ方法を取るなりとぞ、是れ我等の眼には極めて異樣の事と考へらるゝも、彼等の間には男らしき所業として承認せらるゝものゝ如く、廉恥心を刺戟するもの尠からぬ由なり、扨も自殺を決心せる人は先づ刀の鞘を拂ふなり、一度鞘を離れたる刀は血を見ずしては已まぬにて、其相手は選む所なく、かく思ひ立つが最後手向ひのあるなしに拘はらず親族故舊を問はず突きかゝるなり、されば道行く人と雖も之に遭ひたるが不幸にて、時として數人又十餘の傷害者を出す事あり、之と見たる人々は獲物々々を携へ出でて之に渡り合ひ、寄づてたかつて殺すなり、自ら死なん者は斯く迄の方法を取らざる可らざるは宗教の制裁ありとは云ひながら不思議の死に樣もあるもの哉、結婚の祝の席にて我花嫁の年頃懇ろなりし男同席しけるが聟殿を辱しめしとて立上りし聟殿の劍の鞘を拂ひ集りたる客人は殺され傷けられ遂には聟殿も殺されて其所望の死を爲さしめたるなど悲慘の話もあり、此事はマロス行の馬車中にて案内者の物語にて聞けるがワレース氏の著書にも此事詳しく書き誌されロムボック島にも此風習ある由記載ありし樣に記憶せり。

ボトン島の帆蓆

マカッサの市中植物纖維にて粗く編みたる蓆を賣る、ボトン島の產物にて多く帆に用ひ又敷物とも爲せり、マカッサにては一枚七十五仙位にて賣るも原產地にては五十仙位のものなる由、土名をコワラと稱べり、博物館に此織方を示せる器具あり、椰子の一種にて(學名コリハ、ゲバンガ)葉の纖維を割き製せるものなり、此種の粗末なる纖維を束にして物を括るに使用する由にて此島より多く輸出せり。

海藻

食用海藻

マカッサの市場にて普通に賣り居る海藻に二種あり、綠藻類にて、一つは土名を「ドンゲドンゲ」と云ひ「大ミル」なるが、學名「コデウム、トメントサム」(Codium tomentosum)一つは蓮葉狀の葉體ありて粘液質のものにて土名を「ライ、ライ」と云ひ、學名「カウレルパ、マクロデスカ」(Caulerpa macrodisca)と稱す、此物は水にて洗ひ清め湯を注ぎレモンの汁と醬油を加へ食したるに、口に入るれば溶くる程軟にて、日本の三杯酢などにせば酒家の歡迎するものなるべし、價は廉にして土人は蔬菜用に常食するものなり、これに似たる種類にて、鹽藏し置き酢にて食するもの我が九州方面にあり。

ボギスの神話

ボギス族の神話

今は昔セレベスにルーと云ふあり、此國の始めの王をサウリガーデンと云ひ我國ならば天照大神とも申すべき地神の初めにて、此王に就き種々の神話傳へらる、此神の妹にヤーベンと云へる美人ありけるが、兩人は双兒にて早くより別々に育てられたる爲め兄は妹の同胞なるを知らずして其美貌にあこがれ戀愛の情に堪へかねて心のたけをかき口說かれけるに、妹は其同胞なる事を語り、其從妹に我に增したる絶世の美人ありルーと云ふ國に住めば之を尋ねて妻とし給へと勸めたるに、王はいかにして之に遭ふべきかと問ひしに、船と云ふものにて渡り給へと云ふに、神木を伐りて船四十隻を作り、數々の音物携へて結婚調はずば再び茲に歸らずとの決心示して船出し、海上にて瓜哇王・地下王・風の王・火の王などゝ烈しき戰爭に打ち勝ちて望む所に上陸しけるが、或る神の敎に、汝の妻は美貌に過ぎ姫は却て耻かしがるべければ暫く形を變へて樣子を見るべしとの勸めに、妻を人猿族のオローに換へ商人となりて姫の宮殿に入り込み井戸に水汲める侍女に腕輪を買ひ給へと申込みしに、此物こそ姫の年頃探し求むる腕輪なれば價を問はず買ひ取らんと云ふに、價の金銀はほしからず姫の食ひ殘しの飯と飲み殘しの水檳榔子の嚙み汁を受けたしと申込みて之と交換したるが、其初めて姫を見たる際、我が妹は世界中の美女と思ひしが、夫にもまして美しく、妹が月輪ならば姫は日輪なり、もし姫に襤褸の衣を着せんに錦とも見ゆべく、肌の色は乳を流したる如く白く、髪の黑さは闇夜の如く、其光澤は日の出の如く、姫の姿をば三張の幕を透して見たるが其の色は錦の塊りを見るが如く、髪の長さは七尋七尺七寸に箒の筋を七つと蠅の一匹

の長さを加へたる程あり、世界に美と云ふものあらんにこれほどの美あるまじく、我妹は美はなりと雖ももし渠を我妻とし居たらんにも姫の姿を一と目見ては更に新たなる戀慕に心を奪はるべし、斯く思ひ込みし王は、遂に父の王まで結婚を申込みぬ、父王の曰く、娘には瓜哇王との許嫁あり、王の曰く、此の王と戰ひて殺せり、父王は更に海の王、地下王などよりも已に結婚の申込ありし旨を告ぐるに、之にも戰勝ちて皆戰死せる由を語るに、此上は姫の心に任すべく婚儀の事は親の心一つにも定めかぬれば日を定めて相談すべしと別れけるが、同じ從妹にチンバウと云ふ娘ありて巧みにサウリ王の心を捉り、又姫をも欺きて私かにサウリと婚儀を結びけるが、王は姫の事忘れかねて或日稀代の名香携へ姫の宮居を尋ねけるが、又もや餘りに麗はしき美貌に驚嘆して我知らず氣も遠くなりて倒れ伏しけるに、姫は驚きて己れの長き髪の毛を水に浸して王に振りかけ漸く人心地付きける折しも、妻のチンバウ嫉妬の形相凄しく駈け附け來り有無も云はさず我家に連れ歸りぬ。斯くて此物語は抑揚あり頓挫ありて面白く愈〻佳境に入らんとするに、此の筆寫の書冊はこゝにて斷絶せることゝて讀み切りとはならず、こは某氏のボギス語を、馬來語に譯したるを更に和譯し貰ひて聞きたるものなりしが、全編を知らんには興味ある南洋小說たる可きに、返す返すも遺憾の事なり、こは一節に過ぎざれども、此地の思想を知る便りもあらばと思ふまゝに斯くは書き記し置きぬ、但し余の聞きたるは十分一をも錄したるものに非ず、神話なれば奇怪至極の物語など此の內に混り居れど煩はしければ省きたり。

歸航

十月二十二日午前九時の出帆と聞き八時に來る、同室には支那人の汪鳳翔氏として教育家あり、溫厚の紳士にて外目には我等と同じき姿なれば、他國人よりは同じ國人とや見るなるべし、言語通ぜぬ事とて互に打ちとけて談話も出來ざれど、只用談のみは英語にて辨じぬ、曾根・倉田・岩井の三氏見送に來られ、日曜なればとて船の出帆まで船に停りて雜談す、岩井氏は兵庫より介類視察の爲め渡航中の人なり、此地にて省籐・黑檀の積込みあり、黑檀にて思ひ出したる事こそあれ、南國記と云ふ本の南洋富源を叙したる內にセレベスに黑檀の大木の記事あり、三十二人にて周りを取り卷く程と書けり、恐ろしき名木もあるもの哉と之を語れりと云ふ人に此事を問ひたるに笑つて詳しく云はず、餘りに太きに過ぎずやと云へば、此位のものは

ありませうかと徑三尺もあるべき圓卓を指しぬ、それにしては太さは違ふ樣なりと笑へば其人も呵々大笑しぬ、盡く書を信ぜば讀まざるに如かず、人の話を皆信ずれば聞かざるに如かず、知名の人の書きたるだけに人を誤る事もあるものなり、物書く人は相當の心得あるべきことなり、さても今日よりは愈〻通辯なしの旅行なり、給仕などは結句手眞似にても用は辨ずるものなれど食堂にては英語を談る人と隣り合せぬことゝて分らぬ蘭語を聽ける振りするも辛きものなり、正午漸く出帆す、海上は穩かなり。

ピマの港

港外の淺瀨に乘り揚げたる「ハンヂック」號は舳の方より尙細き煙の立昇る、我等此港に入りし折は姿美々しく錨下せる三千噸の此船も、一夜の火災に見る影もなき姿と變り、二つの帆檣は斜めに折れて倒れかゝれり、船の末路もかくては憐れのものよと船客皆之を見守るに、一人の他にもまして感慨に堪へかぬるが如きあり、これも道理や其船の船長にて今報告の爲め歸り行くなり。

十月二十三日　朝起き出てたる頃は我船は已にスムバワの島近く航行中にて、八時狹き灣口を入りてピマの港に錨下せるは九時なり、此港は袋の内を見る如く、灣内廣く中央に小島あり、其の出口は何處か分らぬ程にて山にて圍まれ水門は極めて狹く、一隻の船を沈めなば他船の通路も塞がるべく思はれたり、こゝは大噴火口のあとならずやと思はるゝ程の地形なり、此處にて多數の積荷あり、白檀（ビヤクダン）・木蘭（ニツケイ）の竹籠入なども多く、殊に多數に積み込めるは馬と水牛なり、二隻の荷舟繫ぎ合はせて竹を編みたる床を作り、あたりに竹の棚を廻して二三十の牛馬を入れて運び來り斜めにかけ渡せる板の上を引きずり揚（あさ）るものなるが、牛馬はもがきにもがきて溫（ぬる）なしく入るはなく跳ね廻り飛びあがり遂には海に落ち入るもあり、海に入れるは布袋にて括りあげ起重機にて引き揚ぐる爲め却て此方が容易なり、終日の積込みにて夜七時出帆す。

鹿角の熊手

鹿角の熊手

闇夜の出帆

闇黑の間を出て行く船べりに立ちて黑暗々にしてあやめも分かぬ闇を眺めけるが、覺えず詩あり。

此港にて舟夫の使ふ竹竿のさきには皆鹿角の鉤を括り籐蔓にて縛り附け本船の綱に引きかくる熊手の用を爲せるは他には見ざりし珍らしき物なり。

夕日は落ちてくれそめて
島やまかげもほのくらく
くれゆくそらに星一つ
山のはに見る星一つ
星かと見れば火の光り
ふなぢのやみを照すなり
海は靜かになめらかに
やみのなか行く船のほか
見ゆるは空の星一つ

十月二十四日　朝六時スムバワ港に入り、此處にても多くの牛馬を積込み夜半出帆、二十五日朝同じ島の西南なるラブーン、ヘヂに入る、北に山をうけ南に遠く岬多く突き出せり、浪のうねり大にして港内ながら船少しく動く、こゝは荷物も多からず正午出帆、灣外大うねりにて船動揺す、潮流極めて急にして此瀨戸を渡ること一時間漸くロムボツク島のタリワンに着く、積荷了へて出帆せるは夜の十一時頃なり。

ロムボツク島の舊王城

十月廿六日　朝七時同じ島のアンベナンに入る、茲は往航の時も寄港したる處なり、時間ありと聞き同船の白人七名と共に上陸す、港は市街をなせど主に支那商人の門戸を張るところにて、馬車を儆ひて東に向ふ、町外れに水の清き川あり、道路は行儀能く栽ゑられたるカナリヤ樹、大葉榕樹の蔭涼しく、あたりの土地は皆能く耕作せられ水路も能く作られたれば灌漑排水は心のまゝなり、瓜哇の水田地は肥沃なりと見たる處多かりしが此處も瓜哇に劣らざる豐沃地なり、今は水田終りて皆畑作なり、主に煙草、玉蜀黍を栽ゑ畦の垣には三葉藜（ミツバアウ）荆と林投とを植ゑたり。

道行く人の風俗は瓜哇に似たれど、女は黑紺の上衣を着け長きサロンの裾は地に引きずる如くに著流し、頭上に籠をのせ姿勢正しく歩みを運べり、男は乳以上を裸にしたるが多く、サロンは裾長く或は之をまくり上げ、腰には一刀を手挾み或は左に之をさせり、白銀作りの鞘多し、程なく島の首府なるマタランに入る、公園あり蘭人の紀念碑あり、市場を見る、野菜多き中馬齒莧（スベリヒユ）を賣るもの多し、此邊は士族町とも見るべく皆土塀をめぐらし又は煉瓦を積み上げて垣となしたる内に一家族或は

王城

一族一區劃を爲すものゝ如く、其一隅には面白き形したる小さき祠（ほこら）様のものあり、宗教上の飾物なるべし、土壁には銃口を穿てるものあり此處の市場は一層の賑にて絞り染めの薄絹の帶は名物と見ゆ、更に馳すると六七里にて舊王ラジャの邸城ある處に達せり、途中椰子の並木あり、坂は次第に上りとなり馬の呼吸苦しげなれば時々車を下りて路傍の草を採集す、王城は土壁にて圍まれ入口の門前には彩色したる二個の人形あり、内に入れば左右に池あり其周りはマンゴスチンの果樹を植ゑたり、更に進めば休息所あり、寢室、食堂も備はり見物客の用を足せり、庭には檬果、朱欒（ザボン）の大木蔭をなしクロトン、アカリハ其他の花樹香木を栽ゑ込み更に一段下の庭にはミ

ロムボック島の物賣女（著者寫生）

ムソプスの大木あり樹下に腰掛を設けたり、こゝより見下す景色よく、清水の溢れたる大池あり、底深く黒藻茂れり、石垣にて積み重ねたる階段より色々の形したる水門を開き清水流れて瀧をなすは見るも涼しげなり、池の四隅には彩色施したる人形を飾る、石段を下れば又數階の下に池あり、老樹茂り土塀にて取り圍める水浴場あり、舊王の所要にて特に歐羅巴人にも使用を許せり、石を疊みたる水槽に清水溢れ涼氣は暑さを忘るゝばかりなり、之より上は五六階の石垣を積み上げ上に邸宅あり、結構の壯大なると掃除の行屆けると清水の多量なるとは驚くばかりにて、是れ丈けの設備さへあれば熱帶の暑さを知らぬ事なるべし、一行の水浴取る間に余は藪蔭駈けめぐりて植物景を見多少の採集あり、かくする内に中食の食卓も出來、例のライス、テーブルに腹を滿たし、午後三時待たせ置きたる馬車を急がせてマタランに歸り、古跡など訪ひ池の中に構へられたる法廷を見て、歸るほどに葬式の行列に行き逢ひぬ、然るべき人のものと見え中々に嚴なり、先驅には毛を附けたる日本のシャグマ様の槍を片手にし、片手には銅皷を持ち槍の石突にて巧みに叩き合せて一種の響きある奏樂を爲すもの十人餘り其の樂の響はもの哀れなり、次には供物捧げたる少男少女の一列、次には婦人の盛裝したる老若の一行、次には男子、

次には金色燦爛たる棺の輿をかき、次に男の殿りあり、半身以上は裸體にてサロンの模樣は流石に美はしく、男は皆一刀を腰にしたる樣中々にいかめしげなり、珍らしきもの見たる事よと悅ぶに、墓地は近所と見たれば車を下りて行列に從ひて行き見る、茲には假屋を建て色々の供物捧げたる所に棺を下せり、墓地はいづれを見ても墓印もなく土を盛りあげたるばかりなり。

夕方港に歸る、船は積荷の都合にて他に行きたれば海岸の倶樂部にて一と休みし附近の精米所を見る、農家の運び來る穗をこき落して機械にかけ白米となすにて米質も立派なるものなり、稻は芒ある種類多し、夜八時船入りたれば乘り直ちに食堂に飛び込みて晩餐を了れるは十時過ぎなり、午前三時出帆し二十七日バリ島のバーレレン、二十八日東瓜哇のバンジョンフンギ・バナロカン・バソロアンに寄港し夜スラバヤに入る、マカッサー出帆後一週日なり。

ロムボック島はバリ島と合せて面積四千五十方哩、人口五十二萬五千五白六十五人內歐洲人百十九人アラビヤ人百四十三人支那人千八百人こは昨年末の統計なり、島內高山あり一萬二千尺を超ゆるものあり。

ロムボック島王の戶口調査

今日はロムボックの舊王城を見て思ひ出したるはワレイス氏の著「馬來半島」中にも此島の記事ありしが、一章をなせる島王の戶口調査をなしたる物語りありしことなり、事實は兎まれ面白き事と讀たりしが、今日城池の壯觀を見て此位の事は實行せし人ありしなるべく、今日の日記に緣故あれば之を紹介するも無益の事にあらざるべし、但し此事は先年岩政臺灣稅關長の南洋談中にも興味ある話として語られし由にて確かに臺關と云ふ雜誌に在りし筈なり、余の材料はワレイス氏の「馬來半島」百二十六頁より百四十一頁までのロムボック王戶口調査と云ふ記事より採りたる事を明言し置かんとす。

ロムボック島王は智惠のある人にて苦心を凝らして戶口調査を遂げたる話はいと趣味ある物語なり、さても此島王の收入は米の稅のみなるが、男女小兒まで一樣に頭割に賦課するものにて極めて簡單なる徵稅法なり、土地豐沃にして人口も多きに拘らず、官府まで納附の間に多くの人手を經ることとて納額年に依りて一定せず不作の折もあり流行病の時もあり從て納租に影響するものと思はれたれど、時々地方巡視の樣子にてはかゝることの影響すべしとも思はれず、いづれの農村も富裕に見ゆるものから必定村役人共の私利を營むものなるべく、之れと云ふ

も人別の確かならざる結果と心附き、ヨシ〳〵折を見て人口調査を爲さんものと心がけられけるが、扨之を爲すには容易の事にあらず自ら村々を巡回することも叶はねば、去りとて事を明らかに調査を命ずる事もなりかねて千思萬考の結果思ひ附きたる一つの名案あり。扨島王の此頃何事か屈託の樣子明らかに愁の色も人目に見えけるに近侍の者も人民も心許なく思ひけるが、或日の事島王は村の役人を都のマタラムに召されければ、扨こそ何事の起りたる、王の昨今の樣子只事にあらずと懸念して馳せ參りたる人々に向ひ王の仰せけるは、朕は近來何故か心結ぼれて快からざりしが、昨夜圖らず夢にガノンアゴン山の神靈顯れ給ひたるにて漸く心も落ちつきぬ、されど神の仰せに山上に登り來らば更に告げ知らすべき大事のあるべきぞとの事なり、朕は登山すべければ汝等も共に來るべく、何分にも容易ならざる事の朕が身と人民の身の上に係ることなれば能く〳〵心に留むべしと迄宣はれたるとなれば、汝等は村々に歸りおちなく村人に此事を語り聞かせ登山の道筋を拓く用意を爲さしむべしと演說せり、此話はやがて漏れなく全島に傳はりて島王は自ら神の告を承らん爲めに登山せらるべしと聞きたる村々の人々は、夜を日に繼て道普請を爲し、道なき處は藪を切開き坂を平にして橋を架け、木蔭には竹の柱に椰子の葉葺きたる假屋を作りて王の休憩所に當て、王の登山に不自由なからん樣になし了へて此事奏聞しければ、やがて日を定めて登山の行列仰せ出さる、村々よりは家畜を屠り、薯を集め、檳榔子を供へ、煙草を呈し、旅中の用に供へんとて此捧げ物を從者に持せたる村々の役人は都に上り來りぬ、斯くて登山の行列は嚴かに取り行はれて島王は王城を出て給ふ王の御裝束如何にと見上げ奉れば、頭巾を戴き脛はあらはに、黑き逞しき馬に召し給ふ、從ふ面々の騎馬するも多く、檳榔子入れたる器物捧げたる從者を從へし行列の數は千餘人と註せられ盛なりける事どもなり、道筋はいづれも能く掃き清められ人々皆戸口に竝びて拜み奉る、初日の泊りは村里にて篝火焚て夜の警護嚴重なり、次の日には人里離れて山にかかり假屋に憩ひ愈々山中となれるが、王は一同を殘し留めて只二人の檳榔子持たせたる子供を引連れて山上に登り行き、頂上にも近づけば二人をも茲に止めて唯一人山頂指して急がせ給ふ、二人の子供は岩蔭に憩ひけるに疲勞はあり涼しき風のそよ吹くに睡氣を催し、我知らず眠りしに、王は人目離れたる岩蔭に憩はれしに疲れと涼さに睡氣堪へがたく、遂ウト〳〵と寢入られしに、此方は殘されたりし人々は王の歸りの餘りに遲きに心配し、神靈の仰せに永く山上に留りたまふものか、

去りとて道を踏み迷ひ給ひたりけんいざ探し奉るべしと評議の折に、王は兩人の子供と共に歸り來ぬ、王はいつもよりも尙眞面目に何一つ物も言はず都へと歸り給ふに、人々も一先おのが村々に引取り如何なる事の出て來にけんと皆心痛の胸をいためけるに、三日目に王は又もや人々を招き愈々神靈の仰せ語らるることゝなりぬ、王は辭を改めて申されけるは人々能く承れ、朕山上に到りし時神靈の勅に善哉汝近き內に惡疫流行の爲めに全世界の人畜類は皆死滅すべきことなるが、汝が此山まて登り來れる誠意に免しロムボックの人類丈けは助け得させんぞ、此大難を免るゝには十二の神劍を作るべく、もし村々に惡疫流行の折には其一つを村に送り出せば惡疫立ろに熄むべし、此劍は各村各人より集めたる針一本宛より鍛へ上ぐ可く、もし針一本にても間違あらば其効顯あるべからず、夢疑ふべからず、神慮嚴かに宣はせられたりと申告せり。

之を聞きたる一同は恐れかしこみて村々に歸り、一本の針も間違ありては神罰の程も恐ろしと能く〳〵改めて針の束を都へと送り來れば、王は一室に之を收め樟樹の箱に取り入れ、一々村々より差出したる數をば記帳せられ、全島の戸口は斯くして明確に知られたり、扨も島王は刀鍛冶を宮中に召し寄せて王の目前にて丹誠をこらして十二の劍を作り上げさせたるが此際何人にも拜觀を許されたり、此神劍は絹の袋に收められ嚴重に保存せらる。

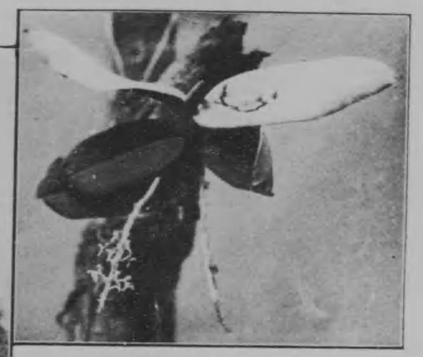
王の登山は此島の乾燥期にて雨なき折の事なりしが、かくて此劍の鍛え上げし頃には米の收穫も終りやがて村々より租米の上納引續きたりしに、王は一々針の數にて村々の分と引き合せて其租米の不足せる分は村役人を招きて汝の村よりの租額は針の數の割合に符合せず何かの誤りある可れば再び調査すべしと申渡さるゝに、已に戸口數の證據ある事とて村役人も其實際の租額を納むる事となり王は例年に幾倍したる租穀を得て其倉庫に充ち溢れ、遂に富有の身となり、馬來種族中最も有力なる王家となり給ひぬ。扨も其後神劍は惡疫流行の折々に村々に送られけるが、不思議にも神德は爭ひがたく惡疫屏熄して村民安堵し、御禮言上の爲め都に上り來るもあり中には惡疫更に熄まぬ村もあれど此村にては針の數に誤りありし爲め神意に叶はざるものと之も村民の恐れ畏みて更に神德を疑ふものもなくて、ロムボック王家は愈々繁昌に榮え給ひしぞめてたき。

馬來派の二種族

馬來種族は固有馬來族と「インド子ジアン」族の二に別つべし、固有馬來族は馬來語を話し多く回々教を信じアラビア文字を用ふるものにて更に東馬來と西馬來に區別す、東馬來は馬來半嶋を基點としてスマトラ、ジヤバ、スンダ、マラツカの諸嶋セレベスの海岸に住む多くは他民族例へばビルマ、ヒンヅー、支那人の血を混ずるものゝ如く身長一米六一位即ち五尺三寸一分、頭形は生體平均八五位にて元はスマトラ嶋のメナングカバウ附近に起りしものゝ如く一方馬來半嶋に移住して現今の馬來となり他方にはスマトラよりボル子オの海岸を經てマラツカ群嶋に移住せり、西馬來は阿弗利加東岸のマダガスカル嶋の馬來にて「ホーバー」と稱し海上の生活に馴れ危險を冒して此嶋に渡り「サカラバ」と稱する土民を征服したるなり。「インド子ジアン」は諸種の民族と混合せるも比較的純粹のものにて古風も殘り馬來諸系の言語を有せり、體長は稍〻短く平均一米五七長頭又は中頭平均の生體七八・五にて首狩の慣習あり入墨を爲し裸體にして犢鼻褌を締め麻類の胴着を着く、臺灣の生蕃も明らかに此系統に屬すべきものなり、ボル子オの「ダヤーク」、スマトラの「バタック」、セレベスの「アルフロ」等及びマラツカ・フイリツピン諸嶋、ベンガル灣のニコバー島土人も之に屬せり。（鳥居氏馬來派の民族に據る）

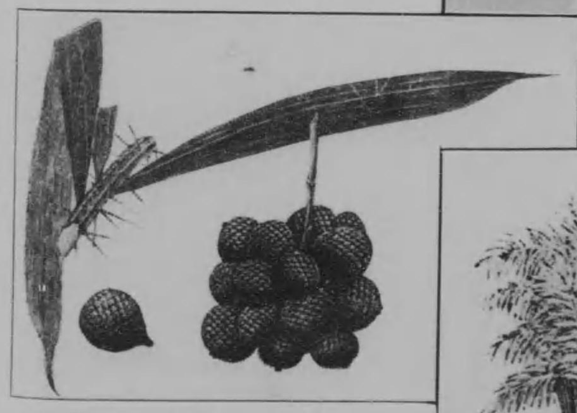
第十章　後の瓜哇日記

ヂボータス高山植物園ススキノキ



蘭上川

瓜哇石南



サラツカ椰子
（右）全形
（中）果枝
（左）葉の部

第十章　後の瓜哇日記

東部瓜哇

バソロアン行

マンゴー

十一月二日　バソロアン市の瓜哇糖業試驗場を見んとて午前八時スラバヤ發の汽車に乘る、糖業見學の爲に渡航中なる峯崎氏を賴みて同行す、同氏は鹿兒島の人、大目降糖業試驗場に奉職せし事あり、後東洋製糖會社にも居りし事あり、翌は天長節なり、茲に留まりて祝ひ給ふべしなど知る人々の懇なる勸めもあれど旅を急ければとて立ち出てしなり、此線路は二度目なれば見る處珍らしからず只一ヶ月前に比して甘蔗の生育著しく木も草も久振りなる昨夜の雨に濕ひて生氣あり、酸果樹の新綠殊に鮮やかなるなど目に附けり、バンギル驛は果樹の名所とてマンゴー、蜜柑を賣る、マンゴーの大なるものを購ふ一個十五仙と云ふに二十仙を與へしに三個を持ち來れり、味佳にして纖維少く長徑五寸五分、横徑三寸五分、長周一尺四寸横周九寸重量六十匁あり、此もの外皮は黄綠色にして熟すれば黄色となる、外に綠色にして食ひ得べきものあり、橙黄色のものあり、紅色のものあり、形狀長きものあ

り、卵形のもの等あり、東瓜哇は今が此果の熟季にて種類十餘種あり、其主なるものを擧ぐれば左の如し、檬果即ち臺灣の様仔にて瓜哇土名マンガと云ふ。

一、マンガ、ガンデン（小形にして綠色海岸ギリシイ（ソンアヤ）に產す）
二、マンガ、ゴーレ（普通種）
三、マンガ、ゴーレ、コラムビス（マヅラ島に產す）
四、マンガ、ガーテン（大形パソロンアンに產す）
五、マンガ、マドー（ポロボリンに產す）
六、マンガ、コビオル（普通種）
七、マンガ、クエニー
八、マンガ、サントク（長大種）
九、マンガ、トロール（帶紅色種）
十、マンガ、ゴントー（長形種）
十一、マンガ、ブル（バナロカン、ベソキ州に產す）

これが專門家ならざる人の指折り擧げて數へくれたる種類なれば、實際は更に多數の種類あるべし、十時パソロアンに着きホテル、トンヨスに投ず、閑靜にして室も廣く涼しく心地好き宿なり、昨今身體倦怠加之熱氣あり、マラリヤ熱の前兆の如し、こゝにて病に罹りてはと服藥休養す、頭痛甚しく發汗之に伴ふ。

糖業試驗場

異鄕の天長節

糖業試驗場

病理昆蟲部

十一月三日　天長の佳節なれば衣を更めて遙かに祝意を表す、我國ならば今日は心ものどかに一日を樂しく祝はんに、今年は旅にて而も日本人は一人も居らぬ異鄕の僻地なり、昨來の體勢尙快らず、午前九時勉めて糖業試驗場を訪ふ、此處は故コーブス先生の鋭意甘蔗の種類改良をなし遂げたる地にて兼ねてなつかしく思へる所なり、場長ファン、デル、ラック氏歐米巡歷中にて在らず、日本を經臺灣を觀るべき旅程なりしも俄かに直航歸國のとゝなれりとぞ、書記長某氏に會し其案內にて病理昆蟲部を見たり、主任ウキルブリン女史一人の瓜哇人の助手を相手に細菌純粹培養の準備中なり、標本棚に藏められたる甘蔗病害のアルコール漬を檢し我臺灣產にて疑問とせるマラスミウス菌の標品など見、更に一つ二つの瓶詰物を手に取る內にナンバンギセルの一瓶を得たり、此物甘蔗に有害なることは我國にて親しく見る所にて、余の研究の結果は已に脫稿し居ることとて瓜哇にも此害あり

圃場

とは思ひがけなき好材料を得たるものかな、之を質すに被害極めて少しと云ふ、ウ
キルブリン女史僅かに英語を解し談話共に要領を得ざるものあり、顯微鏡を借り
て二三の檢鏡をなし、我ボルチオにて採收せる甘蔗の一病菌を示せるに瓜哇にて
は見たる事なき種類なりと云ふ、文庫を見るに流石に參考書は備はれり、圃場試驗
を見る、農業助手のロビジン氏案內しくれたり、英語を解せざる人なれども極めて
懇切なり、圃場一周凡二時間を費し肥料試驗、季節試驗、種類試驗、電氣試驗區など經
めぐれり、故コーブス先生の苦心に依り病害に堪ゆる甘蔗の新種類を作り出した
るもの多く、今日まで約二千種中今栽培試驗の物凡千種あり、而して其性質確定し
て廣く配布せるは百號及二百四十七號等にて前者は一蘭町の收穫一千二百擔糖
分十乃至十二パーセント、後者は千五百擔糖分八乃至九、五パーセントと稱せらる、
此二百四十七號はチエリボン種とチユンチー種との交配に依りて生じたる栽培
變種なり、日中日蔭なき蔗園を歩き廻る事とて苦熱云ふばかりなく流汗衣背に徹
せり、案內者も我等も互に根氣くらべにして共に苦しさうなる樣子を見せず、曰く
暑いですな、曰く「イヤ少しばかり」、曰く「おくたびれてせう」。曰く「イヤ少しも」など痩
我慢してあるき廻る、此處は友人金子技師の熱心栽培法を研究せる所にして、此地

トアン、カチコ

大蛇の洞

稻

の農夫尙能く「トアン、カチコ」の名を記憶せり、事務室にて我糖務局の出張員を知れ
る人に逢ひ「田畑は、東條は、金子は」などゝ其消息を問ふ、東條も田畑も故人となれる
事を告げ、聞くべきことを聞きて辭し歸る。

午後田舍の樣子見んとて輕鐵にてプレレト驛に下り馬車にて七八哩先きなる
ロロカンの村に到る、折柄急雨あり、雨を一農家に避く、主人蓆を運び來り待遇甚だ
力む、この邊に大蛇の居る洞穴ありと聞き行き見る、洞の底には大小種々の蛇あり、
土人は之を引き出し來ると云へど、今日は生憎に其姿を見ず只小蛇の水に泳ぐを
見たるのみなり、此邊チークの林あり。

稻は收穫中のものあり生育半ばなるものあり、一方には甘蔗の跡地に苗代作り
て種蒔するもあり、苗代は短冊形のものもあれど廣き田に播き下すもあり、こは女
の仕事にて籾の附きたる穗を其儘に並べ置くものにて、珍らしき事と暫し畦に彳
みて其法を見る、稻穗の莖を短く切りて籾のかさならぬ樣に置き一つ一つ並べ行
くなり途中植物の採集など試みて夕方歸る。

糖業の見聞

製糖場

十一月四日　午前再び糖業試驗場に到りナンバンギセルの標本を需しも重複品なしとの事なり、日本產と異る樣にも覺えたれば寫生などし、尙栽培係に聞き漏せることなど聞き、馬車にてプレレト製糖會社に到り工場を見る、原料糖のみを作る處にて能力一萬四千擔面積千五百蘭町、今固形糖蜜と原料糖の包裝中なるを見る、技師ボーレ氏叮嚀に案內し呉れたり、固形糖蜜はアンペラ蓆を內包みとし椰子葉の粗包みを中裝とし更に竹籠に入るゝにて、六十一封度にて價は八十五仙なり此方法は運送にも都合よく今のは支那に出すものなりと云ふ、工場主の庭に「雨の木」あり學名、カシア、ジャバニカ」と云ひ、桃色の花眞盛りにて日本の櫻の如し、種子も多く實りたるが垂れあれば其庭に入り、瓜哇人をして之を採らせ貰ひ、臺灣に栽ゆる爲に持ち歸りぬ、此花は確かに日本人の嗜好に適ふべく、此花盛りならば櫻なくとも日本人は滿足すべし。　此夜同宿のロビジン氏を煩はして甘蔗栽培に關する事尋ね問ひ利益する所多し、此人はジョギル會社の栽培係にして今試驗場にも兼務せり、同會社の生產費を聞くに、昨今は一擔分は六義卅九仙(日本貨五圓十一錢に當る)原料糖ならば蘭貨四義廿五仙位なるべく一蘭町の費用は蘭貨二百七十八義四十三仙に當れる由、其會社は工場能力一萬四千擔にて(約八百七十噸)耕地千百五十町を有せり、他の會社よりも生產費は高き方なり、(他の會社にて五義十三仙(我四圓十錢)のものあり)最近の統計に依るに瓜哇全體の甘蔗作を我一町當りに換算すれば十七萬斤なり、瓜哇の製糖工場は百七十七箇所にて生產總額千八百萬擔にて內千二百萬擔はスラバヤ港より輸出され、四百萬はスマラン港より出づるなり。

糖業の研究

瓜哇の糖業試驗場は元と私設にして、一千八百八十年に初めて中部カゴクとスマランに設置せられバソロアンは一千八百八十七年に設置せられ、スマラン試驗場技師ソルトウエデル氏は氣候の變化を利用し高所に培養せる選種の交配種を作りてゼレー病に堪ゆるものとなし、其後任ペチツケ博士も亦新種選種に注意せり、一千八百九十一年試驗場をソロ州のクラテンに移せり、カゴク試驗場は千九百年にペカロンカンに移し、千九百七年にバソロアンと合同して瓜哇糖業試驗場と改稱しバソロアンにては專ら甘蔗の試驗をなしペカロンガンにては應用化學其他科學的研究を爲すこととし、一千九百六年に土人自治州の糖業改良の目的を以て支場をジョクジャに置けり。

糖業試驗場は糖業者の寄附金を以て維持費とせり、バソロアン試驗場にて昨年中受理したる各種照會中其三割八分は病害に關する事、三割八分は肥料灌漑及土

性に關する事二割七分は雜件に關する質問なりしと云ふ

片田舍の日本商人

十一月五日午前九時四十分發の急行列車にて南行す、

バソロアン驛の停車場にて果物の賣子多くサラーを鬻ぐ、此もの松毬に似たるサラッカ椰子の實なり、これ馬來の特產にて所在人家の傍らに植附けあるを見る此植物は學名「サラッカ、エジュリス」と稱し、葉は省籐に似て葉柄に鋭き刺あり、松毬狀の果實十數相集り實は褐色三角形の小鱗片にて被はれ、鱗片の尖端は黑色を帶び、鱗皮は薄くして離脫し易く內に三個の大小定まらざる白色の果肉あり、質稍硬く甘味なるも澁味あり、異臭あり、內部に小種子を藏す、馬來・暹羅等に普通なる果物なり、圖中の右端にあるは全形にて左に在るは葉柄の一部を示すものなり。

サラッカ椰子

藤根草

途中稻田蔗園相雜り土地極めて豐饒なり、カポク綿樹を並木とせる所あり、ブロボリンゴを過ぎクラカに到る、此邊土地次第に高く小山多く、近くアーゴロホーの火山北方に聳え富士形誠に美はし、乾ける高原に藤根草多し、此草は白前科の植物にして學名を「カロトロピス、ジガンテア」と云ひ熱帶諸所に產する雜草なれども白色にして美なる對生葉あり、紫花繖簇して甚だ美なり、先年藤根技師初めて南洋より臺灣に移し入れ臺北にて開花し極めて風致ある花なり、余は初めて暹羅にて此花を採集し其後馬來半島にても屢々此花を見たり、我國に始めて移し入れたる老友を紀念せんが爲めに和名を藤根草と定めたるなり。

正午車室內の溫度九十三度海拔七百五十尺にしてアーゴロホー火山の裾を馳せ行くに富士の裾野を見る心地せり、クラカを過ぎジャクテロトに到る、此處に大製糖場あり、我阿緣工場に匹敵すべき瓜哇第一の工場にて、原野の中に建てられ一時は病人多かりしも諸般の設備完成の結果健康地となりたる由、並木に火焰木を栽る宿舍も美々しく建て並べられたり、大サルスベリの花滿開せるがそこの森こゝの藪に綠熱を飾れり、ジョンバル驛にて少しの時間ありて中食したるが、獻立は大なる牛肉と豌豆と馬鈴薯のみなり。

大製糖場

カリバルの日本商店

カリサ驛にて乘り換へバンジャワギ線に移る、カリサはバナロカン線との分岐點なれどホテルなしと聞き、俄かに日程を變更して案內者の知れる日本商店ある

カリバルを志して行く、山路初めてのトンネルあり、海拔一千七百尺にて此邊珈琲園多し、珈琲は蔭樹即ち刺桐樹の一種の下に作らる、稍下りて五時カリバル驛に達

す。

唯一の日本商店なる酒井某氏を訪ふ、我等或は來り過ぐべしと聞き今日あたりはと心待にまてるなりとて門邊に出て〻列車を眺め居る所なり、歡待甚だ力む熊本の人、兄弟二人此處に店を開き頗る順境なりけるが、兄氏一週間前にスラバヤに病死し、急報を得て赴き葬りの事了へて一昨夜歸り來りしも哀悼の念已みがたく店を閉ぢては山野に散策し、歸れば又もや物淋しきに堪へがたき折柄とて我等の來著を歡ぶ事限りなく、今日はうれしき日なればとて物買ひに來る土人に對し特別大安賣を爲す體なり、元より唯一人にて召使ふ人もなければ、飯のみは近所の土人より芭蕉の葉に包みたるを持ち來らしめ、副食物はアルコールの火爐にて罐詰物を煮たるにて心置きなきもてなし振りに飽く迄も食ひ、扨て寢る段になれば寢床は只一つあれど歸りたるまゝにて掃除もせざれば今夜の間に合はず、茲にて辛抱し給はれとて荷物を詰め込みたる蓆二枚ばかりの部屋にて大の男二人枕を並べ、主人は店の籐椅子に休む、野宿に馴れたる我身は寧ろ結構に過ぎ、只蚊帳なければ時々蚊の襲ひ來るに苦むと室狹ければ寢返りさへも自由ならず、一千二百尺の高地とて夜の冷氣にて我知らず毛布を引掛るほどなりき。

珈琲園

ロブスタ珈琲

珈琲の栽培地

十一月六日　朝八時の汽車にてケンペト驛に到り珈琲栽培地を訪ふ、案内者此六月に訪問したる時の支配人は日本人を妻としたる人とて親切に案内しくれたりと聞き、之を賴みに遠路を來れるなりけるが其人何づれにか行き蘭人レデボー氏近頃來り代れりと聞き失望一方ならず、試みに來意を告げ栽培地を見ん事を强請せしに、人には見せぬ筈なれど遠路をわざ〳〵尋ねられたることなれば御案内申すべしとて、支配人自らカーキ色の服に輕裝して太き杖を携へ幼き小兒を連れ子守の土人をも伴へり、宿舍の傍らに珈琲の工場あり、皮を取る器械乾場などあり、種用のものは女の手にて丁寧に一つ一つ皮を取りて木灰を附けて乾かせり、此種予用のものは、亞弗利加種のロブスタ珈琲にて現今爪哇の珈琲園は專ら此種類に改作しつゝあるなり、園内清水縱横に流れ心持よし、印度護謨、カスチロア護謨なども植附けあり、珈琲園は總面積八百蘭町にて今ロブスタ種の栽換へたるもの二百三十蘭町許りあり(蘭町即ちバウなり)先づ爪哇種即ちアラビヤ種の老木を伐倒し新たにロブスタ種を栽ゑ込める地を見たり、珈琲は蔭を好む木なれば生育早き

苗床

荳科植物ドタップ樹を栽ゑ同時に珈琲苗を栽う、日蔭樹に合歡樹の一種なる「アルビジア、モラッカナ」及び銀合歡を栽ゑたり、凡て荳科植物を栽うるは地力の恢復をも圖る爲めなり、植附距離は六尺に六尺、八尺に六尺、十尺に十尺なるもあり、今此栽培園にて改良せんとする設計は七尺の距離に珈琲を栽ゑたるもの二列宛の間に十四尺距離にバラ護謨を栽ゑたるものなり、珈琲は七尺護謨は十四尺に二十一尺の距離となる割合なり。

苗床は椰子の葉にて編みたる日覆の下に苗床を作りて種子を蒔き切葉にて蔽ひ一箇月後二葉の内に床換をなし丁寧に穴を穿ちて五寸距離に植附け五六ヶ月後苗の一尺位に伸びたるものを本植す、バラ護謨の苗床もあり、之は五寸距離位に種子を蒔き附け常に除草手入をなせり、種子は馬來半島より取り寄せたるものなりと云ふ、更に珈琲園を經廻るにロブスタ種の結實せるもの多く、外にリベリヤ種アラビヤ種及び試驗中のウガンダ種クロー、セルサ、ウガンタ種等あり、地味肥沃生育頗る良好にして四年目のもの盛に結實せるを見る、ロブスタの木八年に達せるもあり、丈け高きものは梢頭を切り留め、側芽は常に注意して摘み取れり、種子用の木は特に柵を廻して保護嚴重なるを見、かくまで注意して採集せる種子ならば必

ず純良のものなるべし、さりながら栽培園は種子を出すを惜む由なれば如何にもして此種子若干を手に入れ臺灣に試作して見んと途中支配人より貰ひ受く可き方法を案出せり、かくて日中炎天に廣き栽培地を駈け廻る事二時間、支配人は時々余を顧みて「暑きにあらずや」と云ふに「然り」と答へ「疲れたりや」と云ふには「否」と答へ根氣よくも經廻る、此人の今日かく迄引き廻しくるゝは時々苦力の爲めに珈琲園内にて人殺しあり、されば常に恨みを買へる蘭人等は一人にて巡視しがたき處もあるとかにて、今日の客來を幸に隅々までの巡視をかねたる樣子にて是れぞ余にとりて勿怪の幸とも云ふべし、さて宿舍に歸ればレモナードを拔き、若き妻君に紹介し、中食迄も勸むるに、余の腹案の種子請求も思ふ通りに成功して辭したる時には種子入りの小函一つ我小脇に抱へたり、臺灣にて育つか育たぬかは知らざれど、かくして得たる瓜哇珈琲の種子は種物屋などにて買ひ入れたるものなどゝは違ひ純良のものにて且つは誠心の籠れるものなり。

此夜も酒井商店に泊れるが余のみは寢床に休む、夕方郊外の清泉湧く所に行き水浴を取る、グノム、ラオンの高山夕日を浴びて一万尺の峰頭雪の如く白く光り景色云はん方なし、野なかのそこゝよりピアノの妙音響き來る、煙草栽培會社の蘭

人の家庭よりのなり。

スラバヤ所見

十一月七日　朝九時出發午後三時スラバヤに歸る苦熱甚だし。

スラバヤの市場を見る、野菜果物の珍らしきもの多し、果物は、波羅蜜(ナンカ)種子の周りの黄色の肉を食ふ、種子も燒き食ふべし、檸果(マンガ)今が盛にて大小色彩の異るもの多し、熟して綠色なるものあり、黄色に紅色のものあり、價は一箇二仙以上マンゴスチン(マンギス)最早終季なり、サボクル柿に似て最も甘味なり、三仙以上、ジョワ紫黑色にして棗形少しく澁味あり、柘榴あり、甘蕉(バナナ)最も種類多く、果物中最も普通のものにして主なる種類左の如し

市場

甘蕉

ビサン、ラジャ(芭蕉の王の義)　ビサン、バト(石)　ビサン、マス(金)
ビサン、タレドク(角)　ビサン、バンジャン(長)　ビサン、グリン
ビサン、マサクヒジャン(綠熟)　ビサン、イジャン(綠)　ビサン、ガデン(象牙)
ビサン、ロタン(籐)　ビサン、モニエト(猿)　ビサン、ヘンデク(短)
ビサン、スス(乳)　ビサン、ジャリ(指)　ビサン、ブア(鰐)

まだ外にもありと聞く、市場に普通に販賣するは

テロア、マス、ジャリ、ラジャ、サルタン、バト、マニス、モンエト

等の種類なり、長きは一尺より短きは一寸位の種類もあり、外に甜瓜もあり野菜は

胡瓜、玉葱、莧菜、芹菜、白瓜、胡蘿蔔、蘿蔔、馬鈴薯、豆、麵麭果、

馬齒莧

日本臺灣の溝渠水田に多き田字草(ヂンジサウ)も此地にては食料品の一つにて馬齒莧(スベリヒユ)も盛に販賣せらる、市場は食料品以外諸種日用の器具、衣服、古道具の類まで盛に販賣せらるゝものにて其雜沓混雜肩々相摩する有樣なり。

食ひ得べき田字草

夜の博覽會

バッサー、マラン即ち夜の共進會開かる、主に歐羅巴の商品にて勸工場の如きものなれども、各種の器械類は動力により動き居り各店皆意匠をこらしたる陳列なり、夜の博覽會とも云ふべく、熱帶なれば開店は夕方の六時より二時までなり、涼みがてらの散歩客を吸收せんとするものにて、日本人の若干組み合ひて「玉ころがし」を開店し景品を賭けて客を曳き景氣極めてよし、日本ならばかゝる御連中の御入來も如何にやと思ふ貴婦人連の一生懸命に玉をころがす有樣これも觀物なり、此地にては共進會、品評會の類は皆夜間の開場なりとのことなり。

燕巣

燕巣は支那人の食品中最も貴重なるものにて燕の一種(Collocalin)の海藻にて其巣を作り其巣は幼き雛の食用となるものなるが、熱帶地方の海岸絶壁の上に作られ之を採るには命懸けの仕事にて、千個の價三百五十圓内外にて極上の品は銀の目方と同じ價額を有し、廣東に輸入する一年の數量は九百萬個を下らずと云ふ、爪哇の輸出四十五萬義、他の蘭領印度よりは十八萬義内外、暹羅よりは二三十萬圓にて爪哇スラバヤの附近にては人家内に養育して大なる利益を得るものあり、邦人高橋氏の家内にも此燕巣ありと聞きスラバヤ出發の前夜一覽を申込みたるも、夜中燈光に驚く恐れありとて見物しかねたるは殘念なれど、標品用にとて多數の燕巣を貰ひ受けたり、此食物は大に精氣を増すものなりと云へり。(燕巣の原料は魚肉なりとの説もあり)

バタビヤに歸る

十一月十二日　スラバヤを發して陸路再びバタビヤに向ふ、此度は唯の一人にて和蘭語も馬來語も通ぜぬ啞の旅とて隨分のんきなることなれど必要の馬來語二つ三つ手帖に書き附けたるを暗誦して汽車に乘る、峰崎稻垣氏等見送らる、スラバヤは此處を中心として島々への旅行を爲したる事とて前後十餘日の滯在なり、

支那の革命

此處は三井の店もあり、知れる岡崎氏の店もあり、又稻垣洋行もあり、風呂の馳走と日本食の饗應は常に望むまゝなりき、異郷に於ける知人の厚意は感謝の外なき事なり、支那人間は革命軍の噂盛にして大部分其黨與なれば日々各地より來る電文を配布し、或は演藝會を催して義金を募り、少壯有志のものは職を捨て赴き援くる者あり、支那人に遭へば必ず此話にて持切れり、セレベス滯在中孔子の誕生日に當れる折に某貴族暗殺の報あり、此目出度き日に此吉報ありとて盃を擧ぐる騷ぎなり、之にて蘭領支那人の意向察知すべし此日はジョクジャのホテル、トーゴー墾くる日の十三日はバンドンのホテル、ホーマンに泊り、十四日の正午バタビヤに着きホテル、デル、チデルランドに投じけるに外に日本人の客ありと聞き尋ね見れば、これは又意外にも郵船會社の谷井神戸支店長の一行なり、年來の知人として互に奇遇に驚き愉快に半日を談り合ひ食卓を同じくし此夜は共に招かれて染谷領事の宅に風呂を浴び浴衣に着換へて日本料理の食卓に就き心置きなき閑談に一夜を談り明したるぞ愉快なる。

知人の奇遇

愉快なる郵便物

此日は思ひ設けぬ知人に逢ふさへ悦びの一つなるに、二個月振にて郵便物を受取りたるも悦びの一つなり、異郷にありて郵便物受くる程愉快なるはなく、友人の

話に外國旅行中初めての手紙を受取りたる晩には嬉しくて寢られぬ程なりとの事なるが、まさか其程迄とは信ぜざりしが、實際かゝる境遇にあらざるものゝ外は經驗し得ざることなり、今日受取りし郵便物は一と抱へに餘り、其整理に終夜を費しぬ、今日の信書多き内に特に我が心を動かしたるは幼き姪どもより假名にて書き送れる手紙と臺灣の某々夫人より美人の繪葉書に寄せ書きしたる見舞のものにて、こは七月に臺北を發したるもの先づ瓜哇に來り、新嘉坡に到り、スマトラに廻り再び新嘉坡を經て瓜哇に歸り來れるものにして、發信以來四個月にして余が手に入れるなり、翌くる日の朝早く谷井氏の一行は海路スラバヤを經てセレベスに赴くを送り、再び淋しきホテル生活となり、領事館にて調査兩三日、十一月二十日遂にボイテンゾルグ植物園に向ひ「ホテル、ベルビュー」の客室に旅裝を解きぬ。

植物園の見學

園長の厚待

十一月二十一日　ボイテンゾルグ植物園に到り動物博物館の一室なる園長室に園長ケーニングスベルヘル博士に逢ふ、新嘉坡植物園長よりの紹介狀を渡し來意を告げ、飯島博士より動物學者のオーヴエン氏に宛てたる紹介狀を示したるに、此人は旅行中の由にて、園長は懇切に應接し、自ら外國學者研究室に案内せられ、一個の机を指して此處にて隨意研究せらるべしと云はる、此室にて獨逸の某博士生理上の實驗をなしつゝあるにも紹介せらる、余は先づ腊葉室にて比較研究を希望する旨を談りしに、主任ハレトン博士に紹介狀を與へられ病理研究室にも案内せられたり、一先づ辭して三好博士より紹介せられたる園藝主任のウキグマン氏を訪ひ、更に同氏の案内にて化學室に護謨專門の主任技師に逢ひ、かくして今日は萬事好都合に入園調査の許可を受けたり、植物園内に入り日蔭植物園を視て歸る。

植物博物館

十一月二十二日　植物博物館に到りハレトン博士に逢ふ、園長の添書もある事とて快く一室を貸し與へられ直ちに館丁を招きて余が望む所の標品を取り出すべきを命ぜらる、博士は隣室にて分類學上の研究に餘念なく、他の隣室には一人の若き婦人腊葉の整理に從ふ、此室を通り抜くれば植物陳列室にて階下は主に果實種子の陳列にて公衆の縱覽を許し、二階は植物分類標品なり、數人の瓜哇人腊葉の整理を爲せり、余が見たしと思ふものを書き出せば腊葉係りの瓜哇人は直ちに之をとり出し來る事囊中に物を探る如く如何にも馴れたるものなり、余は先づ携帶せる臺灣植物中の不審あるものを比較せんが爲め若干の腊葉を檢閲せり、流石は

名高き標品室の事とて我疑問も立どころに解決するものあり、腊葉によりて尙疑はしき時は相隣れる植物圖書館に駈けつけて參考書を借りうけ、時に或は、ハレトン博士を煩はすなどして午前七時より午後二時迄に休みもなく勉强せり、此日比較研究せるは臺灣の馬齒莧屬、紅頭嶼の梧桐屬、アカシア屬、八升豆屬、臺東漆屬、省籐屬等なり午後三時より植物園の蘭園を見る。

十一月二十三日　猪籠草屬檢定こは蘭領リオ群島の採集品なり、佐久間草屬、アガメガシハ屬、蕃荔枝屬、唇形科の或種類の腊葉を見る、植物園內一と通り通覽す。

十一月二十四日　蘭科、櫻草科の或種類、紅頭嶼產沈香屬の或種類は新種と鑑定し、錦葵科の或屬檢定、午後三時より植物園內龍舌草區及林投區を見る、市場に到り果實を購ひ歸る、鳳梨多し、果色黃にして味佳なり。

十一月二十五日　紅頭嶼植物の若干及び今回旅行中の採品檢定、腊葉は十四屬を檢したり、午後大雨の爲め外出しがたく圖書館より借りたる幾那栽培に關する書物を讀む。

十一月二十六日　日曜なれども余には休暇なく、早朝馬車にてチボメーの有用植物栽培園に至り圃場を見、歸りに博物館に立ち寄りしにハレトン博士は休日なるに係はらず出勤研究中なりしかば、余の瓜哇採品につき不明の種類を檢定し貰らひ、午後植物園に入り竹園椰子園及荳科園を見たり、園中木の葉蟲を賣る子供あり二尾を購ふ、形狀木の葉に似て大さ二寸許り、羽の外面は葉狀を爲し羽脈判明し其色綠色にて木の葉に停まる時は眞の樹葉と思ふ程にて、珍らしく昆蟲の保護色を說明するに恰好のものなり、玉蟲を銀細工に嵌めたるを禁止の用に賣るものあり、椰子園中に世界稀有の珍種と稱せらるゝ大實椰子あり、マダカスカル附近のセツシユレン島の特產にして其葉扇狀をなし其實頗る大にして形相合せるが如き形狀を爲し甚だ奇なり、世界中栽培せるもの二株あり、一は錫蘭のペラデニヤ植物園にして雄木なり、一はボイテンゾルク植物園にありて雌木なり幾千里を離れたる處に夫婦相別るゝことゝして實を結ぶに由なく、故トレーブ博士は如何にもして夫妻の契りを結ばしめんとて態々錫蘭より花粉を取り寄せ人工媒助用となしたるも長の航海中に花粉腐死して今に其目的を達せずとぞ、かゝる名木のある事は兼ねて聞き知りたる事とて折さへあれば此木を探したれど中々に見當らず、遂に今日の午前ハレトン博士に其所在を尋ね植物園の植物目錄にて第五區のJ部に在る由を知り、直ちに椰子園に馳せ行きて其區域內を探したれど見附からず、遂に

木葉蟲

大實椰子

此區域内の一本一本を見て歩きたれど其木らしきものなし、さらば椰子園を片端よりせんさくせんものと一方の端なる第五區のL部より探がし始めたるに何事ぞ第二本目のものは尋ぬる大實椰子なり、成程立派なるものにて葉柄は一丈にも餘り廣く扇狀に打擴げたる葉も勇壯なるが、葉柄の間より斜めに出たる果柄に數箇の不思議なる形したる實を附けたり、これが雌本なれば實は出來ながら種子を結びがたきものと知られたり、樹下に彳みて試みに此珍木を寫生せり。

ホテル卓上の花

晩餐の食卓日曜の客來多く賑かなり。此ホテル流石は植物園のある所とて卓上の花は思ひ切つて美はしき物を飾るを例とせり、さて食事終りて部屋に入らんとする折に「ヘル、カワカミ」と呼びかくる人あるに驚き顧みれば、一室に下宿して日夕顔を合はする人品能き夫婦の客なり、呼はるゝまゝに其人に近づくに夫人の手に臺灣植物目錄あり、扨も意外と思ふに君は此著者なるべし、先づ坐り給へとて挨拶も鄭重なり、これをば君に呈すべしとて三冊の書を與へらる、圖らざりき此夫妻こそ瓜哇植物の研究家として名高き和蘭のコールデルス博士ならんとは、余は驚喜して改めて挨拶するに、博士は英語にて君の著はホック氏より得たり、此有益なる著述は君の苦心の程如何ばかりかと敬服せり、臺灣の居住は幾年なりしかとの

コールデルス夫妻

話題より、博士が蘭領印度に於ける植物調査の困難を說き、夫人の採集調査に係ることなども說き示され、夫人の話は博士の通譯にてセレベス及トサリ山の採集談あり、余もトサリにて採集したりと云へば、其著トサリ山附近の植物目錄を示され、君の採收品は一々之を自ら檢定するは時と勞力を費す事多ければ明日我等に見せ給へなど懇切至らざる所なし、博士とバレトン博士合作の大著述たる瓜哇樹木志は最も名高きものにてセレベス植物誌も大著の一つなり、今宵計らずも此學者に逢ひたる事望外の悅びなりき。

瓜哇樹木志

親切なる學者

十一月二十七日　朝七時博物館に到り瓜哇の採集品を携へて森林植物研究室のコールデルス博士を訪ふ、博士は一々標品を檢し其所藏の分と引き合せ尙夫人をして參考書を探らしめ、かくして四時間許りにして一と通りの檢定を終りたり其懇切と熱心なるは敬服の外なく、外來の後進に對し忙しき研究の時間を割きて教示せられたる厚意と夫人も悅んで其仕事を助けられたる其親切只々感謝の外なきなり、右の仕事終ると共に階上階下の標品室を案内せられたるが酒精漬標品の多數二室に整理せられたるは實に驚くの外なく、其研究室には夫妻机を並べ博士は瓜哇植物を研究し、夫人は瓜哇植物目錄を編纂しつゝあり、差し當り見る可き

參考書を示されたれば圖書館に行くに此處も亦親切にて何かと注意行き屆き植物博物館の我室に歸れば館丁は我用を待ちつゝあり、かくの如くいづれを見ても親切を以て待遇せらるゝ事誠に望外の幸と云ふべし。此日學友に書き送れる私信に植物園觀を報知すること次の如きものあり。

植物園檢索便覽

樹木

分科園

ボイテンゾルグ植物園

ボイテンゾルグに來て二週間餘てあるが植物園の方角が漸く頭に入つた位のものだ、園内の何處に何と云ふ植物があると云ふ檢索便覽がある、これて見たいと思ふ植物を探し當てる、樹木は大木が多く最も上に枝があり葉があるといふ譯だから其幹を見るばかりのものもある、大雨のあとに面掛けて見ると小枝や花葉などが落ち散るからそれて種類の特徴を見る事もある、三好博士の熱帶植物奇觀は隨分と詳細に此植物園の事を書いてあるが分科園の事が詳しく記述してなかつた、此處は川向ふの所謂僻地て普通の見物客は餘り行かぬ處だ、植物園を入口から左に曲ると荳科植物の森林があるが周りは五尺六尺といふ大木がある、藻玉―臺灣の蕃地にもあつて臺灣籐と俗に唱へられ其豆は色々の細工物に使用せらるる

ボイテンゾルグ植物園

平面圖

喬樹林

椰子園

—蔓の長さは百五六十尺もあらうと思はれる程のもので大木の枝から他の木の枝にからみついて居る有樣などは一大奇觀である。そこを通りぬけると龍舌蘭の一區がある、此處で附け加へて置く、園内の大道路は能く固められたものだが小路は砂利石をしき詰めてあるので大雨の爲めに洗ひ流されたり又泥濘に苦むやうなとはない、龍舌蘭の區域を眞直に突き切ると園丁苦力の宿舍ある一村がある、これから釣橋があつて分科園に通ずる、分科園は灌木・蔓木・一年草などの區別があるが、一年草の處は百花爛熳とも云ふべく實に〳〵美しいものだ、此處には臺灣で普通栽ゑて居る花などで名が不明であつた者などは大分明らかに知る事が出來た、臺南で某氏が優曇華(ウドンゲ)だと云ふて發表した植物は東京大學にも送つたと云ふ事だが未だ學名が分らぬ筈だ、之れは僕の鑑定では紫濱万年青(ムラサキヘマオモト)と云ふべき者で學名は「クリヌム、ブロンソネチイ」(Clinum Bronssonetii, Herb.)と思ふ、佛者の優曇華は之に當るものではなからうと思ふ、先年之を駁論した人もあつた筈だ。臺灣の果樹で學名の違つてゐるのがある、僕が此植物園で調べた中で阿緣邊に多い牛心梨は「アノナ、レテクラタ」蓮霧(レンブ)は「オイゲニヤ、ジヤバニカ」が正しい、蘋蔆(ビンボン)は「ステルクリア、ノビリス」の說もあるが僕も同意である。今日迄植物博物館で見た腊葉の數は二千以上だ、

道路

優曇華

果樹の學名

腊葉

此處の腊葉は盡く毒液に浸してある、何年何月毒液に浸したと云ふ事が記されてある、腊葉は一と括りづゝ亞鉛の箱に入れて保存される、排列の順序はアルファベット順であるから檢索には至極便利がよい、其數は十萬と稱せられて居る、博物館は主任はハレトン博士で二人の助手一人はドクトル、スミス氏とて蘭の專門家で、一人はバッカー氏で外に羊齒專門のシー、アール、ダブリユー、ゲー、ファン、アルデルウエルト、ファン、ローゼンベルヒ氏と云ふ恐ろしい長い名の人がある、此人が耳が遠いので常に聽音器を耳に當てゝ話して居る、此人の細君は永く横濱に居つたから日本語が自在であるとの事で、此人も時々「アナタ、コレハ」などやられてまごつく事がある、外に爪哇人の腊葉係が二人小使が三人ばかり腊葉の整理にかゝり切て居る、僕が何か見たいと思ふものがあると、これを書きつけて出すと爪哇人の係りが直ぐに取り出してくれる、圖書館で本を引き出す樣に直ぐに出てくる、ハレトン博士は朝は七時から二時まで日曜も休みもなく研究して居られるが仕事は蘭領印度植物の圖譜だ、此人は痔せ形の老人で丁寧親切な人だ、博士だからとて爪哇の植物が一と目で分ると云ふものでない、自分で鑑定が附かぬと助手のバッカー氏に命ずる、此人は蟲眼鏡で必要の部分を見ると直ぐ何の所屬と云ふ事を示してくれる、隣室には若い婦人が一人仕事をして居る、僕が標品室に通ふには是非此婦人の室を通らねばならぬ、此人は主に腊葉の整理をして居る。

森林植物館

別に林務課所屬の標品室が一棟ある、植物博物館、圖書館、森林植物室、實業博物館の建物は皆隣り合せて居る、森林植物館はコールデルス博士の所管で博士夫妻は一室で研究して居られる、博士は森林植物の解説を書いて居らるゝと他の卓で夫人が目錄を作つて居られる、此標品室は其數四萬と云はれ盡く博士の採集に係る爪哇植物及セレベス北部の植物である、階下の二室に所藏されて居るアルコール漬標品の如きは實に整理されたもので博士の大著「爪哇森林植物誌」の策源地である、博士夫妻は實に親切な人で僕と同じ宿に下宿して居らるゝから日夕顏を合はして居る、何かにつけて親切に取り扱はれる、僕が贈つた日本の錦繪がひどく氣に入つて早速立派な額面にして書齋に飾られた。

園長の厚意

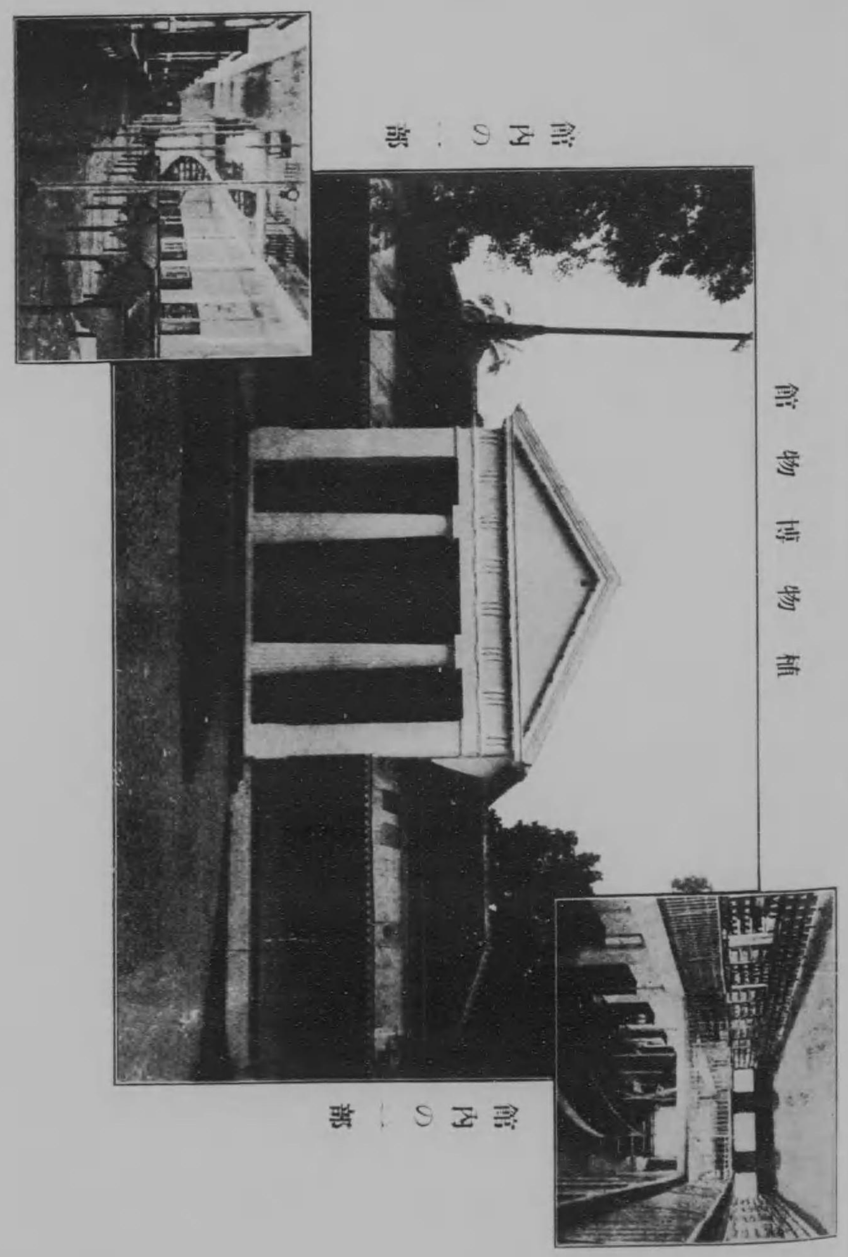
園長のケーニングスベルヘル博士は動物博物館の一室で事務をとられ居るが色々賴みたい事があると公室に出掛けるが實に親切な人で自分で案内をしてくれたり又出來る丈けの厚意を盡してくれられる、外國から來た研究者に對する厚意は實にありがたいと思ふのである、此人は動物學者で事務を執る傍らに研究に

餘念がない、暇さへあれば公室で顯微鏡をのぞいて居られる、圖書館は又完備したもので植物學の本なら見たいと思ふものは大抵所藏されてある、圖書係の人は親切なもので僕が見たいと云ふ本が他の人が讀んで居る時には繰り合せて貰つて翌日には必ず僕の手に屆けてくれる、見たい本が澤山あるが讀む時間には限りがある、併し出來る丈け貪つて居る。

園藝部長

園藝部長のウキグマン氏は永年勤務者で植物園の重鎮である、同じく親切な人で僕が欲しいと思ふ植物があると云つたら種苗係に紹介して此人の希望するものは何んでも與へよと命ぜられた、又園長より園內植物採收の特許を與へられた、併しいくら標品に欲しいと思つても貴重なものは手を出せるものでない、欲しいと思ふものがあると書き附けて園藝部長の手元に出すと係りの瓜哇人が直ぐ採集してくれる、例へば植物園で唯一本の「キゲリア、ビンナタ」と云ふアフリカ原產の植物がある、葉は複葉で實が三四尺もある果梗の先きにぶらさがつて居る頗る奇妙なものだから、これはみやげに博物館に陳列して置かうと思ふから標品所望の由申込んだ、これ丈けはやることが出來ぬと云はれるかと實に危ぶみながら請求したが僕の待つて居る間に大枝一つ花も附き實もあるものが手渡しされた。

鷹詰に似たるキゲリア樹



館內の一部

館內の一部

館物博物植

世界唯一の蘭

園藝部長の官舍の前に大なる日蔭室がある、こゝには貴重なる蘭科、天南星科の見事なるものが築山風の所に植ゑられガラスの屋根で被はれてをる、こゝに入るとどこが熱帶かと思ふ程冷しい心持てある、蘭や蟻の巣玉木がある所には貴重な鉢植が並べられて普通は見物人を入れぬ所てある、僕は何時でも自由に此處に入つては珍らしい植物を見て廻る、葉は臺灣の胡蝶蘭に似て花は紫て香氣の高い一種がある、之を一株日本に持つて歸つたら愛蘭家は飛び附く程歡ぶだらうと思つたがウキグマン氏に相談して見たが取扱が非常に困難だから途中の手當がむつかしからうと云ふのて斷念した、此處に唯一本と云ふ蘭の一株がある、ドクトル、スミス氏の命名したものて「ハラノプシス、ジガンテア」と云ふものてある、葉の長さが一尺五寸幅が三四寸もあるものが二葉て今花の莖が出て居る、ボルヲオ中部の高山產て植物園中の珍物てある。

午後はきまつて雨が降る、雨も思ひきつた降り方て雷電が必ず之に伴ひ誠に男らしい降り樣だ、それも一時間か二時間て已む、雨の晴れ間に植物園を駈け廻つて居るが何度觀ても飽きぬ所は日蔭植物を栽ゑてある大樹林の中と羊齒區て、木生羊齒の茂つて居る處に入ると臺灣の蕃界にても入つた樣に思はれ、大蛇か猛獸が

新發見の植物

出ては來はせぬかと思ふ程だ。持參の臺灣植物も比較研究をしたいと思ふものは一と通り終了して、今迄疑問であつたものて大分明らかになつたものが多い、旅行中採集した必要のものを整理して自分で調べて見たが、中には隨分見當の附かぬものもある、トサリ山ブロモ火山の分はドクトル、コールデルス先生が見てくれ

茜草科植物は專門のドクトル、バレトン先生が手傳はれ、羊齒はローゼンベルヒ氏、蘭科はドクトル、スミス氏、其他助手のバッカー氏を煩はしたものがある、夫て僕の手て調べ上げたものも隨分ある、採集品中植物博物館にないもの十種以上ある、調査が行き屆いた瓜哇島のものても四種は確かに僕の新發見と思ふものがある、其中てセレベスの羊齒の一種、茜草科の一種、瓜哇の蘭二種は新種と確定され、學名も定められた

アスピヂウム、カワカミイ　（羊齒科）　ローゼンベルヒ氏命名
オヒオリザ、マロシアナ　（茜草科）　ドクトル、バレトン氏命名
マレヲラ、カワカミイ　（蘭科）　ドクトル、スミス氏命名
ガレヲラ、アヒニス　（仝）　ドクトル、スミス氏命名

これは近い内に發表される事になつて居る、二種までも外來の採集者たる僕の

姓を取りて新發見の名譽を表されたる厚意を多とするものてある、かくて僕はかかる動機て一層の知遇を辱うするに至つたのは甚だ幸と云はねばならぬ、園長も園藝部長もドクトル、バレトン先生もドクトル、コールデルス夫妻も僕の新種發見に就ては悅んてくれ、學名の發表に就ても祝つてくれられた、これが小さいことの樣てあるが其實將來の連絡の上に甚だ好都合の事て、僕一個人の利益に止まらぬ事と信ずるのてある。序に書くが植物園は植物博物館、植物研究室、植物園、動物博物館、藥物研究室、水產研究室などに分れて居るが、來年度の經費豫算は十三萬九千五百十八圓蘭貨て其內植物園の分は三萬一千六百七十八圓てある、園長の俸給は一萬二千圓各部長は三千圓から六千圓てある。

僕は此二週間は隨分と勉强した積りてある、身體は疲れて居るが心は頗る愉快てよい點のみ目につく、併し此樂境も愈〻一兩日の內に別れねばならぬ時が迫つて居る。

（附記）前掲余が發見の植物に就てドクトル、スミス氏は蘭二種を植物園年報第九卷（千九百十三年）同第十四卷（千九百十四年）ローゼンベルヒ氏は羊齒一種を同年報第七卷（千九百十二年）に發表され、ドクトルハレトン氏の茜草科植物は

植物園圖譜て發表せられたのてある。

幾那栽培地

マラバー行

十二月三日　嬉しきものは人のなさけなり、知る人もなき他郷の空に旅するものの殊更に嬉しく思ふは人の親切なり、談る言葉の不十分なるより思ふ事も得云はず、面白からぬ感情にあらぬ心の湧き出てて不快に思ふ事も多きものなるが、余が三月の旅を蘭領に送り、心よりうれしく思ひしはボイテンゾルグの地にぞありける、其土地は學者の淵叢と稱せられ皆一流の學者を集めたる處とて、異國の後進がたま〳〵來遊しては如何なる待遇を受くべきか多少の心遣ひもありけるが、さて逢つて見れば皆打揃ひて親切なる人々にて皆出來得る丈けの厚意を以て諸般の便宜を與へらるゝに心も勇み、調査も思ふ儘にて快よさ謂はん方なし、扨も先きの日に幾那栽培地を訪ひける折には主任の不在とて聽くべき事も漏らしたれば、再び訪ひて又もや其栽培の有樣を見んものと農務局に至り長官リビング氏に逢ひて紹介を得んと思ひしに其人スマトラ出張の留守なれば園長のケーニングスベルヘル博士に計りしに、自ら長官代理に紹介し此事公けに申送り置くべければ

と云はるゝに、今日の日曜日山の手線の鐵道にて夕方バントンに著き、翌くる四日午前七時に三頭曳の馬車にて出發し三十哩を隔てたるマラバー山腹のテンジロアンの栽培地に到り著きしは十一時なり、博士ラント氏出迎はれ直ちに栽培地を案内し、幾那樹の種類此地にての栽培種など實物につき說明あり、病害蟲害の事も委しく說き示され、樹林内の徘徊一時半にして引き返して研究室を見顯微鏡など窺き見る折柄に塲長より待居る旨の使あり、山上五千二百尺の處に建てられたる官舍に到れば、老塲長フアン、レルスム氏自から玄關に出迎へられ、夫人も愛想よく接待されたり、次ぎに紹介せられて握手せるは夫人の令妹なり、外に來客もあり、夫人は親しく客室に案内せられたれば先づ衣服を整へて食堂に入る、卓上には主人夫婦と家族及び來客ともに六人なり、卓上の談話來客と主人側は和蘭語、余と主人夫妻とは英語、主婦と給仕とは馬來語なり、午後大雨盆を覆すばかりなり、太古以來斧入らざる處女林を後庭としたるけしき何とも形容しがたく、木生羊齒の高く其葉を擴ぐるが大雨に打たれゆらめく樣殊に趣きあり、夕方雨漸く收まれるを以て採集罐を携へて前庭に出づ、幾那官林を一と目に見渡し、遠くはマラバーの茶園を見る可く山々谷々雨後の霞立ち込めたる絶景に心も伸びる思ひして暫し我を忘

茶の改良

六歌仙

れて眺め入るに、余の姿を見付けて老人は常着の上に白衣を羽織り小雨尚降るに先きに立ちて、雨にぬれたる山路をたどり、幾那樹の一年生木二年生木三四年のもの又新植のものなど示されて茶園の一區に出づ、此の茶園は場長の丹精こらして新種の改良を圖れるものにてアッサム種に接木を施せり、茶樹其丈け一丈内外枝葉能く茂り誠に見事なるものなり、之れより更に登りて處女林に入る、此處は六千尺の高地なり、瓜哇釣船草の紅花露にぬれて其花更に艶なるが路もせに咲き亂る、老人其一花を摘み口にせるシガー煙をかざせば不思議や花の色綠りとなる、笑つて曰く此花アルカリ性にあへば此の如しと、林中珍奇の植物多く、露にぬれても尚且採集の手を緩むる能はざりき、折柄夕景時とて森中ほの暗くなるに驚き急ぎ山を下れば官舎の後庭に出てたり、此處に菊科の一灌木あり、白花美しく咲き亂る、夜の食堂は八時にてこたびは家族のみにて余を合せて五人其三人は女性なり、食卓は例によりて夫人の快活なる談話に花咲き賑やかなり、卓上を飾る花は珍らしくも香菫菜（ニホヒスミレ）と薔薇なり、此花も此香りも熱帶の平地にて見がたきものなり、食後は夫人の居間にて茶あり、茶器盡く日本の陶器なり、六歌仙の繪あり、爲めに話題を之に取る、瓜哇の閑境に日本の歌人を說く旅中の逸話たらずんばあらず、夫人曰く日本

幾那樹苗圃

瓜哇マラバー山官營幾那樹林

サクシルブラ
幾那樹

レゼリアナ幾那樹

レゼリアナ種
幾那樹

人の來り訪ふもの四人と、余は其二人を知れり、夫人曰く一人は工學者なりきと、主人と話題を幾那に移して聞く所あり、余が需むる所は農務長官より移牒し來りしことゝとて皆快く承諾せらる、此一家の懇切なる他鄉他國人の家に在る心地せず、九時辭して我室に歸る、室に電燈あり五千尺の山上此設備あり、宜なり政府事業として利益ある幾那事業の主腦地とて官舍の裝飾亦善美を盡せるは寧ろ當然の事と云ふべし、在勤の學者場長の下に植物學者と化學者あり栽培係あり中には二十八年の勤續者もありと云ふ。

レルスム氏

夜冷氣身に浸み室内六十八度毛布を重ねて尙寒し。レルスム氏は一千八百五十四年ウトレヒトに生れ一千八百七十七年蘭領印度の陸軍藥劑官に任じ一千八百九十二年に幾那栽培の監督者となれるが、氏は此事業には最も熱心にして幾多の改良を實行せらる、而して幾那樹のレゼリアナ及びサクシルブラ種は引續き盛に栽培せらるゝが、前者は幾那分を含むこと多量なるものにして後者は生育速かにして稍平均したる含量あり而も有力なる藥効を有するものとせらる、オヒシナリス種の栽培は全く中止せられ、ロブスタ種は或る年間栽培せられたり、蓋し此種類はサクシルブラとオヒシナリスとの雜種なり、レルスム氏は化學分析上最も幾

那分に富みたるものを選定して栽培せるがレゼリアナ及ロブスタ種の稚木の根皮は比較的多量のキニイデンを含有し、其最多量は三、一五パーセントなりと云ふ。

ラント博士

十二月五日　朝夙くラント博士の案内にて幾那苗圃を見、歸れば八時にて一家は我歸るを待受けて朝の食堂を開かる、九時辭して馬車に乘る、老主人自ら階を下り夫人は玄關に立ちて見送らる。

此一家の人々には何となく別れの惜まるるは心よりの懇待を受けたればなり、主人が手づから包める幾那種子三種の紙包みと樹皮標本の一函と年報十冊を贈らる、あゝ此贈物こそ余が幾十里を遠しとせずして來り訪ひし目的物にして、其純良なる種子を得んが爲めに苦心したる日頃の望みの遂げられたるに感謝して快くも此山を下りぬ、研究堂にラント博士を訪へば博士亦愛想よく手を握りて別れを告ぐ、これより自然下りの屈曲せる坂路を駈け幾百町歩の幾那樹林を通り過ぎて山を下れば、山上場長の官舍白堊美はしく森の間に見え遠山近峯雲霧往來して雨將さに到らんとす。

幾那官林

幾那官林は七箇所あり、總面積三千百五十町歩にしてテンジロアンの本場は南緯七度十分東徑百七度三十六分の所にて海拔五千尺なり、一昨年の雨量三千三百二十八ミリメートル平均溫度攝氏十八度にて最高二十二度最低十二度なり。

瓜哇の幾那栽培は一千八百五十四年以後の事にて、南米秘露より其種子及苗を移植したるものにて、植物學者バスカールの探檢となり、苦心慘憺の結果幾那園を起し、一千八百六十年の末には九十四萬本の苗を有したるもの爾來幾多の研究を重ね瓜哇に適したる種類を發見し今日の盛況に至りたるものなり。

毎英町千九百本にて一年の樹皮收穫二百萬封度にして硫酸幾尼涅六乃至七パーセントを含み、一年の利益は約三十五萬圓なりと云ふ。

最近の統計に依れば政府の栽培園内の幾那樹數下の如し。(一九一三年)

種類	苗圃	圃場
レゼリアナ	三一〇、〇〇〇本	六、三〇〇、〇〇〇本
サクシルブラ	二、一〇〇、〇〇〇	二六七、〇〇〇
ハイブリド	一、六〇〇、〇〇〇	四三〇、〇〇〇
ロブスタ	六〇、〇〇〇	九〇〇、〇〇〇
計	四、〇七〇、〇〇〇	七、八九七、〇〇〇
	一一、九六七、〇〇〇	

幾那樹の栽培

ドクトル、ラント氏に就きて聽きたる栽培上の要項次の如し、

幾那栽培の適當なる高度は五千尺にして、四千尺乃至六千尺までは生育し得べし、栽培地は三千尺乃至八千尺まで爲し得べきも良好の成績を期し難し。

土壤はテンジロアンに於ける最も能く成功したるものは火山質の粗壚土にして、有機質を多量に含有するものにて燐酸及窒素分を有するを可とす。

苗床は土壤を深三四呎に掘り森林中より拾ひ集めたる新葉を入れて其長六十呎幅四呎に切り低き屋根を有する日覆を設け山の傾斜面に作り、日光、降雨及び風を防ぐ。

リゼリアナ種の種子は薄蒔にし二三グラムを方三呎の床に蒔き少しく土を被ひ日々灌水をなす、但し苗床は濕潤ならしむべきも黴菌を生ずる程多量なるべからず、五六ヶ月後約一寸の高さに達したる時他の床に移植せらる、此場合は三吋距離となし約六ヶ月間其儘になし置き後間引をなして取り除きたる苗は更に他の床に移し殘れるものゝ距離を六寸となす、幼苗六寸乃至八寸に達せば本圃移植の

準備をなす。

サクシルブラ種の播種は同一方法の取扱をなすも主に雜種を作るリゼリアナ種の接木用となすなり。距離を十二寸とし二年生まで殘す、然る時は高さ約三尺に生育し幾那分の含量多きレゼリアナ種より接穗を得莖の下部に接木し接木面には蠟を塗る、此接木は六月若くは一年の間に移植に適するに至るべし。

幾那の栽培地は傾斜の丘腹にして排水好適なる處に階段狀をなして作らる、而して整地の際有害なることは燃燒にして之が爲めに有機物の大半を失ひ窒素の損失に伴ひ炭化植物の表層を作ることあり。

苗の植附は一英町四千本の割合にて移植の際幼苗を草籠に植ゑたる儘を佳とし約三年にして弱きものは之を植換へ健樹のみ殘すべし、六年乃至八年頃は幾那分量最も多き時なり、個人經營のものは七八年の樹齡に達すれば一區域の全部を更新する方法を執れり、採取の際は根も掘取り樹皮は重き木槌にて打叩きて剝ぎ取りて乾燥するものにて剝皮の作業は婦女子の仕事なり。

製茶工場

再度の訪問

さても馬車を急がせてマラバーの村に入り更に廣き茶園の區域を見分け易く境界の要所々々に紅竹を栽ゑたるを眺めながらマラバー製茶會社の工場に着く、此所は三月以前バンドンより來り參觀申込みしに官廳よりの紹介なき故を以て謝絶せられ空しく歸りたるにて心中不快に堪えず、再び來りて此不快を癒さんものと兼ねて思ひ定めたりしが、幾那園に到りし序に今日は官廳の正式の紹介を有し且はレルスム氏の添書をも携へて乘り込みし事とて、技師長迎へて案内しくれ工場は殘る所なく説明し又製産調査簿まで取り出して示しくれ、三月以來の不平の溜飲を下げたる心地せり、蘭領印度にて意地の惡き處に行き當りたるが最後見たき工場など中々に見難きことあるのみならず、官廳などにても調査の便を失ふ事あり、余がボルヲオにて税關にて輸出入物の調査をなしかねたる事もあり、見たしと思ふ事、調べたしと思ふ事は能く〳〵徑路をたどりて適當の道筋を通りて行き當らざる可らざるなり、それは扨て置き此會社昨年度の製茶總額は左の如し

製茶額

種類	産額（キログラム）	一封度龍動原價（ペンス）
ペコー	八二、七六四	九、四分の一
ブロークンペコー	八二七、八二三	九、二分の一
ファニングス、ブロークン、	一〇九、三七〇	九、四分の三
ブロークンペコー	七二、九三四	八、四分の一
スウチョン	一、〇四〇	八、二分の一
トーラン（馬來）即ポヘア	三七、四一九	八、四分の三
計	一、一三一、三五〇	七、四分の三

生葉の産額を聞くに圃場に依りて多少の差あり、

植附年	面積（ヘクタール）	生葉産額（キログラム）
一九〇〇	一三、二四〇	九四、二四二
一八九九	一四、五〇〇	一〇九、二一七
一九〇一	八、六八〇	七一、〇二二
一八九九	一五、七六〇	一三五、四二〇
一八九七	一二、六八〇	七六、九九六

總面積千二百ヘクタールにて生葉五、二一〇、二七七キログラム製茶額は前掲の如く一、一三一、三五〇キログラムなり、一キログラムの生産費は凡そ三十八仙にて但し龍動市價九十五仙に當る品なり。

附屬の建物は極めて贅澤を盡したるものにて客室、食堂は勿論圖書室の如きも立派なるものなり、此會社の事は前年藤根技師の報告臺灣農友會々報に載せられたり、會社の庭に日本の澁柿あり珍らし。

瓜哇シャクナゲの花

見るものは見見本の茶など貰ひ受け待たせ置きたる馬車に乗りて玆を立ち出てしは十一時過ぎなり、途中雨となるに急がせて四千五百尺の谷に下れるに、不圖川向ひの大木の幹の上に緋色の花美はしく咲きたる石南を見、これぞ所謂瓜哇石南なるべしと馬車を停め道行く農夫を呼び止めて木に登らせて採らせ見るに果して其花なり、緋色にして黄味を帯び實に美麗なる名花なり、此邊珈琲の老木多く皆瓜哇種なり、民家の周りに栽ゑたる肉桂の若芽花の如く紅きは目覺むるばかりなり、農家夥しく馬鈴薯を作る、途中急雨あり尋て大雷雨となり、耳を裂く雷鳴おどろおどろと鳴りはためき雨は篠をつくが如く總身雨に濡れ而かも馬を停むることもなりがたく、今にも落ちかゝるかと思ふばかりの雷鳴の間を電光に膽を冷しつゝ驅くること一時間にて雨は已み、今迄の荒れは忘れ果てたる如き天氣となる、かゝりせば一時間は何處にてか避けんものと思ひしも過ぎたるは詮なし、實に急がずば濡れざらまじを旅人のあとよりはるゝ野路の村雨なりき、三時バンドンに著き先づ荷を解き衣を乾かし雨に濡れたる身體の此後の祟り恐ろしく日頃に飲まぬ強きウキスキー酒を取り毛布にくるまりて一休みす。

大雷雨

十二月六日　雨にぬれたるものども取り擴げて乾かし又洗濯させなどす。日本人の寫眞屋を尋ねて幾那樹の花枝など寫眞せしめ小川商店に立ち寄りしに、今宵郵船會社の谷井氏陸行してこゝに到るべしと聞き、思はぬ處にて又も知人に逢ふことよと奇遇に悅び此夜停車場に出迎ふれば、一行も思ひがけずとて相悅び共に同じホテルの食卓を共にして相談らふ、異郷圖らずも知人に遇ふほど愉快なるはなし。

再度の奇遇

高山植物園

チーアンジャー

十二月七日　午前小川商店主の案内にて谷井氏と共に市中を見物し午後一時半の列車にて出發す、小川氏及び店員見送らる、行くこと二十分にしてバダランン驛にて谷井氏に分れてボイテンゾルク線に乘り換ゆ、バタビヤ線と谷を隔てゝ平行し其白く塗れる長橋の蒼綠の間に懸れるなどよき景色なり、タゴガポー驛に印度護謨の大木あり壯觀なり、此邊センダンの稚木多し、山間皆能く拓かれて水邊沙胡椰子を栽う、福神草の藪蔭に咲く花美はしく旅情を慰め、四時チーアンジャー驛に著く、海拔一千七百尺の處なり。

客待せる二輪三頭曳の馬車所謂「カロボロム」を駈けさするに道は次第に登りに

て並木はカナリヤ樹と火焔木にて共に美はしき並木道なり、殊に後者は鮮紅色燃ゆるが如き花、樹梢に咲き落花路に散りて紅なり、一時間にして「ケデー」山の裾野に達す、左に見ゆるは其山にて八千九百尺の岳頂は雲にかくれて半腹以下の姿のみなり、路傍の民家皆竹の壁に赤き瓦葺きたるにて緣あり、屋邊に波羅蜜、甘蕉、カヽオ、檬果、椰子の類を栽ゑ、竹林茂り砂糖椰子も多く、山畑能く拓かれ水田あり、タピオカ畑あり、野花に瓜哇釣舟草の紅花極めて艶なり。

山は次第に高く眼界益々開けて眺望云はん方なく木生羊齒多く、景色更に趣きを添ゆ、行くこと半時にして「チバナース」の村に入る、總督の別莊あり、之より少し下りて六時「シナグラヤ」のホテルに達す、一の保養所にして脚氣患者の轉地療養所なり、海拔三千六百尺庭園廣く樹木茂り眺望も佳く水清く氣爽やかにして眞に一幽境なり、室に導かれて未だ衣を換ふる間もなく大雨到り雷鳴りはためく、僅かの時間にて此雷雨に逢はざりしぞ幸なる、夜は靜かにして流れの水音のみ耳に入る、ホテルは二階建にて軒數も多く遊戯室、圖書室の設備も備はれり。

十二月八日　午前七時過一人の土人苦力を雇ひ案内せしめて高山植物園に登る、細路傳ひに急坂を上りて「チボータス」の村に到る、傾斜地皆水にて清水縱横に奔

山上の保養所

高山植物園

溢す、藿香蔥（ブロウフウ）の紫花、瓜哇ヒョドリの白花、瓜哇釣舟の紅花、ランタナの緋花路邊に咲き亂る、行々採集しながら進むこと一里餘にして電線架けたる本道に出づ、一溪あり木生羊齒頗る多し藪蔭に蘭草あり誠に意外なり、此邊並木にヒメツバキを植う、珈琲の老木あり蘚苔其幹を被ふ、之より幾許もなく植物園の構内に入る、山は高く四千尺の上なり、一池あり水清く緣林の蔭を映じ水邊カミカヤツリ茂り水面睡蓮の花を浮べ、紅紫の花木多く其周圍を飾れり、芝草みごとに刈られて針葉樹のそこ此處に立てる眞に深山の趣きあり、之より更に進めばアロウカリヤ樹の並木あり、道は石を敷き詰めたるが皆苔蒸せり、幾町ならずして實驗室の入口に達す、其前面に奇形の植物二株あり其莖棕櫚に似て高さ二丈許り其頂端に細長き禾本狀の葉簇生したり是れぞ三好博士の所謂薄木（スキノキ）にて濠洲原產の植物にして奇形なるより名高きものなり、折柄花園に居れる二人あり、一人はボイテンゾルグにて逢ひたるドクトル、ブラアムド氏一人はドクトル、エルスト氏なり、共に研究の爲めに滯在するにて植物園の監督助手も出て來りて厚待せらる、苦力を返へして緩々滯留し給へとて寢室に延く、寢室は四あり外に實驗室と圖書室あり、入口の緣に立ちチョコレートを飲みてあたりの風景を眺むれば、空は晴れ渡りて蒼く日光强く針葉樹を